

麗澤教育

第17号

平成23年(2011)4月

特集 自校教育



『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。年1回発行しています。

麗澤教育 第十七号 〈目次〉

フォト・アルバム 新校舎「あすなる」……………6

〈特別寄稿〉

新校舎「あすなる」とキャンパス・デザインのコンセプト……………中山 理 8
 —「森と共生するキャンパス」

〈特集〉

自校教育……………16

- 麗澤スピリットとキャリア……………真殿 達 17
- 「麗澤スタディーズ」オリエンテーション授業……………櫻井 良樹 24
- 大学周辺を歩く……………山川 和彦 30
- 麗澤スタディーズ……………田中 俊弘 35
 - 自校史教育の現場から……………川久保 剛 41
- 「麗澤スタディーズ」小考……………塚田 紀美 47
 - 自校教育と一次文献……………学生モニターとして参加して……………52
- 『大学生のための道徳教科書』……………57

フォト・アルバム この一年……………72

〈特集〉

新校舎「あすなる」の完成……………74

- 麗澤大学新校舎「あすなる」……………炭崎清太郎 74
- 新校舎「あすなる」設計に際して……………柳瀬 寛夫 80
 - 開学五十周年記念の新校舎を設計させていただいた榮譽に感謝して……………生方 亨 86
- 教育奨励賞を新設……………86

谷川新任教員研修に参加して

- 成瀬 猛 92
- 木谷 宏 95
- 岩澤 知子 98
- 阿久根優子 101

【卒業生の今】

「挑戦！」……………	本田 寛輔	104
麗澤大学での出会いは私の人生の転機……………	陳 玉雄	110

【麗大生の今】

〔バレーボール部〕		
私たちのバレーボール部……………	関口 崇	114
〔サッカー部〕		
単破 <small>たんぱ</small> 複創 <small>ふくそう</small> ……………	関口 和宏	117
〔箏曲部〕		
同好会から部へ……………	日色 彩子	121
〔音響・照明委員会〕		
感謝の心……………	川手 飛鳥	125
〔学友会〕		
将来に繋げていきたいこと……………	西本 瑠依	130

〔麗陵祭〕

麗陵祭を通して、伝えたいこと……………	椎谷 太一	133
「日銀グランプリ」への挑戦を通じて得たもの……………	武内 瑛紀	137
世界一周の旅……………	大野 拓哉	142

【コラム】

知恵と工夫に心を添えて……………	長井 孝介	149
麗陵祭実行委員会の活動……………	田島 正幸	153
——引き継がれる伝統、そして絆		
〈温故知新・その九〉		
千葉外事専門学校の発展的解消……………	池田 裕	160

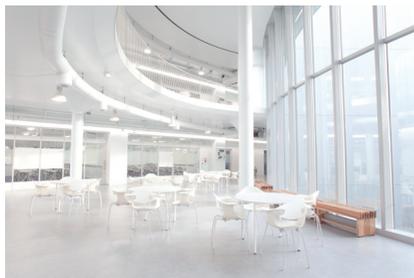
*寄稿していただいた在学生の学年は、平成二十二年度のものです。



カフェラウンジ(2階)



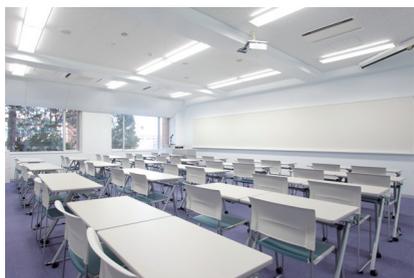
Iラウンジ(2階)



3～4階吹き抜け



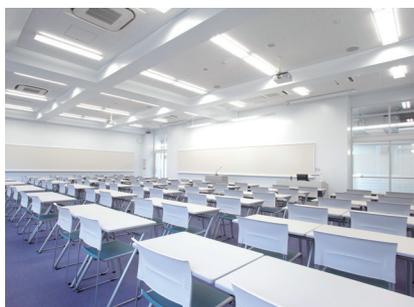
コミュニティサークル



教室



5階から階下を望む



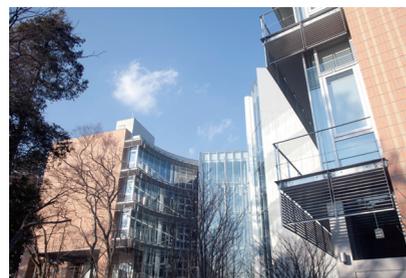
教室



やすらぎの広場から



校舎外観



校舎外観



正面入り口



竣工式テープカット(2010・12・21)



記念植樹(2010・12・21)



自校史コーナー(1階)

農林として利用され始めると、スタジイ林はきわめて少なくなっていくということだ。現在、大学のキャンパス内では、バス通りに面したフェンス内にスタジイが数本見られるくらいである。

スタジイ林減少の最大の理由は、この樹木が、他の有用植物と異なり、生産性が低く、人間の生活にとつて利用価値が劣っていたからである。この頃から、スタジイ林は、アカマツ林や、コナラ・クヌギの落葉広葉樹林へと変貌していった。おそらく廣池学園の植生も、ほぼ同じような経過をたどったものと考えてよからう（参考・井田孝著『廣池学園の植生』〔平成十四年 麗澤中学・高等学校発行〕、『麗澤の森』〔平成十九年 麗澤大学出版会発行〕）。

厳密にいえば、新校舎の建設地は、人の手が入っていない「原生林」ではなく、すでに植林されたものが、その後久しくそのままの状態で放置されてきた人工林だと言える。実際、建物が建つ前の林に足を踏み入れてみたが、日光がほとんど入らない鬱蒼とした場所には、スギであろうか、朽ち果てて倒れ

たままになっている大木も何本か見受けられた。森林の環境保全という点からすると、そのような目的で植えられたスギなどは、むしろ伐採した方が、植物の環境には望ましいのではなからうか。必要以上に繁茂した樹木を伐採すれば、森には光と風が入り、落葉樹の成長を助け、より生態的な意味で自然の森に近づくことになるからである。植生として「自然の森」に帰するには数百年かかる。それならば、そのまま放置するよりも、積極的に森を管理することによって、常緑落葉樹の混合林として植生の回復を目指そうというのが、今回のコンセプトである。換言すれば、日本に伝統的な「里山」の発想の現代的展開と言えよう。

森と大学キャンパスの共生——三つのコンセプト

今回の新校舎新築工事の提案書（岡田新一設計事務所）をもとに、新校舎の基本コンセプトを、さらに具体的に紹介しよう。

(1) 「里山」のコンセプトによる森の回復

今回、建設地に「里山林」として回復される林は、今までの鬱蒼とした、人を寄せ付けない「単色のな林」から、人と共生する「複色のな林」へ変貌し、季節を楽しめ、景観的にも美しい、明るい森になる。設計者には、二十二年度の麗澤祭のテーマでもあるように、文字通り、樹木の「カラフル・メーカー」役を演じていただいたというわけである。そのため、先ほども述べたように「木を一本伐つたら二本植えよ」という廣池理事長の方針に従い、花や実のなる木を、既存樹とバランスをとりながら補植する。その際、注目すべきは、四季折々の「日本」の自然を感じ取れるように、落葉樹を増やしたり、補植する植物の色や種類までも考慮したことがある。

(2) 建物ではなく樹木優先の建築設計

もちろん、校舎の機能や面積を確保する関係上、ある程度の樹木は伐採しなければならなかったが、前述した林の樹木を調査し、伐採する樹木と残す樹木をすべて選定する作業を行った。その数は全体で

五百二十本に及び、そのうち百七十五本の伐採を決めた。伐採した樹木のうち、病気が一本、虫食いが七十八本あり、これは伐採樹木の四五パーセントにあたる。そのようにやむを得ず伐採した樹木は、木材として、テーブルなどの教育機器の材料として加工したり、建築材として活用したり、チップにして地面に敷き詰めたりして、有効利用に供された。建物と樹木の関係で言えば、建物を建てるために樹木を伐採するのではなく、残すべき樹木と伐採すべき樹木をよりわけ、森の回復のために伐採して生じた空間に、建物を挿入し、建物と樹木の調和をはかるというスタンスをとったわけである。建物の形状が斬新なのはそのためであり、樹木の伐採は最小限にとどめるようにした。これは言うまでもないことだが、最大の「省エネ」環境にもなっている。

(3) 学び・癒しの空間としての森

(2)により、建物と樹木が接近すると、建物から自然観察が可能となり、樹木そのものが学習の対象にもなる。樹木と建物は垂直的に並立するので、学生

は、建物の階ごとに、樹木を根系部から頂上部までつぶさに観察でき、自然観察眼さえあれば、樹木の部位ごとの形態の相違はもとより、生物の棲み分けなども楽しめることになるだろう。それは学生にとって癒しの空間であるとともに、ちょっとした学びの機会にもなる。

このように、この新校舎は、学生が学習する場を、単に提供する建物ということに止まらず、自然環境との共生をコンセプトに、その外部も含めて学習空間を提供しようとする試みである。

新校舎ならではの注目エリア

(1) 人と自然が共生する三つの広場

新校舎を囲んで三つのコンセプトの異なる広場、「つどいの広場」「やすらぎの広場」「くつろぎの広場」を設置した。三つの広場の中で一番広い「つどいの広場」はサークル・デッキと樹木でその周囲を囲んだ斬新なデザインで、大勢の人々が集えるように芝生が敷かれている。ここには、ムクノキ、イヌ

うに「觀賞するための庭」があるが、この広場は機能としては日本的な「緑を觀賞してやすらぎを得る広場」と言えるかもしれない。「くつろぎの広場」には、そこに集う人々がくつろぎ、春には花見が楽しめるように桜の木を配置したり、中心にカイノキを植えたりと、常緑広葉樹と落葉広葉樹とのバランスを考えた景観に仕上がっている。

(2) 自校史コーナー（二階）

「くつろぎの広場」からピロティを通って校舎に入ると、本学の歴史や海外提携校との交流を展示した自校史コーナーがある。椅子やテーブルも配置されているので、くつろぎながら本学のアイデンティティーを学べる空間である。

(3) 学生総合インフォメーション（二階）

本学がこれまで目指してきたワンストップ化を支援する場所で、本学の種々の情報を総合的に収集できる。

(4) 一体化したカフェ・ラウンジとライラウンジ（二階）

これまでは図書館の中にEラウンジが設置され、

シデ、シラカシなどの樹木とともに紅葉が美しいハナミズキが植えられている。広場は一階のピロティとも直結し、校舎と一体感もてるような設計になっている。サークル・デッキは、「かえで」（一号棟）とも陸橋で連結されている。この陸橋も建物と建物をつなぐだけでなく、樹木との景観的調和を考え抜いたデザインになっており、そこを渡るだけでも気分転換になる。「やすらぎの広場」は、尾瀬の木道のようにウッド・ロードを渡して横断はできるが、中には足を踏み入れずに校舎の内外から眼で見えて楽しむための広場である。この広場にかかる階段の踊り場も、自然との一体感を損なわないように、落葉あるいは花びらのデザインになっている。株立ちのよい落葉樹を中心にしたのは、建物が北側にあるので、南側に落ちる影と光のコントラストを柔らかくするためである。広場にはオーナメンタル・グラスを敷き詰め、植物の配色も工夫が凝らされている。大まかに言って、庭園には西洋の王宮庭園に代表される「逍遙するための庭」と龍安寺の石庭のよ

英語のシャワーだけを浴びるのを主目的にしていた。新校舎では陸橋を渡れば、そのままカフェ・ラウンジと英語以外の他言語も学べるEラウンジに入れるように設計され、壁の大部分をガラス張りの開閉戸にして、より外に開かれた空間になっている。カフェ・ラウンジには専用のPCも設置され、麗澤版インターネット・カフェと言ってよいだろう。

(5) コミュニティ・サークル（二階～五階）

各階に授業の合間に一休みをするコミュニティ・サークルを設け、学生同士、学生と教職員のコミュニケーションの場を設けた。どのサークルも「やすらぎの広場」を囲むように設計され、大きなガラス窓越しに緑と自然の風景が楽しめる。配置されている椅子は、学生と教職員の投票をもとに選定された親しみのあるデザインで統一されている。

(6) 化粧台（二階～五階）

女子学生の要望に応え、女子トイレには、小スペースながら化粧台も併設した。

その他、ライティング支援室を備えた日本語教育

センター（二階）、道徳科学教育センター（一階）、麗澤大学出版会と広報室が一体化したセクシオン（二階）など、随所に新しいアイデアが展開されている。

新校舎を「あすなろ」と命名

新校舎の建設に合わせ、新しいキャンパス・デザインのコセプトにふさわしい校舎の名称を付けることにした。今までは、一号棟とか二号棟とか無味乾燥な数字であったが、「森との共生のコセプト」を名前にも落とし込むため、校舎名を募集し、その中から相応しいものを選んだ。その結果、現在の一号棟は「かえで」、新校舎は「あすなろ」と決まった。「あすなろ」の提案者は、根本祐樹さん（経済学部経営学科三年）で、「学生が今日より明日、明日より明日後というように、一日一日成長していく様子とその中心地という意味を込めた」というのが提案理由であったが、それは本学の校歌に詠われている「日々に孜孜、日に新たなり」の精神にも合致

するとして採用が決まった。

新校舎建設とともに、学生ラウンジ新設など改修予定の一号棟も、あわせて名称を募集したところ、「かえで」と命名することに決まった。提案者は吉田健一郎先生（麗澤六十期、現在本学経済学部助教）で、「楓の果実は二つの種子が密着した姿で、それぞれから翼が伸びる翼果であることから、仲間同士で切磋琢磨し合い、成長を遂げていくことができる人材の育成を行う、という願いを込めた」というのがその提案理由である。「立派な人間になろうとする者が志を同じくする友と切磋琢磨する姿は素晴らしい」という麗澤の語義に通じるところが評価された。

小生が留学していたイギリスの大学では、デイヴィッド・ヒューム・タワーとかウィリアム・モリス・タワーとか、人名をつけたものをよく見かけたが、「仁草木に及ぶ」をキャンパス・デザインのコセプトにする本学では、植物名こそがふさわしいように思える。そもそも「麗澤」という校名自体

が、中国の古典『易経』の「象曰。麗澤兌。君子以朋友講習」（象に曰く、麗ける澤は兌びなり、君子以て朋友と講習す）という言葉からとったものである。「並んでいる沢が、お互いに潤し合い、周囲の草木もその沢の水のお陰によって青々と生い茂っている。この様子はまことに喜ばしい限りである。これと同様、立派な人間になろうとする者は、すぐれた師のもとで、志を同じくする友と切磋琢磨し、人格の完成を目指すと同時に、周囲の人々にもすばらしい影響を与えてゆくよう努力すべきである」というのがその要旨だ。学生食堂「ひいらぎ」、カフェテリア「さくら」、レストラン「まんりょう」。そして大学の校舎「かえで」と「あすなろ」。このように出揃うと、名実ともに、麗澤の緑豊かな環境と教育の中心が今まで以上に有機的な連関を形成しているような感覚を覚える。これで自然環境を大切にする麗澤のイメージもさらにアップするに違いない。

今後は、さらにコンビニに隣接したブックセンターと学生食堂を合体させた施設や、学生寮の新築も

計画中である。前者の施設は、廣池学園のシンボリックな名木になっている「なんじゃもんじゃ」（ヒトツバタゴ）なんか、使えそうだと勝手に想像しているのであるが、どうだろうか。

（本稿は「学長室ウェブサイト」のブログ「麗澤大学開学五十周年記念事業 新校舎建設と森の再生」〔二〇〇八年九月〕に加筆・訂正したものである。）

建学の精神をいかに理解し、それを実際の教育の場においてどのように展開するかという問題は、大学の個性や特色が注目される今日において極めて重要な課題です。

自校教育とは、大学の現状や創立以来の歴史、さらに創立者の人となりや思想をとおして建学の精神を理解することをテーマとしたものであり、学生の側からするならば在学する大学についての認識を深め、大学生としての自覚を高めることに資するものです。

建学の精神とは、現在そして将来における大学の教育や研究活動における個性や特色のよりどころとなっ
てはじめて意義をもつものであり、それは社会に出て行く学生の意識に及ぶことによって実質的な意味をもち継承されていくものです。

また建学の精神を学ぶことは、本来学生個人に課せられた課題であるのですが、本学においては、キャリア教育の一環として展開している自校教育や「麗澤スタディーズ」などの授業によって、正規の科目として積極的に展開しています。そこで、今回、授業を担当

する教員にそれぞれが展開する教育の課題や内容をレポートしていただきました。

さらに、本学では正規の授業のほかに学生による新入生の指導という方法で自校教育を展開しています。そこで、先年出版された『大学生のための道徳教科書』の編纂にモニターとしてかわった卒業生の手記や四月の初旬に新入生を対象とした校外授業にスタッフとして参加している在学生による手記をあわせ掲載することによって、本学における自校教育の広がりを紹介しました。

そして、建学の精神は大学のおかれている現状と常に照らし合わせ、新たな試みに挑戦していくことによっ
てはじめて意味をもつと考えられます。創立当初の精神を確認し継承しつつ、それを時代の要請に対応させて展開していくことは、大学に課せられた社会に対する責任です。したがって今後は自校教育の充実を図ることにより、卒業していく学生の「学力」や「社会人基礎力」の向上に向けて努力したいと考えています。

(麗澤大学学長補佐 井出 元)

〈特集〉自校教育

麗澤スプリットとキャリア

経済学部教授・キャリアセンター長 真殿 達



はじめに

キャリアセンターは就職支援とキャリア教育を業務の両輪としています。後者は就職部からキャリアセンターに改組された二〇〇六年度から始まった新しい業務です。二〇〇六年度を通じて教育課程での導入を検討し、二〇〇七年度に三科目を導入し、二〇〇九年度には二科目を追加し五科目となりました。

両学部共通科目で履修者数は多い時は一科目で四百名近く上っています。この間、僅か五年足らずのことですが、経済環境の変化は誠に激しく、しかも厳しくなるばかりでしたので、試行錯誤の連続

でした。同時に、変化が激しい時代だからこそ、強固な理念に基づいたたゆまぬ研鑽が求められることを痛感させられました。それは改めて学園の原点に思いを致すことでもありました。過去五年のキャリア教育について以下振り返ります。

新米センター長

麗澤大学に奉職して四年が過ぎた二〇〇六年四月にキャリアセンター長を拝命しました。「困ったな」というのが率直な思いでした。話は私の銀行員時代にさかのぼります。銀行員になって十五年ほど過ぎ

た頃からよそ様のご子女の就職を頼まれるようになってきました。バブルと崩壊そして不況へとなだれ込んでいった時期と重なりますが、まだのんきなところがあり、銀行の幹部職員がお願いすれば、有名企業に就職させることはそう難しいことではありませんでした。ただ、どんなに友好裏に話を進めたところで、悪く言えば、力を背景に押し込むのですから、好きでやることではありませんでした。

「困ったな」という思いは、事態は昔よりはるかに厳しくかつドライになっていることでもありません。現役時代に先輩が小生に頼みに来られたことが思い出されました。私は、先輩に決して不愉快な思いをさせまいと対応しておりましたが、ご本人のパーフォーマンスが悪く不合格になると、「顔を潰された」とお怒りになる方もおいででした。今度は自分が先輩と同じことをするのもかもしれない、と思いました。

すべては杞憂でした。麗澤大学のどなたも、キャリアセンターの誰一人として、私の心配していたよ

うなことを期待しておられませんでした。逆に、日が経つにつれ話の成り行きで、私の方から、「あそこはよく知っているから聞いてみるよ」と申し出ることも出てきました。ただ、「案ずるは」は杞憂でしたが「産む」は易くありませんでした。

感覚的な印象ですが、キャリアセンターに着任したころの麗澤大学の就職実績は、入学の偏差値に呼応する状況でした。新米特有の焦りもあって「何かプラスさせなければならぬ」。キャリア科目と就職支援を相乗させ、先人たちの実績にながしかの上積みを図らなければならぬ」という思いがありました。実際は、大学全入時代を迎え大学間の競争が激化してしまいましたので、偏差値並みというのは学園の伝統の力、先人のご努力の賜物によってもたらされた上々の実績でした。ただ、正直なところ、大学教師四年の経験から「麗澤大学生の質は偏差値ほど悪くない。高校まで勉強しなかっただけで、磨けば光る可能性のある学生たちばかりだ」という思いはありました。私のゼミ生は皆、スイッチを入れさせ

すれば、吸い取り紙がこぼれたインクをあつという間に吸い尽くしてしまうように成長する可能性に満ちていました。キャリア科目を、スイッチを入れる切っ掛けにできないものか、とひそかに思いました。就職にも偏差値があるならば、「入学の偏差値よりも格段に高いものにするぞ！」です。

キャリア科目

キャリア科目の姿をどう描き具体化を図るのかについては論点の整理に苦しみました。皆目見当がつかなかったというべきでした。私自身、ゼミ生の就職以外に、大学の就職問題を真剣に考えたことはありませんでした。ましてや、麗澤大学に関係される皆様方（教職員とそのOB、学生とそのOB、支援していただいている団体やその関係の組織や企業等々の皆様）の大学に対する熱い思いの何たるかも分かっていませんでした。当然のことですが、この仕事はこうした四囲の関係者の総力を結集していただいて、ご支援を仰ぎながら進めないと何もできな

いということにすぐ気が付きました。しかし、何をどのように進めてゆけばよいのか、アットランダムにリストアップしても総論も各論も多岐にわたります。しかも、激変する経済環境に対応しながら成果をあげるという速効性も要求されます。

まずは、学生へのインパクトを考えなければなりません。新科目によって、学生の学園ライフスタイルを変化させ、気持ちを深化展開させ、学園の大きなシステムと相乗させる必要があります。一挙にやれなくても、先は見えていなければなりません。何をどういう手順で何年かけてビルド・アップするかというベシック・エンジニアリング（基本設計）は一つ一つの細かな問題とその処方というディテイル・エンジニアリング（詳細設計）を思い描けないのなら、有効性が問われます。

センター全員でシラバスを徹底的に議論しました。四月から八月末まで毎週木曜日の十時半から十四時半くらいまで、他に追隨を許さぬ（？）マラソン会議を続けていました。就職状況をよくする教育

とは何か、最低限のテーマは何か、昔あって今ないものは何か、他大学にあって麗澤にないものは何か、企業との関係改善策とは何か、モラロジー関係企業との結びつきはどうか、麗大生にとって望ましい企業像とは何か、全寮制時代との相違点は何か、改めるべき就職指導とは何か…等々論点は次々出てきます。総論各論混ぜこぜのアイデア集はできました。半期科目を三コマと考えていましたが、一年科目を五コマでもオーバーフローするボリュームです。加えて、実習や合宿、オリエンテーションなども別途実施する計画でした。麗澤の伝統、建学の精神をできる限り取り入れた自校教育にしたい、という思いから様々なアイデアが出たのです。

最後は大ナタを振るい、キャリア形成入門、キャリア形成研究、キャリア形成演習の半期科目三科目に収斂です。理念よりも速効性を重視した、テクニクに偏った内容です。大切なものを切った、という思いは消えませんでした。ただ、科目の運営面で補うことを考えました。卒業生（麗高、瑞浪を含め

て）を講師に招き麗澤で学んだこととキャリア形成を関係付けて語ってもらう、多様な産業・職種の講師を招く、大手・中堅・中小・上場・非上場等多様な企業形態の経営者の話を聞いてもらう、さらに就職活動体験記を四年生に企画してもらう等です。

三科目の滑り出しは順調だったと思います。偶然も重なり、効果は早速に出たように感じられました。センターの窓口感覚では、科目開始後最初の就職活動（二〇〇八年初）から学生たちの動きが目立って良くなって行きました。学生たちのフットワークの向上に呼応して内定状況も順調に積み重なりました。二〇〇八年三月卒業生は過去最高の内定率を記録しました。もちろん会社回りも強化しました。そこで気が付いたのは、麗澤の卒業生採用に前向きな企業は、学生に麗澤の特徴（誠実、努力、粘り強さ、面倒見のよさ、親切心、親孝行の心等麗澤教育の理念を体現していること）を求めていることでした。二〇〇九年三月卒業生は、前半から好調が続き、実績の乏しかった優良企業の総合職採用者が増

加し、リーマンショックにも拘らず過去最高に近い実績となりました。二〇一〇年卒業生は未曾有の冬の時代にもかかわらずおそらく首都圏では数校しかない卒業生内定率九〇％超えを達成しました。しかし今年度、つまり二〇一一年三月卒業見込みの内定率は昨年度と同じ時期と比べ一〇ポイント以上低い数字になっており、対応を苦慮しています。まだまだ道遠しです。

自校教育の始まり

キャリア科目を立ち上げる作業は私には素晴らしい勉強の場となりました。麗澤の歴史や伝統を縷々学ぶことができました。センターの仲間の学生に対する熱い思いも共有することができるようになりました。何よりもこうした熱い思いの背後にあるものが少しずつですが見えてきました。

二〇〇八年の夏でした。もう一度学生の現状を踏まえて新科目を追加する議論を始めました。あるセンターの同僚が、「うちの学生は、『麗澤に来ちゃっ

た。本当はもつといい学校に行きたかったのに』という思いで大学生生活を始めている者が多いのではなか」と指摘してくれました。その通りです。それなのに我々は、「個々の学生の実情に合わせて親身になって肌理細かく就職支援をしている。学生たちには早い段階からOB会始め多種多様な社会人と交わりの機会を提供している。麗澤は他大学にはない面倒見の良さがある」と思い込んできました。学生と教職員とのこの大きな認識ギャップを埋めることを基本認識に新科目を考えよう、です。つまり、学生たちにいつかは「麗澤へ来てラッキー！」って思ってもらおう」一助になるような科目を作ろうというわけです。実際、自分の大学に自信を持たずして、卒業した大学に誇りを持たずして、立派なキャリアを築き上げることができのだからか、と思います。「他校にない誇るべき特徴をしっかりと教え込もう」です。こうしてキャリアセンター内外のたくさんの方のご協力を得て二〇〇九年度から新科目「麗澤スピリットとキャリア」が始まりました。

「自修研鑽の実力」

こうした議論の渦中にいながら私は創設者をよく知りませんでした。知識は谷川での学生たちとの合宿や記念講堂の見学や耳学問によるものだけでした。初めて伝記と漫画廣池千九郎を読みました。

科目の中では、井出元先生に建学の精神について御講義をお願いしました。「自修研鑽の実力」との出会いです。即物的な表現ですが、井出先生から「自修研鑽の実力」というお話をお伺いして、私は「これだ！」と思いました。立場や年齢を超えて常に人間に求められる努力の有様を意味していると解釈しました。私自身も麗澤の学生たちにもびつたりの言葉です。能力においても人格においても追及すべき姿です。自修研鑽の実力を極めたのが学祖の人生です。不勉強できた学生たちに与える人生の座右の銘としてこれに勝るものはないと感じられたのです。

この言葉を体現した人物の人生を思い、学生たちの脳裏だけではなく体全体に刷り込もう、と思ったのです。

偏差値の高い大学の学生と低い大学の学生とで世

の中の企業が設けてきた壁のような差は実力の上では絶対ありません。麗澤の学生がもつコンプレックスは小中高校時代にやるべき時に勉強しなかったことに由来します。大変かもしれないですが後で追い付けばよいだけなのです。劣等感など抱く必要はないのです。そう、「自修研鑽」、そう、「不勉強を克服すればよいだけ」です。これぞ、「麗澤スピリットとキャリア」の中心的な命題です。それは明治、大正、昭和の初期を生き抜いた学祖の人生を具現化する言葉でもあります。

「自修研鑽の実力」を「麗澤スピリットとキャリア」を通じて「麗澤に来ちゃった」という思いでいる学生たちに贈る言葉にしたいと思います。贈るべき言葉はほかにも沢山ありますが、まずはこれです。実のところ、「麗澤に来ちゃった」という思いの学生たちこそ、自校に誇りを持ちたいのです。墓所や麗澤館そして貴賓館を回ってみるとこうした学生たちがより深く感動します。こんなところが学園

に在るのか、こんな思いで学園は創られたのか、という新鮮な驚きを見せます。もつと知ろうとします。科目が終了した後も学内で声をかけてくれるのもこうした学生たちです。何かを求めています。

「麗澤スピリットとキャリア」はこれからです。かろうじて立ちあがったに過ぎません。何よりも私自身がこの言葉の重さをさらに深く消化吸収する必要がある。麗澤を愛する方々のご支援とご指導をいただきながら、しっかりと自校教育科目に発展させていきたいと心しております。「教えることは習うこと」を痛切に感じ入る毎日です。

「麗澤スタディーズ」 オリエンテーション授業

外国語学部長 櫻井良樹



一、はじめに

クイズを出します。「なぜ麗澤大学には外国語学部と経済学部があるのでしょうか」。この質問から授業は始まった。創立以来の年表を示してある。本学の創立については、いろいろな機会に語られて来ているので、たとえば次のような答えが出るだろう。

「前身である道徳科学専攻塾が、道徳・倫理と経済、外国語教育を重視したから」。

これは普通の答えで、もう少し補充する必要があるでしょう。余り語られて来なかった昭和十三（一九三八）年の創立者没後から大学創立までのこと

です。そこで次のような話を加えます。昭和十七年に本学は東亜専門学校（後に東亜外事専門学校）となり、正式な学校として認可されました。外国語専修で支那科と南洋科が設けられ、国際実務と外国語が教えられたのです。こう話しても学生は、まだ「それが何で重要なのだろう」という顔で見えています。では専門学校の重みを語りましょう。現在の専門学校とは違いますよ。

ここで戦前の専門学校が現在の国立大学の基礎になっていること（たとえば千葉大学は千葉医学専門学校や高等園芸学校が基礎）、外国語専門学校は官

麗澤スタディーズ オリエンテーション

創立間もない頃の本館（現2号棟）と図書館



幾多の麗澤大生が学んだ大学本館（右）と図書館（左）

昭和40年頃

ここは昔、何だったのか（答えは末尾）

立で東京と大阪の二つ（現、東京外国語大学、大阪大学外国語学部）と、私立が四校しかなかったことを語ります（戦後になって公立が二校、私立三校が加えられた）。進学率は今とは大違い、大学と合わせて数パーセント、すごいエリートだったのです。

次に当時の世界情勢を語ります。このころ外国語学校が外事専門学校と改められたのは、第二次世界大戦中という時代が関わっています。本学（の前身）では、中国語とマレー語が主に教えられていたのですよ。もちろん日本軍が、大陸から南洋に展開しており占領地を支配していたということが、これらの語学のできる人材を必要としていたのでしょう。外事専門学校という語句には、国際事務とか実務的なものを感じることはできませんか。

でも日本は敗けてしまいます。するとその年十二月には南洋科が廃止され欧米科と大陸科に転換するのです。学校名も、「東亜」から「千葉」に変わります（ずいぶんローカルになりましたね）。語学は、もうマレー語は必要がないので廃され、英語と

中国語が中心となります。敗戦後は圧倒的にアメリカの影響が大きくなります。「敵性語」だった英語が脚光を浴びる世の中になりました。ここにも当時の社会が大きく影響しています。

アメリカの影響の下で教育制度は大きく変わり、専門学校は廃止されて新制大学へ転換が図られますが、本学の場合は麗澤短期大学を経て、昭和三十四年に麗澤大学になりました。それは外国語学部一つの単科大学で、イギリス語学科とドイツ語学科（遅れて中国語学科）ができました。日本語学科は、三十年も経過した昭和六十三（一九八八）年、そして平成四（一九九二）年に国際経済学部（国際経済学科・国際経営学科）が開設されました。

どうですか、戦前の外専門学校からのつながりが見えてきませんか。そしてそこには建学以来の理念と日本を取り巻く社会状況が反映していることがわかりますね。

二、自校史とは何か

このように「麗澤スタディーズ」の第一回目のオリエンテーションの授業が始まった。「麗澤スタディーズ」は、本学で初めて行われる自校史の授業である。一回目であるから、導入の後に、自校史を学ぶ意味について話をした。ということ、その一節です。

皆さんは本学ですでに二年以上過ごして来て、「大学とはこんなものだ」ということがわかってきて、もう麗澤大学に「なんでこうなんだろう」というようなことを感じることは少なくなっていると思いますが、大学は同じように見えてもかなり個性があるものです。

同じ学部名でもカリキュラムは違いますし、それにもまして大学の雰囲気は異なります。国立か私立か、都会か田舎か、マンモス大学か少人数かなどが原因している場合もありますが、多くの私立大学では、建学の理念、創立者や創立母体のミッションの違いが、そこはかとなく影響を与えています。慶應

義塾とえば福沢諭吉、早稲田大学ならば大隈重信は有名ですね。東洋大学は井上円了（思い浮かびませんね、井上は哲学者です、校内に記念館があります）というマイナーな場合でも、確実に影響を与えています。これは架空の「創立者」でも良いのです。上智大学は、理念的にはフランシスコ・ザビエルの精神を継いでいます（創立は大正期です）。そしてカトリックに基礎をおく「人間学」の授業が必修で、色々なところにイエズス会の影響が現われています。

わが麗澤大学の創立者は誰？ 一年生の時に聞きましたね。歴史（の教科書など）に登場してこないで、不思議な気持ちで聞いたでしょう。校舎の入口に飾られているあの人です。本学の学校法人名は廣池学園です（知ってましたか？）。道徳科学を提唱した人、だから一年生で「道徳科学」が必修なのです。企業倫理研究センターも関係がありそうですね。

三、自校史教育へ

建学の理念とか創立の経緯とかは、どの大学でも良く語られ、その大学に独特の雰囲気を与えているのですが、ある場合（実はこちらの方が重要だと思います）には、その大学がたどって来た歴史そのもの（かっこよく言えば、良い意味での伝統）の方が、より重要のように感じられます。それが自校史教育と大きく関係してくるのです。

創立者や、創立者が考えていたこと、学校が創立時に持っていたミッション、それを語ることは意義のあることですが、本学には、こんな立派で素晴らしい理念がある、だから大事にせよというだけでは、何か、さわってはいけない飾りもののような気がしませんか。

理念は生きていてこそ、活用できてこそ意味があるでしょう。自校史教育の目的は、それがいかに活かされてきたかを確認することにあります。確認して活かされていることこそが、本質に近いものではないでしょうか。もし何も活かされていないことが

わかったら、ミッションは放棄されているか、もとのミッションの設定自体が誤りということになりましょう。これを検証することは、自校史研究の目的の一端となります。

このような問題意識は、二十年前頃から多くの大学で持たれるようになり、それを教育に生かす動きにつながってきています。昔から大学の歴史をまとめることはありました。しかし多くは創立百周年とかの記念事業として取りあげられ、記念誌ができてしまえばそれで終わりということが多かったのです。しかし前述のようなしだいで、自分の大学の歴史を客観的に社会の中に位置づけ、ある理念のもとに活動してきたその姿、教育・研究機関としてどのような役割を果たしてきたかを、大学史編纂の成果をふまえて、学生に伝えてみて、自分の大学で学ぶ意味を考えさせるといふ試みが広がってきたのです。

そこで自校史の授業は、建学の理念はどういうものであるか、どうしてそれを学ばねばならないか、

建学の理念は実際にどう活かされているのか、そしてその大学が存在する社会的意義は何なのか、それを考え直してみることを中心に進められることとなります。

四、「麗澤スタディーズ」

「麗澤スタディーズ」という授業を設けた理由も、このような流れを意識したものでした。平成二十年度の改組で副専攻制度を導入した際に、どこにもないユニークな副専攻として「二十一世紀の人間学」を設けました。これは建学の精神を現代社会のニーズに活かすことにつながるような授業を集めて一つのグループとしたものです。その必修科目に「麗澤スタディーズ」という自校史の授業を置いたのです。

履修要項には、つぎのように授業の目的を掲げました。

麗澤大学は一般的には〈外国語〉・〈国際〉系の

大学として知られています。そして今皆さんはその麗澤大学で学んでいます。ところで、皆さんはその麗澤大学についてどれくらい知っていますか？ 例えば、どうして麗澤大学は〈語学〉に強

いのか、また〈国際交流・協力〉に熱心なのか、そして何故〈経済学〉や〈人間学・倫理学〉に力を入れているのか。この講座では、これらの疑問について歴史的な視点から答えていきます。つまり、麗澤大学の歴史について考察していきます。そして二十一世紀を生きる私たちにとって麗澤大学がどのような意味を持っているのか、考えていきます。

授業の三本柱として、①麗澤大学の理念と歴史、②時代の中の麗澤大学、③地域・社会の中の麗澤大学、を掲げました。創立者の教育観や、かつての全寮制の理念や課外活動の意味を語るものは、①の理念にかかわる視点であろうし、卒業生から見た麗澤大学での教育は③の一環とも言える。初代学長廣池

千英先生の話や、世界大戦中の話は②にかかわるものでしょう。学園の中を見て回ることや、南柏を歩くというようなことも行われました。

副専攻としての「二十一世紀の人間学」を選択している学生数は少ないので、必然的に「麗澤スタディーズ」を履修する学生数も少ない。これを二年生、一年生に下げていくことも考えられましょう。しかし授業の性格として、なぜ麗澤大学には、こんな特徴があるのだろう、その理由は何かという問いは、かなり難しい問いだと思います。このようなところからは、あまり早めても意味がないようにも感じられます。もうしばらく多彩な授業を展開したうえで、より良いものを目指していきたいと感じています。

(答) 軍事教練場。昭和十年に道徳科学専攻塾が創設された時には、私塾でしたのでこのような設備は必要ありませんでした。ところが専門学校では教練が義務づけられ、森を拓いて教練場が作られたと思われま

大学周辺を歩く

外国語学部教授 山川和彦



二〇一〇年十二月、「団子、食べるか?」、「はい! お団子屋さんあるんですか。南柏って実はいろいろな店あるんですよね。四年間通っていても、ほとんど知らない……」。ちょうどこの原稿を書かなければならない締め切りの前日の朝、一緒になった四年生との会話。ココスの並びに団子屋があるのを知っている学生はどのくらいいるであろうか? 団子を買ってラーメン屋の角を曲がり、右、左、右、左、後はまっすぐ。途中、ちょっととした広場がある。その端に以前はサトイモが植えられていたが、このところ何も植えられていない。鉢植えをき

れいに並べた介護施設マザーズの脇を通る。新築の住宅が立ち並ぶところは、薄暗い林であった。夫婦で水やりをしている御宅。社宅やライオンズマンションまでくると、学園の森が広がってくる。「道幅狭し」と書かれたところを入っていくと、光ヶ丘小学校の裏門に出る。この道のりで途中すれ違った車はたったの一台。歩くことにストレスを感じない。付き合わせた学生に、この道は鈴木先生(ドイツ語専攻)に教えてもらった裏道で、バス通りを歩くより一分余分にかかると説明した。

大学へのアクセスを案内するとき、東口からバス

というのが普通であろう。徒歩のルートを教えるときでも、バス通りから、八百屋を過ぎて脇道に入るのが普通だ。多くの学生はこのいずれかを四年間通うことになる。去年卒業した学生が、麗澤にはスクールバスがない、と言っていた。たしかに「サービス」のよい大学は、直通のスクールバスを運行している。自宅近くにある大学は(中古だろうが)立派な観光バスをスクールバスとして運行している。確かに「アクセス」はいい。しかし、はたして「アクセス」がよいことが最善なのであるか。目的(地)への到達の容易性を求めるのではなく、その道程に意味を見出すことができないのか。せっかく縁があつて四年間通うのであるから、その土地に自分なりの意味づけができないものか。私が「麗澤スタディーズ」の授業を一コマ担当しようと思ったのは、このようなことに関心をもっていたからである。

そもそも大学の所在地、柏市はどんな所か。麗澤大学に着任して七年になるが、いまだにはつきりしたイメージがない。同じ東京近郊の町でも、川越、

草加はそれなりのイメージがあつた。学生時代まで、急行列車が停車するのは我孫子であつたような気がする。いまでこそサッカー……と思いつくが、それでも自分としてはこの土地のイメージ化ができなかつた。そこで柏について調べ始めると、蕪の生産が日本一であると分かつた。すぐに市役所に行き、話を聞いてみると、蕪農家は麗澤の近くにあるとのこと。市役所からの帰りに探してみると、広々とした畑に蕪が植えられている。豊四季小蕪はブランド品らしい。中国語専攻の先生からは、この辺のチンゲン菜が中華街の契約農家であることを教えられた。また大学院のある学生さんからは、柏の郷土かるたに蕪が出てくることを聞いた。少数集団のことを研究するものとして、「土」に関する情報を得ると、だんだんとイメージが固まってきた。

麗澤スタディーズの授業では、大学周辺を知るために、歩くことを目的とした。二〇〇九年七月二十一日、猛暑。熱中症に気をつけながら、一万分の一の地図を片手に出発。まず市の文化財になっている

今谷の刑場跡へ向かう。今谷上町の停留所近くの耳鼻科医院の裏手に墓地がある。刑場跡といっても石碑とその説明書きがあるだけで、それに気付かなければただの小さな墓地で済ましてしまうところだ。そこから豊小学校方面に住宅街を抜ける。しばらく



豊四季の蕪農家、後方に南柏駅前ビル群が見える（2008年撮影）

すると豊四季の地番になり、一面の畑が、そのかなたには南柏駅周辺のビルが見える。ここは、ビニールハウスもあるが露

地栽培で、五十年近く蕪を栽培している農家である。七月八月には蕪の生産はないそうで、畑には何も植わっていないかった。ちょうど夕方直売の時間で、農家にお邪魔してみると、学生全員に新鮮なきゅうりをいただいた。一同感激。ところどころに畑を観ながら南柏駅方向へ進む。地図にある小高い山（標高三十一メートル）を確認。子供にとっては絶好の遊び場に思える。進路を北北西にとるとヤングボウル近く、かつて新木戸があったところに出る。ちょうどこのあたりにも野馬土手があったのではないかと思われる。道幅は狭く、アパートが多い。旧水戸街道に出た後は、八坂神社の説明をし、千葉銀行を過ぎで、まだかすかに残っている野馬土手を眺める。何の説明もなければ資材置き場の盛り土と違ってしまふようなところである。あわただしく小一時間の巡検が終わった。

もう一度原点に戻ろう。そもそも場所あるいは空間を知るといふことはどのようなことなのか、少し考えてみたい。私が空間論に関心を抱くきっかけと

なったのは、次の二人の研究者・書物であった。ひとりケヴィン・リンチ。大学院のときに聴講した環境デザインという授業で紹介された。彼の『都市のデザイン』（丹下健三・富田玲子訳、岩波書店）は、一九六〇年に出版されたが、二〇〇七年新装版として改めて翻訳が出版されるほどの名著である。

もう一人はイーフォー・トゥアン。人間主義地理学の代表者で『空間の経験』（山本浩訳、ちくま学芸文庫）が代表作である。

リンチは「環境を組み立てたり見分けたりするのには、あらゆる移動性の動物にとって必要欠くべからざる能力である」と言っている。換言すれば五感で地域空間を認知していくことが我々にも求められているということだ。地理学を教える知人が、「最近の学生は地図が読めないどころか、野外に出たとき、方角を知ることさえできない」と言っていたが、これはまさしく生死の問題になる。

都市をイメージするに当たってリンチは五つのキーワードをあげた。いま一度大学周辺に戻ってみよ

う。麗澤に通い始めるの学生は、千葉銀行とココスの交差点、幼稚園、八百屋、ローソンなどを目印（ランドマーク）として認識し、駅からの道を覚えているのである。この道は大学への「パス」として位置付けられると同時に境界（エッジ）を形成し、通学とは直接関係のない領域を区分し始める。

もう一人のトゥアンの『空間の経験』は、これが地理学かと思わせるような内容で、一般書として読みやすい。その中で、彼は「空間」の分節化と「場所」の創造について述べている。われわれは、ある物、概念などに特定の名称をつけるのと同じように、空間に対する意味付けをする。その結果、ある意味合いを持った「場所」が形成され、それが感情の強い結びつきを伴った「根拠地」となっていく。パスでしかなかった空間を面的に拡大することによって、いっそう地域に対する愛着が生まれ、場所が子供のときに感じた「原風景」イメージになる、あるいは地域アイデンティティといってもよいものが生まれるのではないか、というのが私の思い

である。

今回の巡検ルート以外にも、コースはいくつもある。光ヶ丘団地、大学の馬場を横目に、小川？に沿って歩いていけば松戸市になり、卒業生がやっているカフェがある。流山市側にはパーペーキユでおなじみの果樹園もある。歩くにはちょっと距離があるかもしれないが、有名になったドイツパン屋もある。いくらでも「場所」は広がり、その中心に大学をおくことができる。私の場合、大学を卒業して三十年近くたつが、いまだにあそこの喫茶店、居酒屋……と「原風景」を訪れることがある。

さて、そろそろまとめなければならぬ。教員側からの課題をまず書いておこう。麗澤に限らず大学の教育、特に文系では、教室での授業（座学）が主たるものである。さらに最近では情報機器を使用して「個」の仮想空間での学習傾向も強まり、外に出て、自らの体験を通して学ぶことは少ない。もちろん教室の中でもさまざまな工夫はなされている。「フィールドワーク」を取り入れた授業もいくつか

みられる。しかし体系性を有していないように思える。外で何をどのように学ぶのか、戦略的にカリキュラム化していくことがフィールド系の教員に課せられた課題であろう。

歩いて「空間」を「場所」にしよう！ということ述べてきたが、ここで書いたことは学習においても当てはまると思っている。最近ではウェブページの拡充で検索が容易になった。読みたい文献がどこの図書館にあるかすぐにわかるし、書籍も注目の翌日には届く。学生時代には、外国へ出向いていって、交渉し、コピーした。それが今では自宅にいてコンピュータを検索したほうがより早く情報を得ることができる。しかし、その一方であれこれ考える時間がなくなった。先日、早稲田に行く用があった。会合の時間にはちょっと早かったので古本屋に入った。タイトルを目で追っていく。こんな本があるのか、という喜びを感じた。いろいろな体験を通じて、知識が面的に広がる。そこにこそ新たな発見が生まれる。

〈特集〉 自校教育

麗澤スタディーズ

——自校史教育の現場から

外国語学部准教授

田中俊弘



麗澤大学を卒業して二十年も経つと、私たちが学生だった頃とは色々なものが大きく変化してくる。久しぶりにキャンパスを訪れた同窓生からは、大学がすっかり変わってしまったねという少し寂しげなコメントを耳にすることもある。確かに全寮制の時代とは大学の規模からして違うし、キャンパスの風景も随分変化した。この四月から新校舎「あすなろ」での授業が始まり、私が小さい時分から既にあつた校舎（二号棟）が使われなくなると、卒業生にとっては「違う大学」だという印象がますます強まるかもしれない。私は、現在留学の機会をいただい

て夏までカナダにいたが、わずか一年間不在にしているだけで、おそらく、帰国後しばらくはキャンパスの変貌に戸惑うことになるだろう。

しかし、外見の変化とは別に、昔から変わらない「麗澤らしさ」が脈々と受け継がれているのも事実であろう。具体的に言葉にするのは難しいが、建学の精神を大切にする本学だからこそ、変わらない「麗澤気質」が宿っている気がする。ただし、そのような気質が自然と継承されていくのを漫然と期待するのではなく、現役学生に対して、「受け継いで欲しいもの」を積極的に伝えていく方法を意識する

時が来ているに違いない。もちろん、例えば道徳科学の授業が、昔からそのような気質を継承する仕組みの一つになっているはずだが、他方で全寮制という別の「継承装置」がなくなり、大学規模が拡大し、学生が多様化した今では、アプローチの手段を見直し、増やす必要があるのだ。

数年前から井出学長補佐や川久保准教授がコーディネイトされている「自校学習クルー」の活動や、キャリア科目の一つとして開講されている「麗澤スピリットとキャリア」（真殿教授）も、そうした取り組みに数えられるであろうし、昨年度から、外国語学部「二十一世紀の人間学」副専攻の必修科目に置かれ、オムニバス形式で開講されている三、四年生対象の「麗澤スタディーズ」も同様である。要するに、自分の所属する大学を知り、自分の立ち位置を知る機会を作ろうという試みである。

開講初年度となった昨年は、中山学長や井出学長補佐、櫻井外国語学部長などそうそうたる顔ぶれに混じって、私も二週だけ、「麗澤スタディーズ」を

担当させていただいた。その前年秋にコーディネーターの櫻井学部長（当時は教務主任）と川久保准教授から担当を打診された時には、本学卒業生の一人として、何か思い出話をすれば良いだろうと安易に引き受けたが、その後で、大学の歴史と現在を「学術的に」伝える授業にしたいという両コーディネーターの思いを知り、何をどう話すべきかと直前まで随分迷うことになった。

自分が麗澤で学んだ卒業生だからといって決してそれだけで麗澤教育について語れるわけではない。麗澤高校・大学の生徒・学生として、そして卒業後も一年間は嘱託の寮務助手として、計八年間を麗澤の学寮で過ごした私には、経験に基づく、麗澤の寮生活や教育に対する自分なりの考えがあるつもりだったが、それはほとんどが私的な「印象」にすぎないし、人間は自らの過去を美化しがちなので、そうした記憶に頼って話をすれば、単なる懐古的な雑談だけで終わってしまうおそれがある。あくまでも一卒業生の見方だと断りを入れるにしても、授業コン

テンツとして提示するためには、自らの経験を大学の歴史の中に位置づけて客観化しながらの準備が必要だったし、その作業は、麗澤教育とは何かを自分なりに再確認する機会になった。創始者廣池千九郎についての情報が廣池学園のインターネット・サイト上で随分整理されているのを知ったのも、この授業を担当したからこそであったし、モラロジー専攻塾の活動の一端も、塾生のレポートを読むなどして知った。『麗澤大学の三十年』や『写真で見る麗澤大学の五十年』も、以前はパラパラと眺めただけでそのまま書棚の奥にしまわれていたが、今回は改めて読んだ。そして、自分が麗澤の歴史の大きな変化の時期にこのキャンパスで学んだことを知り、また、生徒・学生としての自分が、いかに狭い視野で生活していたのかを実感した。

今回、私の授業では、特に、麗澤教育の重要な柱であったかつての全寮制についてお話ししたが、創始者の寄宿制にかける思いを——以前学んだに違いないが——今回準備をしていて、初めて理解した気

がした。寄宿制度は大学の日課以上に重要で、「学生品性陶冶の根本原理の淵源（えんげん）するところ」とする理想と、自分が経験してきた現実との間にギャップを感じて恥じらいつつも、しかし根底では、そうした理想を背景に有意義な生活を送ったのだとも感じた。

四月冒頭のオリエンテーションの授業で、櫻井学部長が柏と廣池学園の歴史的な背景を説明されたのに触発されて、私も授業の導入で、首塚、胴塚などを紹介し、キャンパス周辺が太田道灌と千葉孝胤との「酒井根（境根）の合戦」（十五世紀）の古戦場だった歴史についても触れた。ゴルフ場周辺が周回道路になっていた頃、私たちがクラブ活動などでよく走った「血流れ坂」を、今の学生はほとんど聞いたことさえないという反応で、二十年という時間の経過を実感した。

二回の授業で私がお話ししたのは、寮制に込められた創始者の思いの他に、私が学生だった当時の寮生活や大学の授業、行事などのことであり、「全寮



平成元年度 麗澤大学卒業記念 平成2年3月3日

制の大学」が「寮のある大学」に変わり、大学の規模や行事や建物が変わっても、変わらない「麗澤らしさ」があるはずだという点を強調した。全寮制をやめたからといって、当時の麗澤の良さ（そして悪さも）が全てなくなったわけではない。例えば、教職員と学生、あるいは学生同士の「距離の近さ」も、教職員が寮にしばしば出入りしたり、学生が教職員の自宅を訪問したり、若手教員が寮に住んだりしていた時代の特長を受け継いでいるのに違いない。

ここに、授業でも紹介した、私が大学を卒業した年の教員の集合写真があるが、学生がよく知る先生方の二十年前のお姿に、授業中に歓声があがった。櫻井学部長が「顔ぶれが今とあまり変わらないという印象」だとおっしゃったが、本当にそのとおりだと思う。小さな大学だった昔を知る教職員が一定数いて、大学の気風を伝えられるのは、麗澤大学の強味の一つだと感じる。もちろん、卒業生や昔からの教職員だけが麗澤気質を体现する存在ではない。ま

た、大学が開かれて、変化していくことも強さであり、必要である。全寮制をやめたのも、麗澤大学にとってはおそらく必要な変化だったのであろう。要はそうした変化の中で、大学の「個性」につながる大事なものを守っていかれるかどうかである。

初年度の「麗澤スタディーズ」は、受講者が少なかったにもかかわらず、授業担当者以外にコーディネーターの先生が毎回参加し、また、池田名誉教授も可能な限り参加して随時コメントをして下さる、非常に「贅沢」な授業であった。日頃している講義とは全く異なり、まるで自分の過去を教壇で学生にさらすような気恥ずかしさがあったが、そのような雰囲気の違いを含めて、受講した学生は授業の趣向を理解して、楽しく学んでくれたようである。

なお、担当初回の授業で、昔は毎年一学期に寮祭が実施されていた話をしたところ、寮長をしている一人の学生が、授業コメントの欄外に、「僕たちの手で来年は寮祭を復活させます！」と書いて寄越した。そこで次の授業で、「どうやら来年は寮祭を復

活させてくれるようです……」とその学生を見ながら話したところ、寮祭の再開が決定したと勘違いさせてしまったようで、その寮長から興奮したコメントを受け取り、後から彼をつかまえて、訂正をしなければならなかった。行事などがいつの間にか消えていくのはよくあるが、何かを始めたリ復活させるには相応の努力が必要である。「麗澤気質」を受け継いだ学生達が、昔話に触発されてキャンパス生活を盛り上げてくれれば、それもこの種の授業の副次的な効用の一つになるのではないだろうか。私が大学一年生だった時、新たに英語学科一年のクリスマス会をやらうと考えて担任の中山先生（現学長）に財政支援をお願いに伺ったところ、「じゃあ、学科全体のクリスマス会にしましょう」と言われて、実行委員長を引き受けた。アメリカ人教授にクリスマスなどの詩を朗読してもらったのキャンドル・サーヴとたと自負している。この規模の大学になった今、どんな「麗澤的活動」ができるかを考えるのは現在

の学生の務めである。

私は、麗澤を卒業した後、茨城県の国立の大学院に進んだが、ある晩の大学院生の懇親会で、某先輩が「都の西北」と出身大学の校歌を歌いだしたのに対して、他の先輩が、「別の大学の校歌なんて歌うな」と言って喧嘩を始めたことが印象に残っている。たわいもない酔っぱらいの喧嘩だが、後で他の人から聞いたところ、文句を言った先輩は、その大学に合格しなかったことをずっと悔しく思いながら大学生活を送ったらしい。その後、同大学の出身者と一緒の大学院に在籍したのに、である。大学院の同級生から「大学生活の思い出を本当に楽しそうに話すよね」と羨ましがられるほど麗澤での生活を謳歌した私には、いまだに理解できない感情である。

今の自分と自分がいる環境を大切にして欲しい。自分と自分の大学に誇りを持って欲しい。それは、置かれている環境をそのまま受け入れるという意味ではない。より良い自分になるために、そしてより良い大学にするために、学生たちにも努力をして欲

しい。それが、コーデインイターの両先生が学生に期待していることではないかと私は考えているし、少なくとも私が「麗澤スタディーズ」の講義に込めた思いである。

〈特集〉 自校教育

「麗澤スタディーズ」小考

——自校教育と一次文献

外国語学部准教授

川久保 剛



「二十一世紀の人間学」副専攻

二〇〇八年度から外国語学部副専攻制が導入された。学生は二年次に入ると、十の副専攻の中から興味関心のあるものの一つを選択し、主専攻と並行して学ぶことになる。そのひとつに、「二十一世紀の人間学」副専攻がある。その目標は、「現代社会に求められる倫理」の探究にある。

この副専攻には、ふたつの必修科目が置かれている。「人間学概説」と「麗澤スタディーズ」である。前者は、人間とは何かという問いを探究する科目であり、後者は、麗澤とは何かという問いを探究

する科目であるといえよう。

このふたつの探究をクロスさせる点に、「二十一世紀の人間学」副専攻の特色があるといえる。人間とは何かという普遍的な問題に対して、麗澤という個性をぶつけるわけである。その緊張関係の中から、「現代」の「倫理」に対して、どのような知見を生み出すことができるか。「二十一世紀の人間学」副専攻は、このような知的挑戦の場として捉えることができる。

「麗澤スタディーズ」

麗澤とは何かという問いの探究のなかには、当然ながら、歴史の探究も含まれる。

道徳科学専攻塾に始まり、東亜専門学校、東亜外事専門学校、千葉外事専門学校を経て、麗澤短期大学、麗澤大学にいたる学園史・大学史の研究である。

こうした研究は、まだほとんど進められていないのが現状である。たしかに年史など資料的な刊行物はまとめられている。また廣池千九郎研究の観点から学園史・大学史にふれたものはある。しかし学園史・大学史という視点に立脚した研究はまだ現れていない。「麗澤スタディーズ」は、こうした面の研究の開拓を志すものとしても位置づけることができる。

初代学長・廣池千英、第二代学長・廣池千太郎に関する研究

したがって「麗澤スタディーズ」は、廣池千九郎

だけではなく、広く今日の学園を築いた先人たち（教員・職員・学生）に探究の目を向けることになる。

なかでも廣池千英と廣池千太郎の研究はもっとも重要なものとなる。学園史を全体的に理解するうえで、廣池千九郎の志を引き継いで、今日の学園の礎を築いた両先生の研究は不可欠である。

初年度である二〇一〇年度は、廣池千英を取り上げる授業が行われたが、二〇一一年度は、廣池千太郎についても取り上げることが予定されている。

またこうした問題意識と関連して、学園史・大学史を日本近代教育史の中に大きく位置づける授業も予定されている。

以下に、二〇一一年度の授業計画（予定）を掲載しておこう。

1、櫻井良樹（外国語学部長）・川久保剛 オリエ
ンテーション（自校研究の意味）

2、櫻井良樹 初代学長・廣池千英と労資協調

会・野田醤油

3、井出元（学長補佐） 道徳科学専攻塾の教育理念

4、中山理（学長） 麗澤大学の建学理念——知徳
一体

5、山川和彦 フィールドワーク（その1）——大学
周辺を歩く

6、櫻井良樹 昭和の戦争と学園

7、池田裕（名誉教授） 初代学長・廣池千英と麗
澤短期大学

8、川久保剛 第二代学長・廣池千太郎——その人
と思想

9、水野治太郎（名誉教授） 拡大・拡充時代の麗澤
大学

10、川久保剛 フィールドワーク（その2）——自校
史の現場を訪ねて（貴賓館、麗澤館などを見
学）

11、江島顕一 日本近代教育史から見た廣池学園

12、井出元 麗澤大学の課外活動

13、井出元 麗澤大学で何を学んだか——卒業生に
学ぶ

14、中山理 麗澤大学で見つけた「私」——キャンパ
スの中での自己発見

フィールドワークという手法

前記授業計画（予定）にも示されているように、
本科目では、文献研究に加え、フィールドワーク
（現地調査）の手法も取り入れている。

二〇一〇年度同様、二〇一一年度も、学園内のフ
ィールドワークと、地元地域のフィールドワークを
行うことを予定している。

まず学園内のフィールドワークにおいては、学園
史の理解に必須の場所や施設の見学を行うことにな
る。今年度は、二号棟の礎石・碑文、モラロジー研
究所総合本館の廣池千英先生の銅像、道徳科学専攻
塾時代の学生寮、貴賓館、麗澤館などを見学した。

案内役は、櫻井学部長と筆者が務めた。麗澤館で
は、職員の方から講話も頂いた。

貴賓館や麗澤館は、見学する機会を持たないまま卒業する学生が多い。しかしこのような施設に触れることは、自校研究・教育上大きな意味を持つているといえよう。ちなみに近年では、おそらく同じような問題意識からだと思われるが、「麗澤スピリットとキャリア」（真殿教授）や「道徳科学」の一部の授業（橋本講師のクラスなど）でも、同様の試みがなされている。

地元地域のフィールドワークについては、本誌本号掲載の山川教授の御論稿に譲りたい。筆者は、同フィールドワークにも同行させて頂いたが、知的好奇心を大いに刺激された。学園・大学の歴史のトータルな解明にあたっては、地元地域に関する理解も必要となるであろう。

自校史における一次文献

他の学問分野と同様、自校史研究においても、一次文献の調査・研究が不可欠である。

したがって本科目においても、一次文献にあたる

ことを重視している。

このようなことをあえて述べるのは、近年、本学の自校教育において、一次文献のウエイトが軽くなってきたという懸念があるからである。

たとえば「道徳科学」では、共通テキストの整備・刊行（それ自体は、大変有意義なことであることは言うまでもないが）にともない、『道徳科学の論文』などの一次文献に触れる機会が相対的に減少しているような印象を受ける。自校研究・教育を、高校レベルの学習ではなく、大学の学問研究として展開するのであれば、当然ながら、一次文献に当たることを基本としなければならぬであろう。

このことは、フィールドワークにおいても同様である。たしかに「道徳科学」では、廣池千九郎記念館の見学を取り入れている（それ自体はもちろん有意義なことである）。しかし記念館の展示は、学芸員の視点から再構成されたものであり、その意味ではやはり二次文献に分類されるものである。

近年外国語学部では、新入生オリエンテーション

キャンプ（建学理念学習と親睦を目的として実施されている）の開催場所を、これまでの谷川・大穴から、柏の大学キャンパスに変更してはどうかという意見が出ている。その理由は色々あるが、谷川・大穴での建学理念学習は、廣池千九郎記念館の見学で代替することができないのではないかとすることもそのひとつとなっている。なるほど慣習にとらわれず、未来志向で多様な可能性を検討することは大切であろう。しかし、谷川・大穴には有って、廣池千九郎記念館に無いのは、「一次文献に触れる」という体験である。谷川・大穴に保存された創立者の居住空間や仕事部屋はまぎれもなく「一次文献」である。現地に滞在して、その生の資料に触れることの自校研究・教育上の意義はたいへん大きいということができる。

本学の自校史研究・教育の特色のひとつに、「一次文献」の豊富さが挙げられよう。今後もこの特色を大いに活かしていくべきであると考えるが、いかがであろうか。繰り返しになるが、学びが、単なる

高校的学習のレベルを脱して、大学の学問の次元に飛躍するためには、「一次文献」に立脚する態度が不可欠であるとおもわれる。

インタビューという方法

一次文献には、文字化された資料だけではなく、口頭で伝承されてきた資料も含まれる。本科目において、往年の学園を知る人物へのインタビュー（聞き書き）を取り入れている意味はそこにある。インタビューを通じて、学園の伝承文化や活字となっていない未見の歴史を学ぼうというわけである。

今年度は、池田裕名誉教授をお呼びし、麗澤短期大学時代の学園についてお話をうかがった。インタビューは筆者が務めさせていただいた。またフロアーの学生からも質問という形でインタビューさせて頂いた。

まだまだ活字化されていない資料がたくさんあることを痛感させられる授業であったといえる。聞き書き作業は、来年度以降も継続の予定である。

「麗澤スタディーズ」の教育的意味

最後に、学生にとって「麗澤スタディーズ」はどのような意味を持っているかという問題について考えてみたい。

この問題を考察するうえで確認すべきは、次の事実であろう。それは、どの科目においても、学生の学びは、教員の意図するところと必ずしも一致しないという事実である。学生は、教員が思いもしなかったことを学ぶものである。ここが人間の人間らしいところでもあり、教育の面白いところでもある。

したがって「麗澤スタディーズ」においても、学生が何を学んでくれるかは未知の領域に属する事柄であるといえる。

とはいえ担当教員としては、やはり学生に、麗澤とは何かという問いを探究してもらいたいと考えている。そしてその探究を、人間とは何かという普遍的な問題にリンクしてもらいたいと願っている。

人間とは何か、麗澤とは何か。一人でも多くの学生さんに、この知的スリリングに満ちた問いに果敢

に挑戦してもらいたいと念じている。

〈特集〉 自校教育

『大学生のための道徳教科書』

— 学生モニターとして参加して

塚田 紀美

(第四十九期 英語学科卒)



ある日先生から「今度、道徳の教科書が改訂されるのだが、学生モニターをしてみないか」という誘いを受け、次のような概要の説明がありました。

この『大学生のための道徳教科書』（当時、タイトルは未定）とは、平成二十一年四月に麗澤大学出版会から発行される図書である。麗澤大学の必修科目である「道徳科学A・B」の授業で、実際に平成二十一年度から使用する教科書である。また、書籍として一般書店でも発売される。

元々、本学には、『道徳科学へのいざない』とい

う、同じ趣旨の教科書があった。「道徳科学A・B」担当の先生方がこの教科書について検討された結果、次のような課題があることがわかった。

- ① 現代社会の諸問題と建学の精神および倫理・道徳思想との関連性をさらに明確にする必要がある。
- ② 双方向型授業の展開を意図した構成にする必要がある。（『道徳教育』第十六号、八ページより）

そこで、この『道徳科学へのいざない』の改訂プ

ロジェクトが発足した。改訂作業については、これまでは教員のみで行われてきたが、①②の課題を克服のため、実際に教科書を使用する学生の視点に沿ったものにするため、学生がモニターとして参加し、教員と共同で作っていくこととなった。

モニターの手順としてはまず、学生に、モニターを担当する章が割り当てられ、その対応する章について、先生方が書かれた原稿を渡されました。その原稿に目を通し、気になる箇所（共感した箇所・理解できなかった箇所など）を確認する作業を、各自行いました。

私はこの「他人の文章に対し、気になるところを探す」作業を通して、「読書」に対する意識がとてもし変わりました。これまで自分にとって読書とは、その本の内容が理解できれば自分の身となり、理解できなかったら、自分の知識がその本に及ばなかったまでだ、と考える認識がありました。しかし今回は、情報を享受するだけの「読書」とは違い、ある

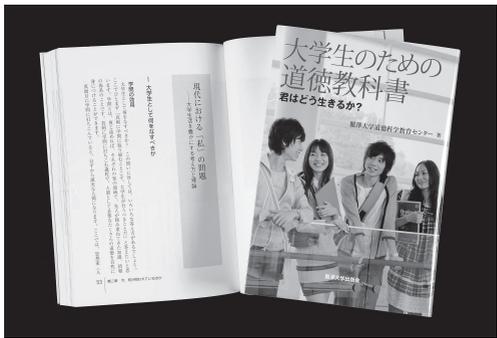
種「添削」という視点を持つことを許されました。さらに、「編集者」や「執筆者」としてではなく、あくまで「学生」として参加するため、原稿を読んで「大学生として」感じたこと、思ったことを提供することが求められました。

原稿を読んで、「ここが分かりにくい」と感じた時に、これまでの自分であれば、ただ自分の無知さを感じるだけであったことに対し、「モニター」としては、その「分かりにくい」という感想を掘り下げることができました。どうして分かりにくいと感じるのか。知識がないからか、言い回しが現代に即していないからか、その考えに賛同できないからか。本を読んでいて、意識の方向性が「本の情報」に向くのではなく、「その本を読んでいる自分」に向くという、初めての経験をしたように思います。思えばそれは、今読書をする際にも、とても役に立っている視点です。

事前に渡された原稿を持ち、執筆者でもある先生方との意見交換会に出席しました。意見交換会は全

三回あり、一・二回目は麗澤大学の会議室で、三回目は群馬県の谷川セミナーハウスで一泊二日の合宿形式で行われました。予め渡された原稿の章（一人あたり三章前後）に対し、教員一名、学生二名、の一グループで、意見交換がなされました。

私は、はじめ「意見交換会」とは言うものの、執筆者である先生方を前に、学生モニターとして、何を言ったらいいの



だろうかと思っただろうかと思っただろうか。先生方の文章に対し「分かりにくかった箇所」を伝えるところで、それに対する解説だけで終わってしまうのではないかと感じていたからです。しかし、意見交換会当日、議長から、「今日の先

生は、私たちではなく、あなたたち学生です」との言葉があったように、先生方は学生の感じたこと、特に理解がしにくいところを、実際の読者の意見として捉え、その解決のためにはどうすれば良いのかを一緒に考えて下さいました。

それにより、学生としても「ここが分からない」という提言のみで終わるのではなく、「大学生向けの教科書・書籍として、どう展開されていることを、大学生として望むのか」まで考える貴重な機会となり、「自分の発言に責任を持つ」ということも学んだように思います。

事前に一人で原稿を読んでいる時には、特にスケールの大きな話題に関しては、あまり実感が湧かなかったりするところもあったため、そのような部分に関しては、意見交換会では、先生方から解説がありました。その際、一般論としてではなく、ご自分の研究分野に沿った話などを聞くことができました。学生が担当した章は三回とも同じでしたが、担当の先生は三回とも別の先生でした。それにより、

同じ章に対する三人それぞれの先生方の解説を聞くことが出来ました。それぞれの先生方の研究分野が異なっていたため、ひとつの話題に対し、解釈の仕方は同じでも、様々な展開の仕方があることを感じました。つまり「道徳」は普遍的なものであるがゆえに、その活用の仕方、当てはめる場面は人それぞれであること実感しました。自分がどのような世界観を持っているか、何を追究しようとしているのかによって、道徳の役立て方も変わってくるということです。この本が、「教科書」として作られていることの可能性の大きさを実感しました。

ひとつの普遍的な事項に対する、それぞれの学問的展開ということについては、研究者でもある大学の教員であったからこそなせる技であり、それも、今回の貴重な経験のひとつでした。さらに『大学生のための道徳教科書』を、自分の研究領域にあてはめて展開させることができるのは、先生方のみにはまることができないこともまた、意見交換会の経験を通して知りました。

会のあり方「個人のありかた」について共通の認識を持つ必要が必ずあります。その共通認識こそが、「道徳」であると考えます。自分が生きる社会での「道徳」を知らずして、社会で自分を発揮することは成り立ちません。小学校などでの道徳教育をベースにしながらも、社会に出る直前である大学生だからこそ考えることのできる高いレベルでの共通認識を持つ必要が、現代に求められているのだということを、このモニターの経験で教わりました。

『大学生のための道徳教科書』の作成のためには、学生のモニターの意見聴取の場を設けず、先生方や出版の関係者だけで進められた方が、はるかにスムーズに出版することができます。しかしなぜ、わざわざ、谷川でモニターの合宿を行うのか。それは、これが「麗澤大学」の出版物であるからではないかと思います。モニター自身を、この道徳教科書から輩出される、本当の意味で「社会の役に立つ若者」第一期生に育てようという、親心を感じました。建学の理念や、大学の教育機関としての役割

先に述べたように、意見交換会では、教員一名・学生二名の一グループでした。私は、同じグループの学生が後輩であったことが、とても勉強になりました。一回目の意見交換会の時、彼女は一年生で、反骨精神のある学生に見えました。そんな、自分の生き方を激しく模索しているところが、それも、研究者である先生方と同じく「ひとつのもの」を追究している姿に感じられました。そのような彼女の、『大学生のための道徳教科書』の解釈や着眼点、身近な問題への当てはめ方は、やはり彼女の苦悩や経験が反映されたものでした。同じ文章を読んでいるのに、それをどのように切実な問題として捉えるのか、またその道徳をどのように生かすのかについては、彼女の個性がハッキリと現れていたのです。

道徳を大学生に教えるというと、「価値の押し付け」のような意見を聞くこともあります。しかし、それぞれのバックグラウンドを持つ人間が集まる社会の中で、自分の個性や能力をいかに発揮し、いかに他人や社会に役立てるかを考えた時、正しい「社

を、単なる理想にするのではなく、ひとつひとつ現実の行動として実践する、麗澤大学の特徴を、身を持って知りました。そして、それが、実学としての『大学生のための道徳教科書』の精神にもかなっている点にも、この原稿を書くにあたり、気付かされました。

自校学習のスタッフとして学んだこと

滝口 まい

(英語コミュニケーション専攻三年)



谷川オリエンテーションキャンプの中にはキャン

プの核と言ってもよいプログラムがあります。それは、創立者、建学理念、そして谷川に来る理由を新入生に伝えるためのプログラムです。これは「自校学習プログラム」と呼びます。自校学習とは、自分の学校の創立者、建学理念そして歴史や特色を学ぶ学習のことをいいます。この自校学習は多くの大学で正規の授業科目として取り入れられています。麗澤大学でも同様で、一年生の必修科目として、創立者廣池千九郎とその道徳科学及び、建学理念である知徳一体について学習する、道徳科学という授業が

設けられています。

そして、この谷川オリエンテーションキャンプの自校学習プログラムもまた、麗澤大学独自の自校学習の場として位置づけられています。このプログラムは、以前は先生方が企画・運営をされてきました。しかし、三年前から学生が主体となって企画・運営を行うという形になりました。それに携わる学生メンバーを「自校学習スタッフ」と呼びます。

自校学習スタッフは六名で構成され、今年最初の試みとして公募という形をとり、六名を選出しました。私たち自校学習スタッフは谷川オリエンテーシ

ョンキャンプのために春休みのほとんどを使い準備に取り掛かりました。私たちは大学に二十回程集まって深く話し合いながらの準備となりました。

私は、二〇〇九年の谷川オリエンテーションキャンプでは一メンバーとして参加しました。しかし、二〇一〇年はリーダーとして谷川オリエンテーションキャンプの活動に加わりました。そこで、私がリーダーとして得た体験について述べさせていただきますと思います。

私はリーダーとしての目標を立てました。それにあたっては、まずはリーダーとは何かということを考えてみました。私はリーダーとはメンバー全員の支えになることだと考えました。私がイメージしたのは、動物園の檻でした。リーダーは檻で、ライオンやゾウなど動物がメンバーだと考えました。檻の中は動物にとつて安全であり、動物は檻の中ならば自由に動くことができます。私はメンバー全員がそれぞれに持っている力を思う存分出してほしいと思っていました。檻が広ければ動物の行動範囲も広がり

ます。頑丈な檻であればどのような問題が起こったとしても保護できます。私はメンバー全員を受け入れられる広い心を持てるように心掛け、メンバー全員をうまくまとめることができるように足りない知識をできる限り補う努力をしました。また、反省会は必ずその日のうちにしっかりとするという目標も立てました。

つまり、物心両面でメンバーを支えることが、リーダーの在り方だと思いました。

物心両面で支えるということは、廣池博士の麗澤という言葉に込めた意味である「太陽天に懸りて、万物を恵み潤し育つる義なり」という意味に通ずるのではないかと思います。そのことを踏まえ、私はリーダーとしてメンバーの太陽となろうと考え、「メンバーをどんなことがあっても支え、僭越ながらメンバーの成長を見守る」ということを目標にしました。その為にまず、メンバーでの話し合いを大切に、率直に思ったことを発言できること、そして、メンバー一人ひとりの事情を考慮し、やる気に

なるようにするという環境作りを心掛けました。これらは、チームを活性化すると考えたからです。

二〇一〇年の谷川オリエンテーションキャンプに向けて、私たち自校学習スタッフで最初に話し合いをしました。そして、話し合いから導き出された目標が「新入生のためになるプログラムを作ること」でした。

入学したての新入生にこれから四年間過ごすことになる麗澤大学での生活をよりよいものにしてもらいたいという思いからこの目標ができました。そして、この目標を成し遂げるために、私たちは様々な所に着目し、工夫を凝らしました。

私たちはまず、「新入生は入学して間もなく、谷川オリエンテーションキャンプに参加する」という所に着目しました。新入生の数多くが初対面で、すぐに谷川へ行くことになり、友達ができるのだからかという不安があるのではないかと自分たちの経験を踏まえて私たちは考えました。では、その不安をぬぐい去るために、私たち自校学習スタッフは新

入生に対して何をしてあげられるのだろうかと考え、話し合いました。結果、私たちは積極的に新入生とコミュニケーションをとるということにしました。特に、一人ぼっちになっている新入生に対してはより積極的に自分から近づいて声をかけるという目標をたてました。実際に実行し、新入生達は緊張がほぐれ、少し明るい表情になったように感じられました。

また、新入生にとって意義のある内容とはなんだろう、とメンバーで話し合いました。私たちは考えた末に、三つの話題を決めました。一つ目は「創立者について」、二つ目は「建学理念について」、そして三つめに「温泉について」です。

そして、私たちは少人数グループのほうが新入生にも聞きやすいと考え、一人ひとりと向き合う形をとれるようにするなどの工夫をしました。今年ではできるだけ、少人数制を心掛け、十八人程度を一グループとする形をとりました。

しかし、準備を進めていく上で、様々な問題も発

生しました。例えば、一人ひとりの目標としているレベルの差によって少々活動に支障をきたしてしまいう場面があったり、メンバーの予定が様々なため、内容の把握の度合に差が出てきたりということがありました。

それらの問題を解決するために、連絡を小まめに取る、意見交換をしっかりとする、また、先生にも的確なアドバイスをいただいたりしながら、私たちはできる限りの努力をしました。

風通しの良いチームという目標のおかげで、私たちは様々な問題乗り越えることができました。この目標が、私たちが活動するための潤滑油になってくれていたのではないかと思います。

私は、この活動をしていくにつれて、多くのことを学び、成長したと思います。リーダーとしていつもなるべく笑顔でいることで、優しさを失わない、麗澤大学の太陽を失わないように心掛けたこと。自分の感情をコントロールすること。人の上に立つには人よりも何倍もの勉強し、謙遜すること。予期せ

ぬアクシデントに見舞われてしまった時に冷静さを失ってしまったり、忙しさのあまりにメンバーへの配慮が足りていない部分があるなど、十分にはできませんでしたが、二〇一〇年の谷川オリエンテーションキャンプを終え、普段では味わえない達成感を得ました。自校学習スタッフで決めた「新入生のためになるプログラムを作ること」と「風通しの良いチームにすること」という目標は達成できたと思います。

私は、谷川オリエンテーションキャンプという貴重な三日間で、新入生に対してはメンバーよりもうまく接することができませんでした。また、メンバーに対しては、対立してしまった際に、平等に接することができなかつたり、違和感が残ったままで残り少ない準備期間を過ぎてしまいました。これらが私にとっての大きな反省点です。この反省を通して、私は、太陽のような慈悲心を普段から大切に生きていきたいとかなかなかこのような場面で存分に力を発揮できないということに気付かされました。

私が自分自身で立てた目標に伴うリーダーになれたかどうかはわかりませんが、メンバーが評価してくださると思います。私は、リーダーという役割を終え、問題が生じたときのことを思い出し考えしてみると、太陽は万物を潤すが、全ての局面においてそのようにすることは難しいものなのだと思います。現実と理想は違うのだということを学ばせていただきました。そして、太陽になることがいかに高い目標だったのかということもわかりました。

私は、太陽になれるように常日頃から「太陽である」ということを意識して生活するということが、本当の太陽になれる一歩なのではないかと思いました。

今では、太陽になるという目標を学生生活の全体を貫く最も根本的な課題にしたいと思います。



〈特集〉 自校教育

P・S現代の学生へ

関口和宏
(国際交流・国際協力専攻三年)



私達は国際交流・国際協力専攻（IEC）の第一期生である。

「これからは世界に目を向けなければいかんぜよ」
昨今流行になった大河ドラマに言われるように、私達IECの学生もその志と共に本学へ入学した。それから既に三年が経った。

「日本を洗濯いたし候」為に。

私には、洗濯しようとする者として一つ常に気にかけてきた思いがある。それは「偏り」である。昔から、偏った思いをもって洗濯しようとする者が好きになれなかった。私の言う「偏り」とは、物事を

進める上の思想であり、つまりは過程上のことである。最終的なことではない。つまり結果ではないということである。結果は誰もが偏るものである。白か黒か、YesかNoか、善か悪か、寧ろ偏らざるを得ないものである。

しかし、このような思想を心がける故に壁は高く厚くなる。常に偏ることのない思考を求めらるのであれば、常に係わる相手の持つ知恵、少なくとも知識を網羅しておく必要がある。より綺麗に洗濯したければ、それ以上の知恵を以ってして思考することが必須である。誠に大層なことである。

だが、つくづく人というものは自らの嫌いな物事を受け入れ難い生き物だ。更に男という種の生き物は、そういった類に対する自尊心が一方の種に比べ強いものだ。「意地でもやる」という言葉のように、私にとっての何かを洗濯しようとする者は、意地でも偏ってはならない存在として自身の心の中に強く根を張ってきた。「襟は汚れているが大体綺麗だから良ししようか」という人は少ないはずだ。と云う様に、文頭からしばし退屈な時間としてしまっただが、この度述べて頂くことの説明責任とでも言えよう事であるのでご勘弁頂きたい。

この場で話させて頂くことは一つ。主題にある様に、私が麗澤に学んできたことで現代の学生諸君に伝えておきたいことである。とはいえ麗澤大学へ通う学生における、本誌『麗澤教育』の周知度の低さには驚く。それ故私は本稿の掲載を受けた。数少ないであろうが、本誌を手取るほど時間を持て余した学生へ、多くの可能性を持った現代の学生へ、伝えたい故に。その可能性があった故に可能であった

事をお話しよう。

私は序論で述べたような志で、この麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻へと入学した。私達二〇〇八年度入学者が、我が専攻の第一期生であり、多くの素晴らしい教授且つ国際人には恵まれてきたが、背を見せてくれる先輩もいなければ、伝統も無い環境であった。真直ぐに闇の中に伸びた一本のレール以外には何も見えなかった。

入学一年目の晩春、私は中東問題解決に取り組む学生主体のNPO法人の学生スタッフとして、本業には似ているようで別のレールの上を走りだした。多くの時間をその活動や中東問題の知識獲得に注ぎこみ、都内へと行き来する日々を経て、中東平和を芽吹く多くの種を蒔いた。

二年目が目前となった早春に、同専攻同期の友と、我が国際交流・国際協力専攻について、「近くにできる後輩は、この専攻が今のままならきつと困惑するな」と、いつものように煙を燻らしていた。だいぶ冷え

込んでいた夕刻だった。そして、

「手本となるような先輩の背中を見せたいな」

との二人の洗濯者の想いで、国際交流・国際協力専攻の学生主体でプロジェクトチームを組織し、古くからの麗澤の支援先であるラオス人民民主共和国に図書館を建設・寄贈しようという、たった二人の学生の無謀ではあるが可能性を信じた、熱く狂気染みた熱意によって、現在活動二年を迎えるRISOVP (Reitaku International Student Overseas Volunteer Project) 「Laos Project」は始動した。今考えれば一つの面白い可能性であると同時に、私の夢であり友の夢でした。

大学二年になり、RISOVPのプロジェクトを第一に考える為に、私は一旦NPOから手を引き、代わりと言っては何ではあるが民主党衆議院議員鳩山由紀夫の事務所でインターンシップを始めた。学生スタッフとして係わっていたNPO法人の活動資金を集めるための学生運動で、議員会館へ何度も足を運んでいたことがこの様な機会・可能性へと繋がった



理由だ。ちょうど歴史的な政権交代により、鳩山由紀夫政権が誕生した年でもあり、今まで接することのなかった政治の世界での善き経験を得た。

もう一つ余談をと思うが、退屈な方は是非とも飛ばして頂いて構わない。私は幼児期から今日に至るまでスポーツと言えばサッカー一筋で、母親には洗濯で大変苦労をかけてきた。今でも感謝が尽きませ

ん。大学に入学してすぐ、部活動勧誘活動でサッカー部の姿が見えないことに不安が募り、案の定、活動無実績で廃部予定の状況だった。第一にサッカーとは離れたくなかった上、国際交流の名を持つ専攻の学生

の見地からも、国際交流のスポーツにおいてサッカーを置いて右に出るものは無いと思っていた故、留学生の多い麗澤大学にサッカー部が無いという事実に納得がいかなかった。すぐさま有志を募り、再びサッカー部が正式な部活動として再生するまでに三年がかかった。三年間で台湾、中国、ドイツ、アメリカと多くの留学生と共に汗を流した。今では立派な部として、新たなリーダーが率いてくれている。

その他、光ヶ丘地域の活性化を目標としたサークル結成、RISOVPの図書館建設費用を可能な限り学生で集めようと、国内でラオスの民芸品販売活動を行うために幾度も現地足を運び、民芸品の仕入れを行い、現地文化に触れたり、学生の持つ時間と体力の可能性の限りを追求してきた三年間であった。

無論、私のこれらの追求の中には多くの犠牲があり、多くの人へ迷惑をかけてきた。新たに何かを始める時には、苦しくて何かを切り捨ててきた。それらの多くの人の犠牲や善意が、繋げ広げてくれた現

在の何本もの偏りのないレールが、麗澤大学に大志と共に入学してくる可能性に包まれた後輩達にとっての、小さな道しるべとなったなら、私にとってそれ以上の喜びはないと同時に多くの犠牲が胸を絞め、それ以上の苦しみもない。

「子曰く、我、三人行えば必ず我が師を得。其の善き者を択びて之に従い、其の善からざる者にして之を改む」(述而二二)

私の麗澤での三年間は正にこの孔子の言葉のようであった。多くの人々と出会い、その人々の素晴らしい所を我が師の様に思い、そうでない所は自分と照らし合わせ改める。学生という「時間」を自由に使用可能な期間がもつ可能性は千万無量なのだ。私がこの麗澤大学で見出すことのできた不偏の可能性全てが、私にとっては麗澤でしか成し得なかった麗澤教育なのである。

多くの新参者が来る春、RISOVP of Laos Projectは完了する。正に塵の様な可能性を信じた二年間であったが、信じ続けて来られたのは、正にその可能性へ

の期待に支えられたからであった。

今思えば私は洗濯が大の嫌いであった。洗濯の必要のないように、麗澤の学生の測り知れない可能性で染めてほしいし、汚してほしい。私は、教科書は教えてくれないが麗澤が教えてくれた汚し方を知たにすぎないのだ。どう染めるか、汚すかは貴方自身だ。どう洗濯するかもだ。



自校史スタッフとして

郡司 幸枝

(日本語・日本文化専攻三年)



私はこの大学生活の三年間のなかで、外国語学部
の谷川オリエンテーションキャンプに自校史学習ス
タッフの一員として二〇〇九年と二〇一〇年、二度
のチャンスを頂き新入生の前で麗澤大学の軌跡につ
いてお話をさせていただきました。ここでは谷川オ
リエンテーションで、自分は新入生に何を伝えたく
ったのか、また伝えた後の自分自身の行動はどうだ
ったのか。振り返ってみたいと思います。

まず私が初めて自校史スタッフとして谷川に向か
ったのは二〇〇九年の四月でした。当時のスタッフ
構成は四年生の先輩が二名と二年生が私を含め四名

の計六名でした。外国語部部の川久保剛准教授に自
校史スタッフの専属コーチに就任していただき、新
入生に説明する内容は総て私たち学生に任せていた
できました。この年の自校史スタッフ内の目標は
「新入生に親切に」でした。発表内容、形式は二年
生が二グループに分かれ、各自テーマに沿って発表
をしました。私は英語コミュニケーション専攻の滝
口まいさんと組み、大学生活のイントロダクション
と大学四年間の学費を授業ヒトコマに換算した場合
の費用をテーマにして発表させていただきました。
この年は何もかもが初めての体験で、先輩の下で指

示された事をこなすのに正直、精一杯でした。それ
でも谷川オリエンテーションでの三日間は「自分た
ちの好きなように。自分が新入生にとっていいと思
ったことは、どんどんやっていこう」という川久保
コーチの寛大な方向性のお陰で、「自分が新入生の
ときどう思ったか?」「自分が新入生の立場だった
らどう思うか?」という自校史スタッフ内の「新入
生に親切に」という大きな目標に沿って、己の立場
を見失うことなく今の自分自身の立場を認識して、
まだ見ぬこれからの麗澤大学で共に学ぶであろう
「新入生」に「大学ってこんな所なんだよ」「大学
生ってこんなに楽しいんだよ!」と、私が麗澤大学
の学生生活のなかで体験してきたモノ・事・すべて
を語りつくすだけでなく、私に「大学生活は楽し
い」と思わせてくれた人たちを皆紹介したいと思
いました。

が、しかし実際にこの谷川オリエンテーションに
私の紹介したい方々に来ていただく事も出来なけれ
ば、何より私自身の口から私の言葉で紹介しない

と、「新入生のため」にならない。更に言えば、私
自身のためにもならないのです。この時は、私はま
だ大勢の人たちの前でしゃべるといふ経験がありま
せんでした。また自分から積極的に人前にでて発言
をするようなことも今までしてきませんでした。強
いて言えば、大学の授業で担当を割り当てられたレ
ジュメ発表や、意見を求められた時の発言くらいで
した。まして私は日ごろの学習態度がお世辞にも良
いと決して言えない学生でしたので、レジュメ製
作は発表一週間前に範囲を確認し(もちろん担当箇
所は二ヶ月も前から割り振られていたのですが)、
発表二、三日前になってやっと担当箇所を予習し始
めたり、参考文献を探し出す様な学習計画が日常的
な人間でした。正直に言わせていただくと、「自分
が経験してこんなに楽しかったんだから、発表内容
の原稿なんて無くとも、雰囲気やノリで自分の伝え
たい事の七割は伝わるだろう」等という甘い考えで
構えていました。その根拠は今思い返してみても、
正にただの「自信過剰」としかご説明できません。

自分でこの頃を名付けるとすれば「若かりし無鉄砲時代―路の臺―」。谷川へ向かう日時が近づいてくると同時に発表のリハーサルを繰り返し行つて、より「新入生に親切」な発表内容に近づけるように最終調整の段階に突入しました。前記にもあるように、最初私は頭の中にある楽しかった思い出を、徒然なるままに引つ張り出しながらお話しする予定でした。ですが周りを見てみると自校史スタッフの皆が自分の話したい内容を紙に書いて用意していました。リハーサルの時は手元に置いて、目線は上に。その姿は背筋が通つていて姿勢が良く、今までの学生生活の充実ぶりや自信、魅力的な輝きを放つて堂々とした態度でした。一方私といえば、頭の中にあつた「楽しい思い出」を引つ張り出すのにまず時間がかり、引つ張り出した「楽しい時間」について話す順序立てに時間がかかり、半ば考えながら話しを構成するので目線は下にさがつて、口からは「えー」や「あー」などのつなぎ言葉を連発してしまいました。結局自分の中にあつた「楽しい思い

出」話は頭の中で一つの楽しい思い出ボックスに沢山入っていたために、「新入生に親切」な、分かりやすい話しは全く出来ませんでした。そこで初めて自身の考えの甘さ、新入生に対してこのような心持ちでいることは失礼だということに気付きました。それまで私の中には下書きやカンペの類は一つの資料という見方よりも、自分の弱さの象徴のような考えていました。ですが、この一件で考え方が百八十度変わり、発表をよりよいモノにするためのモノ、発表を聞いてくれる人たちに自分の一番ベストな発表をするための重要な資料だとプラスの方向に捉えられるようになりました。その結果、私の自校史スタッフとしての谷川オリエンテーションキャンプの三日間は、無事に何事もなく大成功！と、話はうまく進みませんでした。

いざ廣池千九朗博士縁の地、群馬県の水戸・谷川へ赴き、各専攻の上級生スタッフと新入生を乗せたバスを心待ちにしながら待機し、間もなくして谷川で始まる三日間での最初の説明が始まりました。自

校史スタッフも「最初だから雰囲気になじむことも考えつつ……」と、自分の心臓音が早鳴るのを落ち着かせるように深呼吸をして、いざ「新入生に親切に」。結果、移動時間のロスや連絡不行き届き。小さなミスこそありましたが、専攻のスケジュールをずらしてしまう様な大きなミスは幸いにもゼロに抑えることができました。私自身も、ペアでの発表や個人で話す場面など、リハーサルの時点で資料の大切さに気づいたお陰で、新入生の皆の顔を見ながら話す事ができました。私にとっての分岐点は二日目です。

二日目の私は初日の感触が良かったことに驕り、ペアでの発表中に練習にはなかつた情報や専攻スタッフへの急な無茶ぶりなど、一人で勝手に面白おかしく暴走してしまいました。勿論そのツケは自分自身に返ってきて、ペアでの発表のリズムは崩れ、専攻スタッフの方々も急なことで困惑させてしまい、新入生も私の空暴走の空気を察したか「本当に私たちの事を思つて説明しているのか」「内容が入つて

こない」のような空気が漂い始めたのを鮮明に記憶しています。気付いた頃には時、既に遅しでした。どんなに弁解しようと思つて説明をしても、今までのリハーサルで何十回と練習してきた相手とのやり取りはどうとうできず、たった一回の練習とは違うことをしただけで見事に歯車は噛み合わなくなり、自分史上最悪の流れで、その専攻の説明は終えなければなりません。話の最後には新入生に対しても「なんかグダグダになっちゃったけど、ごめんね！」と一言付け足し、発表の相手には平謝りにも近いほど謝り、専攻の上級生スタッフ・教授陣には精いっぱいお詫びを述べました。この発表を見守つてくれた方々・迷惑をかけてしまった人たちに謝るたびに自分の犯した間違い、今まで積み重ねてきた事を私個人の一時的な「驕り」という感情で台無しにしてしまったことを痛感させられ、いかに自分が思慮に欠けていて周りの状況判断能力に欠けているのが身にしました。この時はただただ自分が起こしてしまつた事態がとて恥ずかしく、私はすぐ

に自己嫌悪になりました。が、谷川の三日間の各専攻スケジュールは分刻みです。私個人の勝手な失態が原因で一人うちひしがれて居られるような時間は一刻もありませんでした。気持ちを切り替えて、次の専攻グループには妙なアドリブなどいれず、真剣に「新入生のための説明」に努めようと心を切り替えることに専念してその日の失態以降の発表は一心不乱に「新入生に親切に」を頭の中において説明をしました。この時程、真剣に誰か相手の事を思っ

とは違い、自分たちで企画立案運営、総て仕切らねばなりませんでした。その様な意味で、また二〇一〇年も違う意味で初めて尽くしの自校史スタッフでした。二〇〇九年同様川久保コーチの寛大な管轄のもと、私たち自校史スタッフは「新入生に親切に」「新入生のために心を砕いて」歩むことに努力し続けました。個人的には、二〇〇九年の教訓を活かして資料は常備し場と状況を考えた上での補足説明を臨機応変に入れられたらという目標を持って三日間に臨みました。

て真剣にものごとを説明することを意識したことはありませんでした。その晩の自校史スタッフ内での反省会で私、普段の考え方や行いがこのような大事な時に出てしまうという、日ごろの行いが何にも勝るものなのだと改めて学習しました。

二年連続で新入生オリエンテーションキャンプの自校史スタッフを務めさせて頂いた中で身につけられたもの、貴重な失敗の経験。人を本当に思いやるということとは。沢山の成長の場、きっかけ、時間を自校史スタッフは与えてくれました。これからも何度となく自分の自信に溺れたり、自分を見失うことも出てくるかもしれませんが、その度にこの経験を思い出せば、身を引き締めようと思います。

〈特集〉 自校教育

自校学習Ⅱ品性向上の場

今野 慧
(経済学科三年)



この『麗澤教育』がみなさんの手に届く頃には学園の桜並木が満開の花を咲かせ新一年生が麗澤大学に入学してくると思います。まずは新入学生のみなさん入学おめでとうございます。もし大学で私を見かける機会があればどうぞ遠慮なく声をかけてください。

毎年、外国語学部の新入生は大学のオリエンテーション(最初の説明会)で群馬県みなかみ町にある谷川セミナーハウス・大穴記念館を見学する行事があります。その行事で私は本学の教育理念「知徳一体」や創立者廣池千九郎博士の「道徳科学」、麗澤

大学の歴史などを新入生に紹介する自校学習プログラムを担当させていただいています。

このプログラムはもともと必修科目・道徳科学の先生が行っていました。この自校学習プログラムを学生が新入生に伝えてみてはどうか?という試みが、三年前から始まりました。私は一年生の後期にこの活動を知り、興味本位で担当の川久保剛准教授の教室を訪ね、自校学習クルー(二〇〇九年サークル化)の一員になりました。そして仲間と共に新入生の前で話したのを今でも覚えています。

そのこともあり学校に戻ると、新入生が私の顔を

覚えてくれていて元氣よく挨拶してくれたり、廣池千九郎の思想を知って興味を抱いてくれた人もいました。このプログラムは、新入生が麗澤・瑞浪高校か、モラロジアンの家出身でないならば、文字通り道徳科学に触れるファーストコンタクトです。そんな大切なことを学生である私たち自校学習クルーに託すなんて、麗澤大学の信頼は底抜けに厚いと感じました。

またこの自校学習クルーサークルは現在、井出元教授を顧問として、井出教授の研究室で、麗澤の歴史や道徳科学の論文などについてにぎやかに議論しています。多数の井出ゼミOB・OGの方たちも参加し、様々な収穫があります。先輩たちの話は大変面白く、中には一年間休学して世界を回ってきた人の話であったり、モラロジ専攻塾で勉強している人と話したり、井出教授の専門分野の中国古典の話から自分の品性向上に足りないものを探したりして、井出教授や仲間と一緒にいるだけで楽しく温かい時間を過ごすことができます。これこそが麗澤ら

しい先生と先輩と後輩との関係を味わえる場だと思いました。

麗澤大学の自校教育の一つに「大学生のための道徳教科書」作成のワークショップがあります。これは中山理學長をはじめ、道徳科学の先生と私たち学生が一緒になって新しい道徳の教科書をつくるというものでした。ワークショップは新入生のオリエンテーションを行った谷川セミナーハウスで開催されました。各学生は小グループに分かれ、担当の先生と自分の担当する章についての議論に議論を重ねました。私はこの教科書の廣池千九郎の歴史の部分について話し合いましたが、グループ内での議論は廣池千九郎の歴史を議論していたにも関わらず、進行方向が変わり、当時の政治状況や自分の好きな偉人の話、はたまた谷川の温泉の気持ちよさの話などで何度も脱線したような気がしました。その時、中山學長から、「この教科書は日本で最初の道徳教科書になります」という話を聞いた後は、「この教科書で新入生は勉強するのだ」という責任感、熱意がワ

ークショップに参加していた皆に伝わった気がしました。そして一日がかりの議論を終えた後は、先生方との懇談会があり、実に楽しいものでした。私はお喋りが好きなので、これを機会にと数多くの先生や友達と夜通し話続けました。皇室研究が専門の先生、宗教・生命倫理など私たち学生が知る由もない広く深い世界について、まるで子供が自分の好きなことを嬉しく話すように熱心に語っていただきました。中山學長には歴史、特に中世ヨーロッパのピュリタン革命から見出す、近現代ヨーロッパ人の本質を話していただきました。中山學長の話を聞いているうちにふと、話好きの私は學長と性格が似ているのではないかと感じました。話して話して、とにかく話す。相手に自分の知識を聞いてもらうのが、私は無性に好きです。同時に相手の話すことをすべて聞くのも好きです。自分が所持していない知識を教えてもらうと非常に嬉しく感じるから聞くのだと思います。

しかし私はこの「話したが、聞いたが」が全

員に及んでいるわけではなく、ある特定の人に話したいし、聞きたいというのが本音でした。では一体何が私を話したが、聞いたがりにするのか。それは相手と自分の品性にあるのではないかと考えます。品性を計量する目安はありません。その人がどれほどの品性の持ち主かは絶対的にはわかりません。しかし、どれほどの品性の持ち主かは、言葉や態度で伝えたいことと共に相手に伝わるものだと、小さなころから漫然とそう考えていました。そして私は麗澤大学で勉強していくうちにハッキリとわかりました。井出教授や中山學長のみならず麗澤には学生を心から気遣い、私たち学生と真剣に向き合おうとして下さる先生や職員が数多くおられて、その方たちと一緒に生活していると、ごく自然と私も同じように友達や先輩、後輩に気遣いを持ち接したくなりしました。

次の言葉を井出教授から教わりました。「品性は人のために努力することによって高められていくもので、他人の品性を感化しようとしてはいけません

ん」。この言葉が印象深く私の心の中に刻まれています。普通なら他人を良くしてあげたいと考えがちですが、それは違うことに気付かせていただいたのと、自分の勉強不足を感じました。

江戸時代の学者に「諸業即修行」と言った人がいます。

すべての出来事や行いは自らを鍛えるという意味で、全て自分が成長するための糧になりえるという考えです。私は現在三年生。これから就職活動を控えて自己分析や企業研究に力を注ぐでしょう。もしかしたら途中で心苦しくなる時が来るかもしれませんが、この麗澤で培ってきた知徳一体の精神と、まだ未熟ですが、自分が持ちえる最高の品性を持ってこれから先のどんな困難も成長するための糧と考え進んで行きたいと考えています。

そして将来、私はこの麗澤と出会った縁を大事にして、自分が息を引き取る最期までモラロジを勉強したいと思います。そうなるためにも就職活動を品性向上の場と捉え、未来の良い社会を作り上げて

いく一員となるためにも、力の限り邁進していきたいと思います。

この『麗澤教育』は新入生や新入生のご家族の方もご覧になる機会があるかと思いますが、再度麗澤大学を紹介いたします。私たち麗澤大学は勉強のみならず課外活動やボランティア活動など各学生が活発に活動しています。高校時代にできなかった事にチャレンジできたり、将来を考えて勉強したり、海外に留学できたりと、新入生のみなさんは、環境がガラリと大きく変わる、今までになかった様な生活をこれから過ごしていくことでしょう。

もし入学してそんな学生生活に戸惑ったり、不安になったら、それを打ち壊す方法があります。それは：私たち先輩に何でも相談してください！優しくなんでも教えます。先輩のみならず先生も必ず相談に乗ってくれます。「困ったらず相談」。全ての先輩が味方になってくれると思います。私も入学して不安でしたが、私が部長を務めているゴルフ部に巡り合ったのも、オリエンテーション（学生生活の説

明会）の時にゴルフ部の先輩と出会ったことがきっかけです。みなさんも恐れずに先輩と話してみてください。それでは学校でお会いしましょう！





高校生対抗企業経営チャレンジ21
(2010・8・17~18)



イエーナ大学から教育実習生 (2010・7・20)



学生が成田歩き (2010・9・16~17)



稲野辺茉莉さんが中国語カラオケ大会2位
(2010・8・27)



盛んに麗陵祭 (2010・11・5~7)



船井慎太郎選手、箱根駅伝を走る
(2011・1・3)



日銀グランプリで最優秀賞 (2010・12・4)



チョウドウリ・コウシクさん(右)にIABD (International Academy of Business Disciplines) 学会から“Best Young Scholar Paper”賞授与
(2010・4・8~10)



野外昼食会 (2010・5・13)



中国青年代表団少数民族団が来学
(2010・5・28)



入学式 (2010・4・2)



留学生歓迎懇親会 (2010・4・23)



日独学長会議 (2010・5・17~18)



留学生が高校生と交流 (2010・6・21)

麗澤大学新校舎「あすなる」

総務部副部長 炭崎清太郎



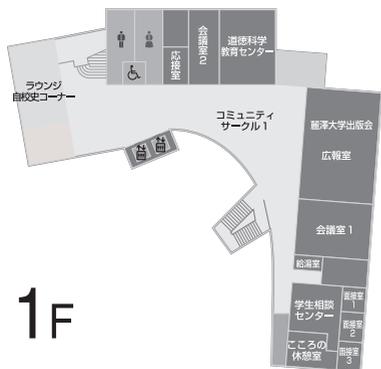
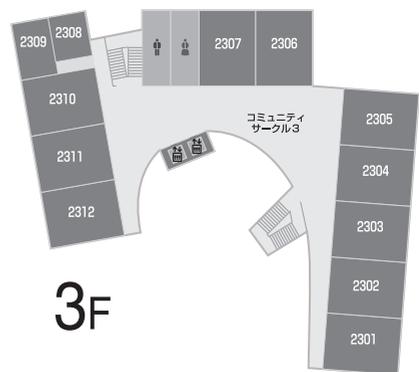
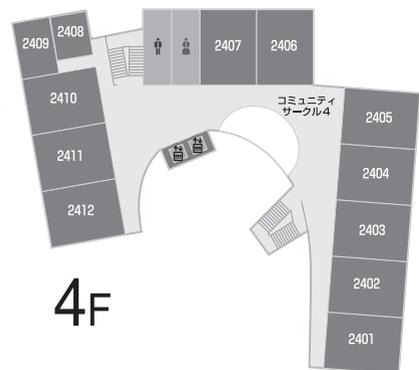
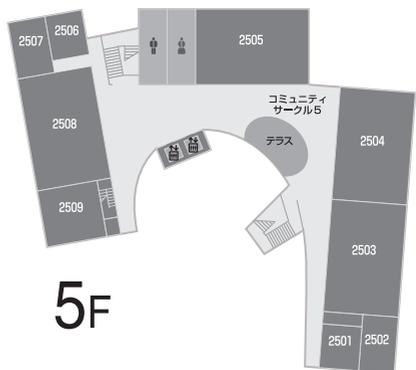
経緯

廣池学園創立七十五周年・麗澤大学開学五十周年の記念事業の一つとして、昭和三十四年竣工の校舎二号棟の建て替えが計画されました。この計画により実現すべき目標は以下の通りでした。

- ① 二学部の学生に対し、ほぼ同一の学習環境を提供する。
- ② 学生に対するサービスの向上をはかる（ワンストップサービスの実現）。
- ③ 耐震構造等、懸案の課題を解決する。
- ④ 事務の合理化に資する。

この計画及び大学学生寮建て替えの基本計画及び設計条件の検討を行うために、平成十九年四月に麗澤大学施設整備検討委員会が設置され、同委員に理事から校舎二号棟に関する整備の基本方針として、以下の通りの諮問事項がありました。

- 【新校舎二号棟整備の基本方針】
- ① 新二号棟の設置は、マスタープランに基づき旧三号棟及び現部室棟の跡地とする。
 - ② 現部室棟は撤去する。
 - ③ 法人及び大学の管理機能の整備もあわせて行う。



- ④ 新事務組織に対応した施設づくりを行う。
- ⑤ 一号棟と新校舎相互の機能の明確化を図る。
- ⑥ 維持管理の負担に配慮した施設づくりにつとめる
- ⑦ 財源は、組み込み済みの二号基本金をもってこれにあたる。
- ⑧ 記念募金を行い、これを財源の一部とする。委員会ではこの基本方針のうち①及び②について、麗澤大学の将来の拡張性、学生動線の広がり、外部からの視認性の向上という視点から、新校舎建設位置の変更を検討し、十九年七月の理事会に交差点付近への変更を上申し、同年九月の理事会にて建設位置変更が承認されました。

- 諮問事項に対する答申の要約は、以下のとおりです。
- ① 教室数は中教室（八十人）四室、標準教室（四十人）二十二室、小教室（十八人）八室の計三十四室。（実際の設計は三十三室となりました）
 - ② 校舎一号棟に二号棟より学務部キャリア支援課を移動し、新校舎に一号棟より国際交流課、二号棟より企画部広報室、日本語教育センター（ライティング支援室も併設）、学生相談センターを移動し、更に新校舎に学生総合インフォメーションオフィスを設置する。
 - ③ 法人事務機能の中心はそのまま校舎一号棟におく。
 - ④ 学長室、副学長室、事務局長室は現在のまま校舎一号棟とする。
 - ⑤ 会議室は新校舎に三室整備する。教授会などの大会議は校舎一号棟で行う。
 - ⑥ 新校舎には理事長室等を整備しない。

- ⑦ 新校舎には名誉教授室等を整備しない。
- ⑧ 学生の既存キャンパスとの移動の安全性を考慮え公道をまたぐブリッジの検討。

始まり、二十二年十二月二十一日の竣工式をもって完成となりました。

新校舎「あすなる」のハード面の特徴

- ⑩ 新校舎に整備する必要な事項（アメニティ等）として学生の集えるラウンジ、自校史コーナー、学生用貸し出しロッカーの設置、教職員休憩室、男性の二倍の広さの女性用トイレ（化粧室も含む）、カフェラウンジを設置する。

以上のような答申を基に設計コンペがなされ、（株）岡田新一設計事務所が設計監理を、その後の指名競争入札で清水建設（株）が施工業者として決定しました。

二十一年五月八日に安全祈願祭と木魂祭を行ってから樹木伐採に入りました（一部は移植を致しましたが、合計で百七十五本の樹木の伐採となりました。伐採木はその歴史への感謝をこめて校舎内のベンチやテーブルさらに交差点側の大窓の木枠等に利用されています）。

その後二十一年十月一日の起工式から本体工事が

① 外構の歩道にはインタローッキングではなくレンガブロックが使われ、より土に近い自然の感触が得られます。またウッドデッキの板は南米アマゾン流域のイペという木が使われ、これは比重が一・一二で水に沈む非常に丈夫な木材です。

② 緑の効果 夏の森は周囲と比較すると一〜二度涼しいと言われます。その理由は樹木や芝生は地中から水を吸い上げて葉から蒸発しているため、日差しを浴びても表面の温度があまり上がらないことが要因です。あすなるは木々の間に立てた建物です。この恩恵を十分に受けています。更にあすなるの南側の木々は落葉樹で、夏には葉が生い茂り、日影を作り緑のスクリーンとなります。冬は葉を落とし日差しを取り込みます。

③ トイレに関して「あすなる」は特に力を入れ

ています。(株)岡田新一設計事務所の多田氏に書いていただいた一文を掲載します。

(学校トイレ考)

近年、学校におけるトイレのあり方が見直されつつあり、オープンキャンパスにおいても、高校生の重要な評価項目のひとつとされている。「あすなろ」においても、建築計画上の重要ポイントと位置づけられ、企画段階く設計段階く施工段階と各フェーズにおいて様々な議論がなされた。

トイレは通常、建物端部の目の届きにくい場所に配置されることが多いが、新校舎においては各階のおおよそ中央に配置している。目が届きやすく、学生がアクセスしやすい場所に配置し、開口部から光を取り入れることで、従来の陰気な雰囲気とは異なる、安全で快適な空間とすることを意図した。学生数の男女比や男女における利用時間長さの差を考慮し、各階とも、女子トイレは男子トイレの約二倍の広さに設定した。左右のどちらかに障害のある方に

配慮し、多目的トイレは一、二階にそれぞれ一箇所ずつ、逆勝手配置とし、一階にはオストメイト用衛生器具を設置した。二階の女子トイレには、専用のパウダースペースを確保し、三、五階の女子トイレにも化粧用の鏡(洗面器具をつけず、鏡により近づける配慮)を設けている。女子トイレの各大便器に擬音装置を設置することで節水に配慮した。

学生さんは荷物を持つての移動が多い。洗面器をカウンター埋め込み型とすると、カウンター面が濡れてしまうことが多く、逆に手荷物を置くことが難しくなってしまうので、独立型洗面器とは別に奥行きのあるライニングカウンターを設けるなど、各スペースに専用の荷置き棚やフックを設ける工夫をした。(文責多田氏)

④ エコへの配慮

*外部に接するガラス面はペアガラス(二重ガラス)を使い断熱を計っている。

*空調機は高効率仕様で従来の機器より三五%の

節電ができ、二酸化炭素の削減に寄与している。

また東京電力の「環境配慮型高効率熱源機導入支援制度(空調分野)」より若干の補助金をいただきました。

*メンテナンスデッキとしてコミュニティサークルの外部にガラス拭きなどのメンテ用として足場を設けましたが、これは小ひさしとして、先端に設けた水平ルーバーとともに真夏の日差しを防ぐ作用を持っています。

*春秋の中間期は定風量換気装置等による自然換気のみで過ごせます。

*今回太陽光発電は実現できませんでしたが、将来屋上に太陽光パネルを設置できるような構造と なっています。

⑤ その他

*メンテナンステッキのない階段部のガラス 交差点側風除室上の窓のガラスには特殊コーティングが施され十年間は外側のガラスの清掃は必要ないと言われています。

*既存キャンパスと「あすなろ」をつなぐ公道をまたぐブリッジは木々の間を通りぬけて、緑の小道として非常に楽しく心躍るブリッジとなっています。

*南側のやすらぎの広場、それに続くくつろぎの広場はイペデッキとレンガブロックの組み合わせで、名前のとおり安らぎとくつろぎを感じさせてくれる素敵な散歩道となっています。

以上新校舎「あすなろ」の建設の経緯と建物の特徴を書かせていただきました。この「あすなろ」がわが麗大の学生達に末長く愛され続けること、この「あすなろ」に集う学生が緑の中で安らぎとくつろぎを得て大自然より元気をもらえるよう祈っております。

新校舎「あすなる」設計に際して

— 開学五十周年記念の新校舎を設計させていただいた栄誉に感謝して

（株）岡田新一設計事務所 執行役員取締役副社長 柳瀬 寛夫



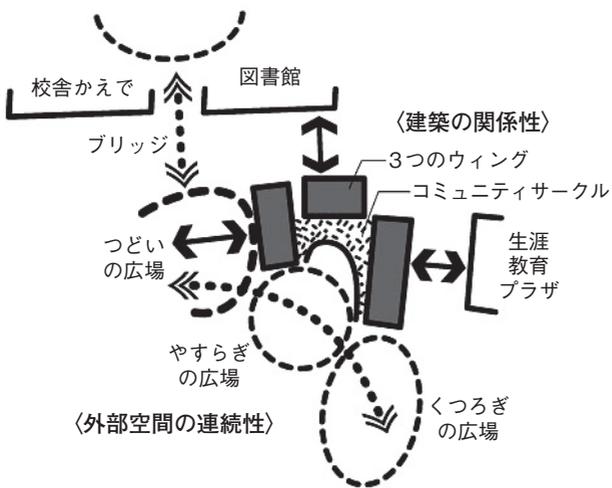
大学の前身である専攻塾の食堂や寮の写真に、決して脇役でない「学校建築」としての主張を感じて。全寮制による日常生活を通しての学びの舎は教室内に留まらず、自学の場を中心であった図書館とともに、麗澤教育環境の「原風景」として、現代の私たちに語りかける。

そうした原点を踏まえ、新校舎の設計においては、学びの場となりうる空間を教室内外に散りばめるべきと考えた。それは内部に限らず、むしろ積極的に外部空間へと意識は向かう。大学キャンパスの面白さは、大勢の学生や多くの専門分野を包含する

複数の建築が、群として寄り添うところにある。建築と建築の間は、単なる隙間ではなく、人々の感性に語りかける魅力的な広場や中庭でありたい。建築と外部空間とが一体になったフィールドが、学生同士や先生方とのコミュニケーションをより強く誘発する。それは麗澤の教育方針に沿うものである。また麗澤の森を活かすことでもありと思われ

た。リアルなふれあいの舞台が、母校の風景として長く記憶に残る。

ちなどと、お互いに活かしあえる「関係性」を重視する。こうした発想は、どのような建築でも敷地内だけで捉えるのではなく、周辺環境ひいては都市を創る視点を持つべきとする岡田新一設計事務所の設立以来の設計思想に基がある。



それでは岡田を中心とした設計チームによる「森の中の」新校舎の設計プロセスを振り返る。

まず第一に、ひとつの塊で完結する建築を選択肢から外した。それは既存樹木を一本一本調査し図面にプロットしていく作業を通して、残すべき樹々の間をぬって建てるには校舎を分節せざるを得ないと判断したからである。次に、廊下を挟んで教室が向かい合う「中廊下型」校舎ではなく「片廊下型」とし、廊下の窓からも森がみえるべきと考えた。方角により光の当たり方違う森を、ほぼ同時に感じ取れた方が、緑の陰影を通して自然の移ろいを実感しやすい。結局、三つのウィング（棟）をコの字に配置し、それらの内側を廊下とラウンジを一体化したパブリックスペース（コミュニティサークル）でつないでいく構成を提案した。

コの字を形成する三つのウィングは、それぞれ外部環境への呼応を優先させているので、直角の関係にはない。一つめはバス通りを挟んで「生涯教育プラザ」と、二つ目は廣池通りを介して「図書館」と

対になる関係性を重視して向きを決めている。その目的は道路の存在を越えたキャンパスの連続感の強化にある。

三つめのウイングは、木造の多目的ホール跡地にぽっかり現われた空地に正対している。このオープンスペースは学生主催のイベントやコンサートを開くには手ごころな広さを持つので「つどいの広場」と呼び、その可能性を広げるようにウイングを配置した。そして半外部空間（一階ピロティや二階テラス）を創って広場との融合を図っている。ちなみに三つのウイングが直角ではなく、コの字の先をすぼめた平面形をしていることは、機能性を妨げるものではなく、むしろインテリアの幾何学を緩和し森になじむ印象を強めてくれる。

配置計画上で、重視したのは、こうした建築と外部空間との関係性であり、建築をつないでいく外部空間の連続性である。キャンパス全体でみると、「校舎かえで」と「二号棟」の間のユリノキの樹列のある「芝生広場」が最も広く中央近くにある。それが

方として、例えば既存の原木、ヒマラヤスギをバツクにステージを組めば、校舎やサークルブリッジは客席に早変わりする。逆に校舎二階のテラスを舞台に、広場から見上げる企画も可能であり、学生たちの自発的なアイデアに期待したい。

既存樹は常緑のシラカシ、ヒノキ、落葉のイヌシデが多く、花が咲く木としてハナミズキなどを補植している。この「つどいの広場」は新校舎の半外部空間（一階ピロティや二階階テラス）を透かして、コの字のウイングで囲まれた中庭へとつながっていく。その中庭は校舎各階のコミュニティサークルなどから、よく見える外部空間なので、色とりどりのオーナメンタルグラス（観賞用草類）で足元を覆い、多様な樹種の落葉樹が楽しめる「やすらぎの広場」とした。春から夏にかけてコブシ、ホオノキなどモクレン科を中心とした花期は間断なく続き、紅葉の色合いや葉を落とす時期も多様である。二階から「舞い落ちるリーフをモチーフとした外部階段」を降りながらも、この明るい森は体感できる。晴れ

「校舎かえで」と「図書館」との間の「小広場」につながっている。

設計に際し、ここからブリッジで廣池通りを越え、新校舎用地に連絡することが所与の条件であったが、いきなり校舎内に招き入れるのではなく、「つどいの広場」で迎える構成を提案した。このような外部空間をつないでいく手法により、キャンパスの連続感は強まる。人の動きもわかりやすくなり、同じキャンパスで学ぶ共同体意識もより強く育まれる。道路を横断したブリッジは左右に分岐し「つどいの広場」をサークル状に領域化する。普段は思い思いに集うこの芝生広場の使い



この芝生広場の使い

た日には外壁に木々の影が映る。レンガタイル面はくつきり、金属面はぼんやりと、ガラス面は照り返しと透過した陰影とが重なる。校舎内からは、この広場を主に北から南方向にみることになるので、樹種は様々でも、根元から幹が分かれる「株立ち」の樹形を徹底した。一本の太い幹よりも光が廻り込み陰を和らげてくれるからで、外部階段の踊り場を支える丸パイプも「株立ち」構造にして木立ちになじませている。

「やすらぎの広場」から南は、かつての公団商店街跡地であり、グループで語らうのに程よい空間性能を持っていたので、起伏ある芝生広場とした（くつろぎの広場）。中央に孔子廟ゆかりのカイノキ、周辺にソメイヨシノを配し、総合本館側のロータリー・駐車場のウメからつづく春の景色、秋の陽だまりの紅葉に特長を持たせている。

続いて内部空間について。

五階建てのうち三〜五階が教室階、一階は執務室



や学生相談センター、そして二階は執務室の他、学生インフォメーションセンター、ブリッジを渡って受けの空間となるカフェラウンジ、Iラウンジなどがある。ボードデッキのテラスには学内人気投票で一位となったイタリア製リップル

チェア（外部仕様）が並び、森の中のオープンエアで快適なひとときを過ごせる。また各階のコミュニティサークルでは室内人気第一位のRLチェア（イギリス人デザイナー）が語らいの場をつくる。

三層にまたがる教室階のコミュニティサークルは各階ごとに印象を変えている。三階は吹き抜け下の階として上方に広がりを感じさせる。空間の続く四

階からは三階を通して「やすらぎの広場」がきれいに見下ろせる。五階にはテラスがあり、天気の良い日にはスカイツリーが遠望できる。また階ごとに樹木の違いが実感でき、プロポーザルで提案した、高さに応じた葉の付き方や生息する鳥や虫の違いを感じ取れる環境はほぼ実現できたように思う。

さて、コミュニティサークルからガラススクリーンを通して見え隠れする教室は、実際に教鞭をとられる先生方の意向を可能な限り反映させた機能的な造りとなっている。例えば教室の平面形は教壇からみて縦方向に長い一般的な平面形ではなく、当初より横長であった。ここに教える側と学ぶ側との距離を縮めたいとされる強い意志があり、グループワークなど多様な学習形態もしやすくさせる教育方針が感じ取れた。ホワイトボードも教室内可能な壁に複数設置することが求められた。提案としてコミュニティサークルのガラスパーティション面には着脱式キャンバスボード（ミニホワイトボード）を設置した。授業時間外でも学生たちや時には先生方も加わ

って、自由に書き込みながら楽しく学びあう姿をイメージしているが、実験的な試みなので、活発な利用アイデアに期待したい。

インテリアの色彩計画では、外の緑ばかりでなく学生の服装や表情を生き活きと引き立てる背景として、またポスター掲示板・パンフレット棚から発信される新鮮情報の色が加わって華やいでみえるように白を基調とした色使いに抑えている。ポスターの張り方やパンフレットの置き方などグラフィックな要素は、大学の今を伝える重要なメッセージであ

り、デザイン重視の潮流からも、それを美しく支える意識で建築や装置を提案させていただいた。建築がいつも変わらぬ表情を継続する中で、大学の鮮度をアピールするためには、四季折々に表情を変える森、日々新たな人々、センス良くビジュアルな掲示や展示などをいかに引き立てるか、それを追求することが最も戦略的であると考える。

最後になりましたが、建設現場にも足しげく通い激励くださった廣池理事長先生をはじめ、多くの先生方、職員の皆様のご指導をいただき、ようやく完成の日を迎えることができました。改めてお礼を申し上げます。



教育奨励賞を新設

総務部課長補佐 生方 亨



学長賞の制定

学長賞は二〇〇〇年四月、「麗澤大学における学術・研究、教育、社会貢献活動の奨励・振興をはかるために、顕著な業績を発表した者を表彰する」ことを目的に、専任教員を対象として「学長賞」「学長奨励賞」が設けられました。昨年は、「教育奨励賞」が新設されました。「今まではどちらかと言えば学問的業績に軸足を置いていたが、教育の重要性がますます高まる今日の大学教育において本学のロールモデルとなりうる献身的な教育の取り組みに対し、これを表彰すべく設けた」（中山理学長）と説

明されています。さらに従来の「学長奨励賞」を「研究奨励賞」に変更し、二〇一〇年度から「学長賞」「研究奨励賞」「教育奨励賞」の三本立てになりました。

これまでの受賞者（肩書はいずれも受賞当時）

これまでの「学長賞」の受賞者は、別表のように初年度、翌年度と該当者はありませんでしたが、二〇〇二年度に中山理教授が十七世紀のイギリスの詩人、ジョン・ミルトン研究で著した「Images of Their Glorious Maker—Iconology in Milton's Poetry」初め

て受賞。この後、川窪啓資教授、小野宏哉教授、櫻

井良樹教授、堀内一史教授、梅田徹教授と高巖教授の共同受賞、滝浦真人助教授、保坂俊司教授、梶田幸雄教授ら計十人が永年の研究成果を著作物にまとめ発表、それぞれの研究が評価されて受賞されています。

一方、「学長奨励賞」は高巖助教授が初受賞。「金融機関のコンプライアンス・プログラム」「企業倫理のすすめ」「ビジネスエシックス」の著書三冊などが評価されました。続いて大塚秀治助教授、倍和博助教授、田中俊弘准教授、清水千弘准教授、籠義樹准教授の六人が受賞されています。

今年度の受賞者

今年度は、学長賞の該当者はありませんでした。研究奨励賞については、両学部専任教員からの推薦を受け、審査に基づいて、また教育奨励賞は学部長の推薦に基づいて、それぞれ学長賞選考委員会で厳正かつ慎重な選考が行われました。その結果、研究

奨励賞二件、教育奨励賞四件が選考されました。

(1) 研究奨励賞

【外国語学部】

① ハル、ケリー・M教授

編著書*The Ch'orti' Maya Area: Past and Present*によって多様な論文を編集した力量と有益な見解を提示したこと。

【経済学部】

② 陳玉雄助教

著書『中国のインフォーマル金融と市場化』によって未開拓の分野に取り組み意欲的かつ有意義な研究を示したこと。同著の業績により、先生はパーソナルファイナンス学会より二〇一〇年度学会賞を受賞されました。

(2) 教育奨励賞

【外国語学部】

① 竹原茂教授

長年のタイ・スタディ・ツアーやボランティアサークルなどを通じて学生に教育的感化を与え、学



ケリー・M・ハル教授



陳 玉雄助教



竹原 茂教授



三瀧正道教授



上村昌司准教授



清水千弘准教授



大越利之助教



中野千秋教授



倍 和博教授

生の国際貢献活動を活発化させました。特にスタディ・ツアーでは、学生の視野を広げ、国際協力に対する関心を高めました。

② 三瀧正道教授

独特の教育メソッドを開発し、常に学生にやる気を引き出すことを通して、中国語教育に目覚しい成果を挙げました。これらの成果をさまざまな著作物として、社会にも還元し、本学の中国語教育の評価を高めてきました。

【経済学部】

① 上村昌司准教授、清水千弘准教授、大越利之助教（「経済学入門ゼミナール」担当）

② 中野千秋教授、倍和博教授（「経営学入門ゼミナール」担当）

経済学部はグループとしての受賞となり、教育の成果が学生アンケートにも反映されているように、これらの先生方はそれぞれに熱意と工夫をもって授業に取り組みされました。

推薦者である高学部長からは、表彰式で「今後も

FDなどを通じて、それぞれの努力や成果を共有し、さらなる改善に努めてもらいたい。既にこれまで大きな貢献を果たしてきたと言えようが、さらに一層のリーダーシップを発揮し、学生基点の徹底に努め、他の教員のロールモデルとなって戴きたい」との激励のコメントがありました。

	滝浦 真人助教授	学長賞	・著書『日本の敬語論——ボライトネス理論からの再検討』は、日本人の敬語意識を高めるものであり、自国固有のものと考え方を再認識させるもので、広く啓蒙書としての役割を果たすと評価された。
	倍 和博助教授	学長奨励賞	・著書『CSR会計を導入する』は、財務会計の中でCSR関連コストの統一を目指し、CSR関連コストとして識別されていない部分をマネジメントサイクルの中で順次洗い出し、コスト項目として整理していこうというもので、その第一歩を踏み出したものとして評価された。
19年度	保坂 俊司教授	学長賞	・著書：『国家と宗教』『宗教の経済思想』は、専門の比較宗教学の基礎に立って、国家と政治、経済思想と経済倫理の研究を体系化。比較宗教、比較思想、比較文化、比較文明論などの知見を駆使して専門 研究の成果を一般の読者に伝えることに成功したと評価された。
	田中 俊弘准教授	学長奨励賞	・翻訳：『日加関係史 1929-1941 戦後に向かう日本——カナダの視座から』は、カナダが東アジア諸問題にどのように対処したかを描くカナダ外交史の研究書を翻訳したものであるが、複数名の訳者がある中で主導的な役割を担ったこと、また「カナダ首相出版賞」を受賞したことなど。
20年度	清水 千弘准教授	学長奨励賞	・著書：『不動産市場の計量経済分析』は、複雑な不動産市場を読み解く技術の解説を目的としたもので、不動産市場の計量経済分析に重要な一石を投じたこと。
21年度	梶田 幸雄教授	学長賞	・著書：『中国のM&A—その理解と実務』、『中国ビジネスのリーガルリスク』、『中国国際商事仲裁の実務』など、多くの著書で、中国ビジネスにおける法的対応を論じたものであり学術的に優れた専門書と認められたこと。
	籠 義樹准教授	学長奨励賞	・翻訳：『嫌悪施設の立地問題——環境リスクと公正性』は、嫌悪施設の立地問題という困難な課題に取り組み有益な見解を提示したこと。
22年度	ハル・ケリー M教授	研究奨励賞	・編著書：『The Chōrti Maya Area: Past and Present』によって多様な論文を編集した力量と有益な見解を提示したこと。
	陳 玉雄助教	研究奨励賞	・著書：『中国のインフォーマル金融と市場化』によって未開拓の分野に取り組み意欲的かつ有意義な研究を示したこと。
	竹原 茂教授	教育奨励賞	長年のタイ・スタディ・ツアーやボランティア・サークルなどを通じて学生に良い感化を与え、学生の国際貢献活動を活性化させ、スタディ・ツアーでは、学生の視野を広げ、国際協力に対する関心を高めたこと。
	三瀧 正道教授	教育奨励賞	中国語教育に目覚しい成果を挙げたこと、独特の教育メソッドを開発し、常に学生にやる気を引き出してきた。これらの成果は、さまざまな著作物として、社会にも還元され、本学の中国語教育の名声を高めてきたこと。
	経済学入門ゼミナール 担当者 清水 千弘准教授 上村 昌司准教授 大越 利之助教	教育奨励賞	学生アンケートの結果を踏まえ、教員間の認識に留意した。学生アンケートの結果は、教員それぞれの熱意や工夫が、学生の授業に対する取り組み姿勢にまで影響した。これらの学生基点の徹底は、他の教員のロールモデルとなること。
	経営学入門ゼミナール 担当者 中野 千秋教授 倍 和博教授	教育奨励賞	

受賞者一覧

年度	受賞者	受賞区分	受賞理由
12年度	高 巖助教授	学長奨励賞	・著書3冊：『金融機関のコンプライアンス・プログラム』『企業倫理のすすめ』『ビジネス・エシックス』 ・経営倫理規格を「ECS2000」としてまとめ、国際標準規格を本学から発信した。
13年度	大塚 秀治助教授	学長奨励賞	・情報教育環境の整備 ①情報教育のため高度の情報システムと運用体制の礎を築いたこと。 ②情報倫理に裏打ちされた情報教育の実践体制の礎を築いたこと。 ③地域ネットワークへの貢献を通じてその果実を本学の情報教育に導入する礎を築いたこと。
14年度	中山 理教授	学長賞	・著書 <i>Images of Their Glorious Maker—Iconology in Milton's Poetry</i> は、日本のミルトン研究、ひいては英文学研究に新しい分野を樹立したものと、国内をはじめ海外の研究者からも高く評価されたこと。
15年度	川窪 啓資教授	学長賞	・著書 <i>Nathaniel Hawthorne: His Approach to Reality and Art</i> は、およそ40年の長きにわたる研究成果として出版されました。ホーソーン研究者として、わが国を代表する人物であることを国内外に示されたこと。
	小野 宏哉教授	学長賞	・著書『都市基盤の整備と土地価格の評価——震災・戦災の事例に学ぶ』は、都市における社会資本の整備のための経済学への応用、財産権との関連、税制のあり方、土地評価の問題などの集大成として出版され、理論的考察及び実証的分析に基づいて提言している事柄が、高く評価された。
16年度	櫻井 良樹教授	学長賞	・著書『帝都東京の近代政治史』は、大都市東京に焦点をあて、約半世紀にわたる市政執行部のあり方と、議員と地域のかかわり方を丹念な史料に基づいて分析した地域政治史の実証的研究。都市政治史を市政運営の変化にからめて本格的に論考した独創性からも高く評価された。
17年度	堀内 一史教授	学長賞	・著書『分裂するアメリカ社会——その宗教と国民的統合をめぐって』は、複雑なアメリカ社会を理解する上で多くの新鮮な示唆を与え、本学教員の研究水準の高さを広く学外にも誇示したこと。
18年度	梅田 徹教授 高 巖教授	学長賞	・企業倫理研究センターを中心とした研究成果と社会貢献を評価した ①梅田著書：『企業倫理をどう問うか——グローバル化時代のCSR』 ②高著書：『「誠実さ」を貫く経営』 ①は、グローバル化の側面を一つの焦点として多国籍企業の行動事例にまで触れ、バランスの取れたCSR解説書に評価された。国連グローバル・コンパクトを日本語で最初に解説した文献も紹介し、市民がCSRに関心をもち、必要な場合には自ら行動を起こすことの重要性に触れた。 ②は、企業不祥事がなぜ頻発するのか、これを防ぐためにはどうすればよいか、といった根本的な問いに対して、的確かつ多面的に応えている。企業は社会に信義義務を負うこと、誠実さが必ず報われるような、持続可能な社会や市場がなければならないとし、現実の事例に触れながらCSRの意義を明らかにした。両教授は、学内外での活動が本学の名声を高めることに多大の貢献をしているとして、初の「共同受賞」になった。

谷川新任教員研修に参加して I

外国語学部教授 成瀬 猛



長年にわたる国際協力現場での経験を買われて、国際協力機構（JICA）から、正式に麗澤大学に移籍して約半年が経った。

二年間ほどやらせて頂いた非常勤講師時代に比べると、麗澤大学への帰属意識は遥かに高くなったものの、五十七歳からの大学教員への転身ゆえに、人を育てることに没頭できる期間はそう長く無く、自分が加入したことによる変化と成果を如何なる形で具現化出来るのか思索していた矢先に、麗澤谷川セミナーハウスで行われた「新任教員研修」は、まさに、時宜を得たものとなった。

研修中、新任教員と学長以下幹部の方々との自由な意見交換の場が多く設けられた事は如何にも自由闊達な議論を多とする麗澤大学らしさを感じたものの、新任教員の多くの方から発言があった、「今時の学生」に対する苦言と悩みは、麗澤大学が素晴らしい学びの環境と建学の精神を持つが故に、「何故？」と言う疑問の念を少なからず抱いたのも事実である。

麗澤大学に正式に移籍してからの半年間を振り返ってみると、確かに、新一年生は大学生になった一学期のやる気に満ちていた雰囲気比べ、夏休み以

降始まった二学期には何故か覇気が無くなっており、欠席、遅刻も目立つようになっていた。

この現象は、日本の大学共通のものなのか、それとも麗澤大学に於いて顕著に見られる現象なのか大変気になるところである。

私には大学教員としての経験は不十分なので、想像でものを言っていることはお許し頂きたいが、入学時の緊張感と意識が、大学生活に慣れ親しんで行く内に「こんなものか……」と高をくくり、夏休みの間に、本来、夏休みは教室で学んだことに対する検証学習や実践の期間であるにもかかわらず、遊び呆けてしまい、そんなネジが緩んだ状態で二学期を迎えているからでは無いだろうか。

大学四年間を如何に価値ある過ごし方をするかは大学一年生の時の意識形成に負っていると云っても過言ではないだろう。

一年生の時に確りとした意識形成が出来て、大学四年間を有意義に使うって知識の蓄積と人間形成が出来れば、四年間で立派に社会に出て行ける人材にな

れるはずである。

とりわけ、国際交流・国際協力専攻コースを選んだ学生に対しては、早い内に世界観を醸成してやらなければならないと考えている。

確かに、一年生に成りたての頃は、同専攻コースを選択した理由も、確固たる国際派人間へのビジョン形成は未だ出来ておらず、「何となく興味がある……」程度の感覚しかない様に思われる。それは、入学当初の授業の中で、国際常識的な事も殆どの学生が知らない事が確認出来たからであるが……。

素材が未だ眠っている状態で入学して来るなら、入学後に喝を入れて、目を覚まさせなければならぬ。長い夏休みの間に、学習に対する意欲を失っているなら、夏休みの過ごし方についても指導をしなければならぬ。その為には、通り一遍の基礎学力向上の為のカリキュラムでは不十分で、目を覚まさせるを得ない状況の中に放り込んで、それを、我々、教員も一緒にやって、指導に当たらなくてはならないと思う。

現行の基礎ゼミナールはそんな意図で始められたものだと思像するが、基礎ゼミでの厳しい指導と並行して、異文化に触れ、世界を感じられる様な、ボランティアや発展途上国へのスタディツアーを早期内に体験出来る様に、カリキュラムとして位置付ける位の事を考慮して見ては如何であろうか。

実際、今年の夏休みに十六名の学生を引率して行ったラオスへのスタディツアーは、学生達に相当大きなインパクトを与えた様で、全員が自分の不甲斐なさを反省し、大学生活の中での発奮を誓っていた。

学生達を鍛えながら、我々教員側も「大学教員は学者なのか教育者なのか、両方であったとしてもウエートの掛け方は如何にするべきか」と言う、大学教員のあるべき姿についても、日本の凋落に歯止めを掛け、再浮揚させる為の大学の役割を考える中で、今一度真剣に考えてみる必要があるのではないだろうか。

谷川研修合宿を終えて、自分の中に当面の課題と

目標はほぼ定まってきたような気がしている。

麗澤大学の中での私の存在は特異な存在であることは間違いないだろう。

特異な存在として受け入れられたからには、特異な存在らしい言動を求められていると前向きに考えて、頂いた期間を有効に使い、国際協力を通じて培って来た自分のキャリアが世界に通じる強くて優しい日本人育成に役立ち、結果として、麗澤大学のイメージアップに貢献し、最終的には、学問として道徳科学と国際協力を融合出来たら最高だと思っている。

谷川研修を経て描けた大学教員としてのビジョンを一つずつ形にしていきたいと思っている。

谷川新任教員研修に参加してII

経済学部教授 木谷 宏



本研修の目的は、①建学の理念や教育目的に関する理解をより深め、教育・研究活動に生かす、②役職者や同僚教員とのコミュニケーションを通して麗澤大学の一員としての自覚を深める、の二点であった。

建学の理念に関しては麗澤館・谷川記念館見学および中山理学長の総括から改めて深く理解することが出来た。昨年四月の着任以来、直接に建学の理念に触れる機会は期待したよりも少なく感じるが、本研修と『伝記 廣池千九郎』（モラロジー研究所編）を通じて、高邁な理念に基づく本学で教鞭を執ることを心から誇りに感じるに至った。モラルとは

生涯かけて学び続けるべきものであり、麗澤は知徳一体、情理円満の教育を提供する日本において唯一無二と言える存在であることを得心した。

コミュニケーションに関しては、個性溢れる先生方による愉快的自己紹介や懇談に加え、入浴や食事の豊かな時間を通して十分に交流を深めることが出来た。素晴らしい先輩や同僚の存在を心強く感じた次第である。中でも小職を含めた新任教員による課題の共有と先輩方からの率直な体験談やアドバイスは、本当に貴重であった。特に心に残ったお言葉を

幾つか列挙したい。

「学生との関わり方には十年の時間を要することだっております」

「短所と長所は表裏一体です。どうぞ学生の良い部分を認めてあげて下さい」

「学生との関わりは全人格的なものです。課外での関わりも大切にして下さい」

このように素晴らしい研修を受け、麗澤魂（！）を注入いただいた訳だが、一方で改めて本学の課題についても思い至った。一言で言えば、能力・モラル両面における学生指導の急務である。敢えて言うならば本学の現状は、「日本において唯一無二の理念とポテンシャルを有するにも関わらず、全入時代において代替の効く一つの大学」になりかかっているのではないかと懸念する。温かくも厳しい人であったと聞く廣池千九郎博士が今日の本学をご覧になったら、何とおっしゃるだろうか。

「キャンパスの麗澤」、「ゼミの麗澤」、「面倒見の向上」が図られることを心から願っている。十年後の十八歳人口の激減も脅威ではあるが、個人的には大学進学率がすぐにも減少するのではないかと懸念している。時間的な猶予はない。一日も早い対策が必要であろうと愚考する。

最後になるが、本研修という素晴らしい機会を賜ったことに対して心から御礼を申し上げ、及ばずながらも本学のために出来る限りの努力を行いたいと考える次第である。麗澤大学は素晴らしい。そしてもっと素晴らしくなるはずである。

麗澤」、「就職の麗澤」、「留学の麗澤」、「外国語の麗澤」……。様々な特色を有する本学であり、このことは我々の誇りである。しかし、いずれも限定された近隣の大学との比較優位の範疇を出ておらず、たとえば六大学と比較した場合には、その結果は言うまでもない。それでは「道徳の麗澤」、「CSR（企業の社会的責任）の麗澤」、これらはどうだろう。いかなる大学をも凌駕する本学の絶対的な競争優位である。我々は世間に迎合したり、易きに流れたりすることなく、入試制度の更なる改善も含め、毅然として建学の理念を追求していくべきであると考え

る。

個人的には高質な授業の提供や手加減のない成績評価に加え、毎時間の教室のゴミ拾いと学生への挨拶をこれからも挫けることなく続けていく所存である。本学で働く心ある方々は多かれ少なかれ、同様の健全なる危機感をお持ちであろう。本年度から始まる五カ年計画において「麗澤ブランドの圧倒的な



谷川新任教員研修に参加してⅢ

外国語学部准教授 岩澤知子



平成二十一年四月より専任教員として麗澤大学に勤務するようになってから、今年は二年目を迎える。ただ授業運営で精一杯だった一年目の緊張や迷いから徐々に解放され、大学全体の方向性や仕組みについても少しずつ考える余裕が出始めたこの時期に、境遇を同じくする同僚の先生方とともにこの研修に参加できたことは、私にとって大変有意義であった。

今回の研修で改めて強調されたことは、「麗澤大学のアイデンティティとは何か」という点であった。麗澤大学の建学の精神は、「知徳一体」である。

現代の日本において、「知識」の習得を第一義として掲げる大学は山ほどあるが、その中で「道徳の実践なくして、真の意味での知識の活用はありえない」と謳っている大学がどれほどあるだろうか。この一点をもつてしても、日本の大学教育における麗澤の独自性は明らかである。研修の中で中山理学長は、大学における道徳教育の目的を、「自分を取り巻くもの（「人間」・「自然」）との責任ある関係性を構築すること」と定義された。ではこの目標に向けて、麗澤では具体的にどのような教育実践を行い、さらに今後、それをいかに発展させようとして

いるのか。

新任教員である私がそこで学んだことは、麗澤大学が、「教室で行われる授業」という限られた場を越えて、学生たちに、いかに広く「実践」の機会を与え、そこでの様々な体験を通して人間としての「生きる力」を育んでいこうとしているか、という点である。そのことは、授業以外の「課外活動」に対する大学の考え方の中に現れている。「大学に入ったばかりの学生たちは、多才だが未開。それをどう引き出すかは課外活動にあり。そして、それを引き出せるかどうかは教師のセンスが試される」という研修での言葉は、私の心に強く響いた。この「課外活動」を通しての実践教育の一環として、例えば、大学のクラブ活動のリーダーを集めて行われる泊まり込みの「リーダー・セミナー」や、学生寮のリーダーを対象にした「寮長セミナー」があることを、今回の研修で初めて知った。同様に、麗澤大学が用意する「留学制度」や、他国に実際に赴いて体験する「国際交流・国際協力」の試みも、まさにこ

の「課外活動」の一環とみなすことができよう。「留学」や「国際交流」は、なにも語学上達のためだけにやるのではない。これらの活動は、異文化にじかに触れ、そこで問題にぶつかり葛藤することによって、知識だけの頭でっかちな理論に終わらない、人間としての真の判断力と行動力、そして更には、他者に対する共感力を育てるための貴重な体験の場を学生たちに与える、という意味をもっているのである。

このように研修における先生方の講義から多くを学んだことは言うまでもないが、実は今回の研修の隠れた意義は、「谷川」という廣池学園ゆかりの地において、温泉に身を浸して心と体の緊張をときほぐし、参加者が互いに心を開きながら、日頃抱える様々な思いを気軽に交わすことができたことにあるのではないか。実は、私も今回の研修に参加する前は、「休暇期間の真っ最中に、谷川に招集とは…なぜ大学構内での研修ではないのだろうか。」と、あまり参加に前向きではなかった。が、研修を

題をいただいた有意義な研修であった。

終えてみて、この考えは大きく覆された。実にそれは、中山学長が開会挨拶で、「この谷川の温泉入浴で、緊張を緩め、身体を癒していただきたい」とおっしゃったことの意味が、体験によって裏打ちされる研修であった。我々教員（特に新任教員）は、日々、様々な疑問や悩みを抱えながら、大学の業務に携わっているが、互いに忙しい状況ゆえ、大学構内では、同僚の先生方とそうした問題についてゆっくり語り合う機会がなかなか得られない。今回は、日頃抱える具体的な問題を、懇親会やその他のくつろぎの場面で、他の先生方に何気なくご相談し、適切な助言をいただくことができた。それはまさに、「谷川宿泊」という我々教員の「心と体」の双方に働きかける「課外活動」が与えてくれた収穫である。

今後、私自身がこの麗澤で教育を実践していく中で、いかに学生たちの「心と体」の双方に訴えかけながら「生きる力」の育成のお手伝いをしていけるか——今回の谷川新任教員研修は、そんな大きな課

谷川新任教員研修に参加してⅣ

経済学部准教授 阿久根優子



「社会で『生き』残れる人材の教育に携わりたい」。二〇一〇年九月に谷川で行われた新任教員研修は、私が大学教育に就きたいと思った理由を再確認する機会となりました。

これは、大学に着任する前の五年間、自動車市場に関わる調査・研究の企業に勤めた経験の中で得た思いです。企業での経験は、自分も含めて「必要とされている人材は何か」を考える機会でもありました。私が勤めた時期には、日本の自動車メーカーが世界ナンバーワンになろうとする上り調子の四年間と、リーマンショックによる米国市場の縮小の影響

とリセッションの不安を感じる一年間の全く異なる二つの状況がありました。

その中で、どのような状況であっても、更なる発展のために、問題を発見し、改善すべき点に気づき、そしてそれらを解決する力を持つ人材が求められていると感じました。「問題点の発見や気づきの力」は、「前進するために何を変化させるべきか」という意識をもって、社会・経済に関心を広げ、自分なりの考えを持つことや他者とのコミュニケーションの中で形成されていくと思います。もう一方の「解決する力」は、問題解決の「発想力」と「実行

力」の両立であり、そのためには「基礎力」が欠かせません。

この「基礎力」を構成するのは「読み・書き・そろばん」だと考えます。これらを私なりに解釈すると次のようなものです。「読む」は、書物や新聞記事あるいは顧客ニーズなどの情報から「今、障害や問題となっていることは何か」「最終的に何が求められているのか」といったことなどを把握し理解することだと思えます。「書き」は、「問題解決のために何をすべきか」ということを他人にアピールするのに必要です。プレゼンテーション能力も重要ですが、多くの人に情報やアイデアを伝えるのに、現在も企画書や報告書が作成されており、常に「書き」は求められます。また、「何を伝えるべきか」ということを明確に文章にすることができてこそ、次のステップでのわかりやすいプレゼンが可能になると思えます。最後の「そろばん」は、数字を扱うだけでなく、数的な事象を考えることよって論理的な思考を養うことです。これは、働き始めて一番強く

必要性和重要性を実感しました。アイデアやそのアプローチの提案や実行で、「矛盾はないか」など自分自身と他者を納得させるのに、論理的思考が不可欠だったからです。

「基礎力」はこれら「読み・書き・そろばん」が三位一体となったものですが、少々厄介なのは何度も繰り返して自身の中に定着させる過程です。この定着のために、今試みているのは次の二つです。一つは学生自身が手を動かすことです。講義では、できる限り板書をし、学生にノートをとってもらいます。デジタル化の進む今日ですが、新しいことを身につけるのに手と頭の同時作業は不可欠だと思います。担当する科目では、理解・定着過程として、毎回あるいはキリの良いところで「課題」や「チェックシート」を用意し、自分で内容を再確認することも学生に求めます。もう一つは、講義内容の研究や実社会においての必要性や有用性を伝えることです。前述の手を動かす際、これらを理解した学生ほど取り組む姿勢が違います。「基礎力」の定

着作業では、「なぜそれが必要なのか」ということを学生が納得することが欠かせないと実感しています。

「社会で、活き、残れる人材教育」の試行錯誤は続きますが、ベテランの教職員の方や同じ新任の先生方との意見交換において熱意や独自の手法を拝聴し、これからも鋭意努めていきたいと思いを新たにしました。



「挑戦！」

本田 寛輔

(第57期 国際経営学科卒)



卒業後の軌跡

二〇〇五年秋よりニューヨーク州立アルバニー大学の博士課程で高等教育政策を専攻しております。研究テーマは各国の大学の質保証制度で、博士論文は日本の認証評価制度の効果についてまとめているところです。二〇〇九年秋からは近隣の州立大学のインスティテューショナル・リサーチ（略称IR）と呼ばれる部署で、学習成果の測定を担当しております。日本でよく言われる「大学改革」が仕事です。

麗大二年次のロンドン大学への留学がきっかけで現在の道に進みました。英国教育の伝統であるチュート

リアル（Tutorial）という教員と少人数の学生による議論で知的関心を刺激され、はじめて学問が面白いと実感しました。何でも物事を議論する際に、自分達が使う用語を定義することから始めます。教員は学生の専門知識の有無を試すというより、個々人の考え方を試すような問い掛けに焦点を置きます。日本の大学教育との差に愕然とし、どうにかして日本の大学を良くしたいと考えるようになったのです。

帰国後は友達と「学生による授業評価アンケート」を実施しました。これには賛否両論あり、できるだけ公平性を保つよう先生方の意見も含めた冊子を自主制

作して学生に配布しました。就職は大学改革をする仕事など簡単には見つけれず難航しました。やっと四年生の十二月に小規模の大学コンサルティング会社に就職が決まりました。

ところが一年後、学外から大学を変えるのに限界を感じて桜美林大学院修士課程の大学管理運営専攻に進学しました。米国帰りの諸星副学長（当時）について学び、在学中は学長室で実務実習をしました。さらに米国を二ヶ月ほど訪問し、四つの大学で五十名以上の大学幹部、教職員にインタビュー調査を実施しました。卒業後は大東文化大学の学務課に勤め、学長室を担当しました。文科省や各種雑誌の情報を集めて簡単な報告書をまとめたり、学内の教育改善等の企画書を作成しました。この間、平日の夜や土曜日は高等教育学会や大学行政管理学会など、各種研究会に足しげく通いました。二年半が過ぎ、事務職員の立場に限界を感じて米国の博士課程への進学を考えました。母校の希望する大学院を訪問し、教員と学生に面会しました。

米国の博士課程

授業での議論には十分ついて行けたのですが、論文を書くのが全く駄目でした。自分の文章が小学生の作文みたいで悔しい思いをしました。振り返ってみると、これは英語力だけでなく、文書構成や理論の作法が身に付いていなかったからです。大学の英文添削室には週三回、三年間通い続けました。今では自分の英文を添削できるようになり、ときには米国人の同僚の英語も校正します。一、二年目はもう日本に帰ろうかと考えたものですが、四年目になって軌道が変わりました。自分の研究に関連する専門職にも就くことができました。現在は全ての授業を取り終わり、博士論文を書き上げるのみです。

米国の大学で働いて

日本では文科省やメディア、そして研究者も米国の大学が様々な面で進んでいると喧伝します。米国でも理想として議論されている改革案や一部の事例が、あたたかも全米の標準のように日本へ伝わります。見方を

変えれば、米国は社会問題が深刻だからこそ、改善案や制度が発展するのです。日本はそれを知らずに米国の制度を輸入し、上手く行かないと自国の批判に陥るようです。日本の大学の現状に閉塞感を感じ、海外に



做うのは理解できません。ただし、その度が過ぎると自分達の現実から目を背けたり、米国の理想に耽るあまり、現場に根ざした改善が困難になります。

最近の例として、学習成果の測定の導

入があげられます。日本でも認証評価の二順目で施行される予定です。米国では様々なアンケート調査やルーブリックと呼ばれる評価表を用いた測定により、多面的に学生の学習成果を捉えようとしています。教員は測定結果をもとに教育改善を継続的に進めるのです。日本へはこの建前的な理想論が強調されて伝わってきます。ところが、米国の多くの大学がこれを実現できずにいます。教員は新たな業務負担に批判的で、測定方法にも課題があり、大学当局は十分な支援策を施していません。

それでも、米国の大学の方が働きやすい環境です。経験と能力さえあれば、自分の提案が認められ易いと思います。個々人の挑戦を寛容する風土が職場だけでなく、米国の社会全般に存在します。ただし、日本が完全に年功序列で、米国が完全に能力主義という風に簡単に割り切れないことも留意してください。二つの慣行は日米どちらにも存在し、要は程度の問題なのです。もし日本で不合理と思われる慣行に縛られて塞ぎ込んでいようであれば、英語と専門能力を身に付け

て海外で勝負する方が、やり甲斐のある人生を送れると思います。また、日本に比べると残業は無いようなもので（管理職になれば別ですが）、夕方五時以降は博士論文の執筆に当てたり、ときには友人や趣味の集まりで社交もできます。

麗澤大学への提言

大学改革には国策、大学組織、そして個人の三つの次元で取り組むことができます。最初の二つは別の専門誌に執筆した^①ので、ここでは自分の麗大時代の経験から個人ができる大学改革を幾つか提言させていただきます。

まず、英語の力をどのように伸ばすのかです。一、二年次の英語教育は教科書の内容が小学校の会話のようで閉口しました。学生に英語の基礎が無いのはわかりますが、先生方には大学生が関心を持つに相応しい内容の英語教材を選定していただきたいと思います。最近ではインターネットで英語教材が無料で提供されています。在学生には英国放送（BBC）の英語教材^②

と米国公共ラジオ（NPR）をお勧めします。後者は放送内容が記事として掲載されているので、それを見ながらラジオ放送を聴いて耳慣らしをすると良いでしょう。

関連して留学ですが、現地における日本人村の形成をどのようにして回避するかです。それぞれの学生が自分達の趣味を通じて現地社会に溶け込むことで、学生間に健全な距離を保つことが最善策かと思えます。これから留学する在学生にはMeetup^③というホームページで欧米各都市における様々な趣味の会を調べることをお勧めします。または、留学しなくとも日本国内で国際交流の場を探し当て、英語や各国の文化を学ぶことができます^④。

学問の基礎は文章の作成能力にあります。高校までは感想文が主ですが、大学では小論文が求められます。その差は大きいので、先生方には論文やレポートの作成を初年次教育で取り上げて欲しいと思います。また、在学生は参考書で論文や段落の書き方を自習してください^⑤。授業のレポートだけでなく、就職活動で

も役立つはずです。

就職活動は二年生から各種の異業者交流会に参加して自分のやりたい仕事を探すのを勧めます。インターネットで検索すれば、単なる飲み会から勉強会と抱き合わせの会まで幾つも出てきます。在学生は背広を着て潜り込み、社会人がどのような仕事をしているのか聞いてみてください。皆よろこんで教えてくれるはずです。場慣れするまで二、三箇所の異業者交流会を巡ってみることで。やりたい仕事が決まってきたら、インターンシップ（実務実習）で経験を積んでください。

アルバイトは学業の邪魔として見られる嫌いがありますが、その経験は社会学、経済学、文化人類学、文学と様々な切り口から考察できます。このように、先生方には学生生活と学問を関連付けて発展させるような教育をお願いしたいと思います。

大学時代には友達関係や恋愛関係の知識と経験を蓄えるのも大切です。友達関係は一年次だと人と群れるだけで、空虚な会話が続くかもしれません。周囲のこ

してまいります。大学名で劣等感を抱いている在学生は、他大学の授業やサークル活動に潜り込んで現実を確認してください。彼らにあって自分に欠けているものは何ですか？ その逆もあるはずです。他者との相対比較だけでなく、自分の主観的な価値観も築き上げてください。様々な世界を渡り歩くことで、自分だけでなく、他者への理解が深まり、人生の目標が定まってくるでしょう。そこから自分の目標を達成するための手段や段階が開けてきます。私は入学当時、英語のできない普通の学生でした。今振り返ってみると、進学の先に大学に関わらず、学生時代は個人の努力でいくらでも成長できると思います。麗大の在学生と先生方の益々のご活躍を祈念しております。

(1) 詳しくはIDE大学協会『現代の高等教育 特集：大学評価とIR』二〇一一年二―三月号。

(2) <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learninenglish/language/wordsinthenews/index.shtml> 英語の講義や聴講やニュース <http://www.ocwconsortium.org/learn>。

とが嫌になったり、逆に自分がおかしいのか疑問を持つたりしていませんか。三、四年生になればゼミや留学経験者の友人が広がり、会話に中味が伴ってくるはずです。恋愛関係は在学時と卒業後で大きく変わるでしょう。個々人の価値観や人生における優先順位により、早婚にも晩婚にも一長一短あります。大学で恋愛や結婚の授業を用意してはどうでしょうか。各年代の卒業生を招いて実体験をお話ししてもらうのも、多くの教訓が得られるはずです。米国の事情に関心のある学生はカリフォルニア大学ロサンゼルス校の「恋愛関係と家族のコミュニケーション」と題した講義⁽⁶⁾がインターネットで無料聴講できます。

最後に、麗大生の劣等感について考察します。多くの学生は偏差値や大学の知名度に捕らわれて、自分の可能性を開花できませんか。高校までの成績が悪いだけで、周囲からあまり期待されなかったのかもしれない。麗澤大学は有名校ではないものの、小規模で先生と学生の交流が親密です。先生方には学生が劣等感を払拭し、さらに伸びて行く教育の実践を期待

(3) <http://www.meetup.com/> 欧米だけでなく、東京の情報もあります。

(4) 柏市国際交流協会 <http://www.kira-kr.jp/> 日本の国際交流に関する総合情報は <http://www.kokusai-koryu.jp/> 英語情報では <http://metropolis.co.jp/> などがあります。

(5) 河野 哲也 (二〇〇二) 『レポート・論文の書き方入門』慶應義塾大学出版会、第三版。津田塾大学英文学科 (二〇〇一) 『パラグラフから始める英文ライティング入門 改訂版』研究社。他にもパラグラフ・ライティングは英語教育として参考書が多くあり、その作法は日本語の文章作成に十分応用できます。

(6) <http://www.academicearth.org/courses/psychology-of-families-and-couples>

麗澤大学での出会いは私の人生の転機

経済学部助教 陳 玉雄

(第五十六期 経済学科卒)



五十六期の陳玉雄です。現在、麗澤大学経済学部の助教を務めています。中国マクロ経済論、外国専門書講読、上級社会科学、経済学基礎演習などを担当しています。授業の中で、学生の自信を引き出すこと、モチベーションを高めることに心がけています。私自身は、日々諸先生、職員の方々、そして学生から学び、自らの心の糧にしています。

私は、中国東南部の福建省にある、海と山に挟まれた村にある機械修理工の家に生まれました。地元の人々は、生活のため農業、漁業の他、商工業、金融業などにも務めていました。しかし、その多くは個人業

者であり、当時の法律あるいは政策に反したものでした。父も生産隊（人民公社の下部組織）の名義を借りて米加工工場を経営していましたし、母も政府から幾たびも禁止を通告された「合会」（無尽）に加入していました。私は当時、周りの人がやっていることは理解できると思いながらも、政府の取り締まりに遭うたびに彼らの自己責任だと捉えました。

小さい時から、町の人々に頼りにされている父に憧れ機械に興味を持ちました。中学校に入学した直後のある日、いつものように父は隣の村から持ち込まれたトラクターを修理していました。弟が手伝うのを見

て、私が父の工房に入り、手伝おうとしたところ、「お前は本を読め」と父に怒鳴られました。その時から私は父の工房に足を踏み入れませんでした。その後、中学校三年の時の国語を担当した、尊敬する先生のエッセイを読んで、中学校の教員に憧れるようになりました。地元の師範大学から入学通知書を受け取った日、父に「お前のことは、もう満足している」と言われ、合格の喜びに胸がいっぱいになりました。大学のとき、郵電局で電話交換機の設置を指導する技術者と作業員が共に汗を流しながら作業する姿に感動しました。友人に尋ねると、技術者は日本人で、その方は、私が接した最初の日本人でした。この出会いが今になって思うと、私の日本留学の遠因にもなりました。

大学を卒業して、地元の中学校に配属されると、憧れていた国語の先生が「政界に転出」（地元紙の編集委員長、後に副市長）し、一瞬喪失感を覚えました。

中学校に務めてから二年後日本に留学し、東京都墨田区にある日本語学校を経て、平成五年に運良く麗澤大学国際経済学部に入学することができました。最初

は、大学を卒業して地元に戻り、小さな会社を経営するという地元での標準的なコースを歩むつもりでした。うまくいけば、財を蓄えて学校を作り、毎朝、校長先生と呼ばれる希望も持っていました。しかし、麗澤大学における一連の出会いは、私の人生を変えました。

学部二年のとき、図書館の新書コーナーで鈴木淑夫氏の『日本の金融政策』に出会い、これを機に日本金融を中心勉強したくなり、後に恩師根津智治先生のゼミに入りました。ある水曜日の五限のゼミで、無尽講が、無尽会社、相互銀行を経て、現在の普通銀行（第二地方銀行協会加盟銀行）に発展し、中小企業の発展に少なからず貢献してきたことがわかりました。無尽講を私は悪だと思ってきましたが、一転して私が追究し続けてきた日本経済の「秘密」の部分に当たりました。その時びっくりしたことを、いまでもはっきり覚えています。数日後、根津先生に相談した上、当初の予定を変更して大学院国際経済研究科修士課程に進むことを決めました。さらに博士課程に進み、自分

が当初設計した道から完全に外れました。博士課程に入ってから、鈴木幸夫教授、佐藤政則教授からも指導を受けました。

学部三年生から根津智治先生に学んだ八年間、一度だけ先生に怒られたことがありました。それは、鈴木先生と根津先生の共同指導を受けることでした。旧三号棟の経済社会総合研究センターで、両先生が予定時間より三十分待っても私が現れないので、根津先生が電話で「今、どこにいるのか」と怒鳴りました。それは、私が初めて知る根津先生の唯一の怒声でした。その後、佐藤先生に研究、教育及び事務の面でしばしば注意されました。このように、根津先生をはじめ諸先生に惹かれ、佐藤先生をはじめ麗澤の人たちに磨かれ、麗澤精神が身体に滲み込みました。そして、諸先生の「モデル効果」によって、私は人生の軌道を修正しました。

このような麗澤教育は、諸外国からきた留学生の評判になっています。留学生は親近感を持って日本に来た人が多いのですが、初めはなかなか日本に慣れない

あることを強く感じました。特に、日中両国政府の関係が悪化すると、学生も世論に影響され中国を敬遠する傾向があります。これに対して、中国を熟知しているビジネスマンたちの関心は、衰えることがありません。「難しい時こそビジネスチャンスが多い。例えば今出来なくとも、来るべき時に備えるのは、先を走る日本のビジネスマンである」と何回も聞かせてくれました。それを裏付けるように、企業のグローバル化に伴う国際的な人材への需要の高まりとは逆に、外国への留学減少など学生の内向き志向がよく新聞にも報道されるようになりました。

このギャップを埋めることが、私の生きがいになりました。将来中国関係の仕事に携わる学生は、経済・経営の知識はもちろん、コミュニケーションの道具として中国語の能力を取得し、コミュニケーション自体にも有効となる考え方や、仕組みの違いを理解する必要があります。そのため、平成二十三年度から担当することになった中国MCコースの充実にやりがいを感じ、わくわくしています。中国MC (Manage-

人も少なくありません。そのため、初めの段階で麗澤教育が特に効果を発揮します。私もその恩恵を受けた一人として、お世話になった諸先生、職員の方々への恩返しのもりで、少しでも学生たちの役に立てればいいと思っています。具体的には教育・研究活動以外に、大学教員の三大業務の一つである「事務」を積極的に遂行したいと思っています。現段階で自分にできることは、これまでの悩みと経験を生かし学生の相談を受けること、中国における卒業生のネットワークを構築することです。学生の相談を受けるとき、自分の学生時代を思い出し、学生の立場に立って物事を考えることを心がけます。また、卒業生の絆は、現役生への滲み込み型教育の効果であると同時に、麗澤大学、さらには廣池学園・モラロジー研究所の強みにもなります。

日頃、研究調査及び学会活動で中国と経済的な関係を持つビジネスマンたちと接する一方で学生の就職相談をはじめ様々な悩みを聞く機会が多くありました。その中で、企業側と学生側との間に大きなギャップが

ment & Communication) コースは、経済・経営の専門知識を学ぶとともに、徹底して中国語のレベルの向上、中国への理解を図ります。各レベルの「中国経済」・「中国経営」・「中国ビジネス事情」・「中国理解」と中国の重点大学への留学が用意されています。学生と共に頑張ります。

私たちのバレーボール部

男子バレーボール部主将 関口 崇

(経営学科3年)



私たちバレーボール部は決して多いとは言えない人数ですが、全員一丸となって日々練習に取り組んでいます。この麗澤大学のバレーボール部は規模も小さく、自分たちの代が入部したときは一部から十四部まであるリーグ階級の十三部という状況でした。しかし先輩たちや今いる後輩たちのすばらしい仲間とともに練習を日々改良し、様々な市民大会や他のチームとの練習試合を意欲的にとり行うことで、自信と経験を積み、そのかいもあって春と秋に行われる関東学連リーグ戦では毎回全力を出して昇格を重ね、現在は九部まで登ることができました。

あり、厳しくなっていく練習に不満を感じる者や、部活を辞めて行った人もいました。自分も部長としてやってきて一番悩んだことが、部員のモチベーションの違いによる部活への姿勢でした。そういった数々の問題にも自分たちは小さいチームなので個人個人をとにかく大事にするという意識の元、辞めたいという者がいればしっかりと話をし、不満がある人の意見をないがしろにしない、などチームでまとまってやってこられたからこそ、今のチームがあると思います。

最近では市民大会に参加することで社会人のクラブチームと交流をもったり、リーグ戦で戦った他の大学のチームを招待して練習試合を行ったりと、対外交流も盛んな部として活動しています。最近では麗澤大学のチームが体育館を予約して練習試合の相手を募集しているということが少しずつ知れ渡っているようで、他のチームから今度はいつ練習試合できますか？ などという声がかかるのも多くなりました。練習試合を組んだり運営するのはとても大変なことですが、大きな経験になり、試合をすることで自分たちには無い物

バレーボールはチームプレイであり決して一人ではできません、そしてそこが一番難しいところでもありました。人数の少ない自分たちのチームは一人のけが人が命取りになります、試合中に調子のあまり上がらない選手を自由に交代するようなことも困難です。ですが逆にそういう状況だからこそ、チームメイトは自分の責任をしっかりと理解することができ、試合中もお互いをカバーしあって頑張っていく、ということができたと思います。

しかしもちろんいいことばかりではなく、チームの中で意見が対立したり、議論になるようなことも多々を見つけれられ、スキルアップにもつながるのでこれからも続けていこうと思っています。

この部はOG・OBとの交流も盛んな部で毎年OG・OB会を開催して、現役とOG・OBとのふれあいの場を設けています。卒業した先輩たちと話が出たり試合をしたりできるのでもこれも毎年楽しみなイベントとなっています。

さて、ここまで堅いことを書いてきましたが、私たちの部活はとても楽しいチームです。小さいからこそ



結束も強く部員同士はとても仲良く、部活以外の時間でももちろんとても仲良く生活しています。大学生らしく飲み会などもたびたび行っており、新年会や忘年会、リーグ昇格の際には祝勝会を催してみんなの努力をたたえあっています。練習や試合とオフの時のメリハリをしっかりとつけることが部活に対する意欲や集中力などに大きな影響を与えるとわたしは考えています。

今年の四月に行われる春季リーグ戦をもって自分たちの代は引退をし、後輩に引き継ぐことになりました、麗澤大学のバレーボール部の歴史では九部までいったのが最高の記録だったとOBの方から聞いており、今回のリーグ戦で昇格をできれば自分たちの代が最高記録を塗り替えられるということで、残された少ない時間を必死に練習に取り組んでいます。なんとか昇格を果たして、自分たちのやってきたバレーボールが最高の形で終われることを目指して、そして何より部活の基礎を作ってくれた先輩と、後を継ぐ後輩たちに素晴らしいものを残せたらと思っています。

しかし、今年は新入部員の数に恵まれず、自分たちの代が引退してしまうと完全に人数不足になってしまい、今年の新入部員の数次第では試合に出られない状況になってしまいました。先の事は今はまだまったくわからないので、まずは自分たちのやることをしっかりとやっていこうと思っています。

最後にこれを読んで私達のチームに興味が出た方は、周りの同級生や後輩等に紹介をして頂けたら幸いです。

これからもチーム一丸となって頑張っていきたいと思います。応援よろしくお願いします。ありがとうございます。した。

【麗大生の今】② サッカー部

たんぱふくそう 単破複創

Soccer (Football)。正式名称はAssociation-Football。Soccerという言葉は、この正式名称の Association、の部分からできたと言われている。

十九世紀末に日本に伝えられたサッカーは、それから一世紀以上の時を経てJリーグとして日本に根付いてきた。世界競技人口約二億五千万人のサッカーは、他のどのスポーツよりも競技人口が多い。想像がつくように、理由としてはどのスポーツよりも手軽に行えるからだ。広義で言ってしまうと、人がいてボール一つあればサッカーは始められる。最近では街中で一種のパフォーマンスとしてサッカーをする、所謂ストリ

(国際交流・国際協力専攻三年)

関口和宏



ートサッカーなどが現れてきたように場所にも困らない。平らな空き地があれば十分だ。そんな敷居の低いスポーツなのだから競技人口は自ずと増えて、今や世界中で最も多くの人々によって行われているスポーツとなった歴史がある。

私は一人のサッカープレイヤーとして、そして一人の国際交流・国際協力専攻の学生として、麗澤大学におけるサッカーのもう一つの側面に注目・期待をしてきた。それは「国際交流」という側面においてである。

同誌別ページにも「麗澤教育」ということで私の投

稿があり、そちらでも多少触れているのだが、私は二〇〇八年度にNPO法人の学生スタッフとして中東問題に係わっていた。当時、そのNPO法人はPeace Kids Soccer (現在Peace Field Japanに名称変更) という名称であった。そのNPO法人では、国際交流イベントとしてサッカーを媒体とすることで異文化圏の子供や学生との交流に取り組んできた。一種のアイスブレイクの手法である。このようなサッカーを媒体とした交流イベントに取り組む団体は多い。また、JICA (日本独立行政法人国際協力機構) では、JFA (日本サッカー協会) と協力し、サッカー指導者を派遣・指導する国際協力も行われている上、元サッカー日本代表の北澤豪氏をJICAオフィシャルサポーターとして迎え、長年にわたりサッカーを媒体とした世界各国での交流イベントに取り組んでいる。

その他にも世界各地でサッカーが異文化交流の為の媒体として取り組まれている。この現状から、サッカーというスポーツを一種の国際交流手段として見る事ができるのではないだろうか。寧ろ私はサッカーを

るたびに、「サッカー部を創って良かった」と痛切に思い直す。サッカー部の日本人学生にとって、この国際交流の機会は、授業ではできない交流の機会となったと思う。外国語学部の学生は自らの英語やドイツ語、中国語といった専攻言語を試す敷居の低い良い機会になるとも思った。気も使わず先生には聞けないスラングを学んだり、相手の国、民族の文化を聞き、日本の文化も伝え、留学生との交流の機会を得ることで、私自身今までは気づくことのできなかつた多くを気づかされてきた。

事実平成二十二年よりサッカー部は正式に部活動として認められ、現在では部費を十分に活用させて頂けるようになり、入学当時から念願であった公式戦への参加にまで辿り着くことができた。この場を借りて、幾度となく手を貸して下さった大学の関係者の皆様には、深く感謝申し上げたい。また何より私がサッカー部創設を決意した当初、部員としてサッカー部設立に共に尽力してくれた学生達に、チームメイトに、部長として、そして友として心からの感謝を贈りた

その様な見地から見たい人間である。そして、それ故に豊富な留学生が売りのこの麗澤大学にとってはサッカー部の存在の有無は大きな意味合いを持つと思うのである。

そんなサッカーへの想いが、入学当初「サッカー部廃部予定」と耳にした私に「サッカー部建設」という心を決意させた。無論それは先程述べた様に、一人のサッカープレイヤーとして、そして一人の国際交流国際協力専攻の学生としてである。

現に、麗澤大学サッカー部には、ドイツ、アメリカ、中国、台湾と多くの留学生が訪ねてくれ、彼等とは、共に笑い、汗を流し、サッカーというスポーツで繋がった。そもそも麗澤大学以外の人々は広報力に欠ける本学の部活動紹介掲示板ほどでしか、部活動へのアプローチは取れないのに、参加してくれた留学生の多くは普段お世話になっていない国際交流センターに頼み込んで私たちに連絡をくれたりした。下手な学生よりもサッカーに対する熱が熱い印象であった。私は留学生からサッカー部の練習に参加したいとの連絡があ

い。そして、現在私に代わってその想いを引き継いでくれているサッカー部部长に、現サッカー部部員全員にも、感謝を贈りたい。

今この瞬間に思うことは、この交流の場を麗澤大学から無くさないで欲しいということ。私は嘘をつくことが大嫌いな人間なので正直に言えば、一人のサッカー部OBとしては結果など微塵も望んではいない。結果など毎回の練習に手を抜かず一生懸命に取り組んでいけば、後に付いてくるものだ。それが結果だ。それよりも、二度と一生懸命に練習に取り組めない、白だろろうが黒だろろうが結果を手に入れられない、そんな状態にはしないで欲しい。日本人学生に交じり多くの留学生が学ぶこの麗澤大学で、誰にも「サッカーやりたいのにサッカー部が無い」というような思いをさせたくないからだ。故に私はこの瞬間に、サッカー部に對してはその様に思うわけである。

どの組織・団体にも共通することであると思うが、一つ、この三年間でサッカー部に携わって得た教訓がある。この場で言うのも大層失敬な事ではあるが、折

角なので残し伝えられればなと思う。それは、「一度壊れたものを再度創り上げる為には、創る技術だけでは不可能だ。片付ける技術も必要だ」ということだ。

一つのそれはそれは優美な花瓶をご想像いただきたい。その花瓶は貴方が長い時間をかけて創り上げ、貴方の思う最も美しい風景が見事に描写されている。しかし、誰かが誤ってその花瓶を落とし、粉々に割ってしまった。貴方は「また創ろう」と思うだろうが、第一にしなければならぬ事は何だろうか。それは粉々になった花瓶の破片をきれいに片付けることだろうか。きれいに片付けた後にこそ、そこに新たに飾る花瓶は、それはそれは優美な一品となれる。

即ち、私がサッカー部を創る時、そこには以前存在していたサッカー部の印象という名の、目に見えぬ破片が沢山散らばっていた。その破片が、サッカー部の部費凍結という形で、現在の様にきれいに片付いた状態になるまで丸々二年間掛かっていたということだ。如何に創ることが手間の掛かる事か、そして如何に壊すことが単純で簡易か、御理解いただけただろうか。

麗澤大学には多くの部活動・サークルが存在する。

そして国際色豊かな本校では、それらの全ての団体が国際交流の場としての可能性を秘めている。この度は世界的な競技人口が一番多いスポーツであるサッカーに取り組む部活動の代表として投稿させて頂いているので、この様にサッカーを挙げたが、可能性は、全てのスポーツ、更に何かしらのコンセプトを持つ全ての団体に言えることである。結果や目標に向けて一直線という向き合い方も良いだろうが、時に少し遠く、少し高いところから、自分の取り組むスポーツ自体に目を向けてみてはどうだろうか。優勝の二文字以外の別の可能性も見えてくるのではないだろうか。どこかに自分の気付いていない花瓶の破片が落ちているかもしれない。私がそうであったように、そこから学べることはとても美しいものかもしれない。

サッカーとは多面的に付き合った三年間だったが、多くの物事にそういう姿勢で臨み続けたい。

※単破複創(造語) 壊わすのは簡単だが創るのは難しい事もあるという意。

【麗大生の今】③ 箏曲部

同好会から部へ

箏曲部部长 日色彩子

(ドイツ語学科四年)



私が入部したとき、この箏曲部は、まだ『邦楽同好会』という名前でした。入学当初から留学を考えていた私は、「日本の楽器を演奏できて、着物も自分で着られるようになる」という先輩の言葉で入部を決意しました。留学したときに、なにか日本人らしいものをも身につけていたと思ったからです。当時は、四年生が三人、三年生が一人、二年生が五人、私たち一年生が四人、そして留学生が一人で、狭い部室にこの人数分の箏を並べるだけでも一苦勞でした。はじめは簡単な『さくら』から入ったのですが、その年の夏合宿では、すでに先輩たちや先生のお弟子さんたちの中に混

ざって練習をしていました。とにかく「習うより慣れろ！」といった感じで、間違えてもいいから上手い人に必死についていくようにして弾き方を覚えました。

私たちは毎年柏市や我孫子市の文化祭に参加させていたのですが、私がその演奏に参加したのは、実は三年生の秋が初めてでした。一年生のときは留学することで頭がいっぱいで、そのための勉強やアルバイトを優先して、演奏会に参加しなかったのです。毎回先生は声をかけてくださっていたのですが、当時の私の中では箏は二の次だったのだと思います。そうして大勢の人の前で演奏することのないまま、二

年生になると留学が決まり、一年間箏から離れることになりました。その年は、先輩の中にも短期や長期で留学する人や、同じく留学が決まったドイツ語学科の友達がいたので、部員の約半分が不在の状態でした。

留学先に箏を持って行って現地の子供たちの前で演奏した先輩もいたそうです。また、カンボジアに招かれて、数名の先輩と先生が演奏しに行く等、私が箏のことを忘れて留学生生活を楽しんでいる間に色々なことがあったようです。

留学生生活も残り半分という頃、邦楽同好会が部になるという話を聞きました。私は他の誰よりも留学期間が長く、帰ってから積極的に続けて行く自信がなかったたので、帰国して活動を再開することに大きな不安を感じていました。

しかし、帰国してみると不安だなんて言っていられなくなりました。夏に帰国して、すぐ新しい曲に取り掛かりました。自分が足を引っ張っている場合ではないと思っただけは、授業の合間に部室に一人でこもったり、先輩の自主練に参加させてもらったりして練習を

実感味わうことができました。それからは、難しい曲を始めるときも、口では「難しい、難しい」と言いながら、心のどこかでは「まあ、なんとかなるだろう」と思えるようになり、以前に比べてずっと気楽に練習を始めることができました。その頃は、まだ一つ上の先輩がリードしてくれていたというのも、ひとつ心の支えになっていたのだと思います。

しかし、ギリギリまで部活に参加してくれていた先輩もついに卒業という頃になると、部の不安点が浮き彫りになってきました。一番の問題は、先輩がいないことでした。先輩が卒業すると、私たち四年生だけになってしまったため、部の存続が危ういのです。入学式や新人生歓迎会に参加し、新入生たちに入部を呼び掛けました。何人か興味を持ってきて、体験まではいいのですが、実際に入部してもらうことはできませんでした。これは現在も残っている課題です。

問題はそれだけではありません。私たちは、今まで先輩たちに頼りきっていました。実力の上ではもちろんのこと、先生に対する礼儀や、部として学校側との

重ねました。そのとき思ったのは、たとえば一人で一時間練習するよりも、二人以上で十分練習するほうが上達するということです。人と合わせるには一人で練習することも必要ですが、ある程度弾けるようになっていくから一人で頑張ってもそれ以上は伸びないのです。入部したての頃、「箏は練習を裏切らない楽器だから」と言われたのを今でもすごくよく覚えていて、実際にそれを体感してその通りだと思えます。しかし、一人で頑張っていたつもりでも、やはり箏もチームワークで成り立つものなのかもしれません。

その年、私は『千鳥の曲』で、初めて演奏会に参加しました。この曲は、『六段の調』『春の海』と並ぶ、箏曲にとつてとても重要な曲です。私がそれまで演奏してきた曲の中では一番難しく、はじめは全く弾ける気がしませんでした。しかし、この曲が弾けるようになったことで、自信が持てるようになりました。演奏会が無事に終わり、大学祭でもこの曲を演奏して、卒業した先輩に「お琴すごく上手になったね!」と褒められてもらったとき、今まで箏をやってきた中で一番の充

やりとりなど、いつも先輩たちのあとにくっついて、言われたときに気がついてやるという始末でした。特に私は、演奏会にもこの前初めて出たばかりで、部を運営するにあたってしなければならぬことを何も知らずに部長になってしまいました。部のことは、リーダーセミナーや部長会の集まりで少しずつ知っていくことができましたが、一番恥ずかしかったのは、演奏会に参加する際、自分の先生や他の社中の先生に対する礼儀がなっていないことでした。大学から出て演奏するということは、ただの大学生ではなく、先生の弟子として見られるということをきちんと理解していなかったのです。合同練習に参加しても、他の先生方の顔と名前が一致せず、あいさつもろくにできずに、とても失礼なことをしてしまいました。忙しく動き回っていらっしやる先生方に声をかけるだけでも緊張して、あいさつが遅くなったことを詫び、あいさつすると、優しく丁寧に返してください、とてもほっとしました。しかし、あの時の緊張感は一生涯忘れないと思います。



偉い先生に限らず、外部との交流が苦手な私は、その点で随分と他の部員に

協力してもらいました。今年の六月にRIFAからの提案で、留学生の前で演奏する話を実現したのですが、これも他の部員が提案者の方との間で橋渡しをしてくれたからこそでした。部員が全員四年生ということ

で就職活動や卒業論文など、やらなければならぬことは部活以外にも山ほどあって、協力しあわなければここまで来ることはできませんでし

た。私が会議に出られず代理を頼むこともしよつちゅうでした。そして何より、今年一年、皆が部活を続けてくれて、予定していた演奏会をすべて無事に終わらせられたことに感謝したいです。

特に大学祭では、直前まで他の演奏会があり、その練習にいっぱいいっぱい、文化祭で何を演奏するかどころか、何曲演奏するのかさえ決まっておらず、更に初日のオープニングセレモニーで演奏することも決まっていたので、正直、全員逃げ出したい気持ちでいっぱいだったと思います。急いで曲を決めて、わかりやすくアレンジしてもらっても、全員の予定が合わずにバラバラに練習する日が続きました。全員でまともに合わせてられたのは、たしか文化祭当日のリハーサルだったと思います。本番は予想以上のお客さんが入ってくれて緊張しましたが、成功したと思っています。同好会から部へというちようど変わり目の時期に活動していて、多くの戸惑いや葛藤を経験しましたが、続けてこられたのは多くの方の支えと、忘れられない達成感があったからです。

【麗大生の今】④ 音響・照明委員会

感謝の心

音響・照明委員長 川手飛鳥

(日本語・日本語文化専攻三年)



音響・照明委員会。この名前を聞いたことのある人はどれくらいいるのでしょうか？ おそらく知らない方がたくさんいらっしゃると思います。裏方の仕事なのでしようがないのですが、このような素敵な場をいただいたので、まずは皆さんに音響・照明委員会の活動内容から知っていただこうと思います。その次に、私がどのような思いで音響・照明委員会をやってきましたかを記します。

私たちの仕事を簡単に説明すると、イベント主催のグループの方々やお客様により気持ちよく過ごしてもらうための環境を作ることです。スピーカーを設置

し、マイクを用意し、声や音楽が観客席のどこでも聞こえるように用意する。明りが必要な場合は照明を用意し、舞台上上がる人が見えるようにサポートする。これらが基本の仕事です。

今回はこの基本の仕事だけでなく、裏方の裏のことまで知っていただきたいです。とても奥深く、知っているライブ会場などで、なるほど、と思うような知識もありますので、難しく思わず気軽に読んでいただきたいです。

音響さん、と呼ばれる私たちは会場に着く前にもやる事が三つあります。一つ目は打ち合わせ。当たり

前ですが、イベント内容とスケジュールがわからなければ始められません。二つ目は機材決め。イベント内容や会場に合わせてスピーカーの数やマイクの数、どのくらいの大きさの音にできる機材を持っていくかなどを決めます。三つ目は機材チェック。機材を持って行って「音が出ません」「壊れていました」では、どうしようもありません。機材チェックは裏方の裏の裏、もっとも日の当たらない作業ですが、とても大事な作業なのです。

さて、ここまででやっと本番当日を迎えられます。本番当日でやることを、順を追って説明したいと思います。機材を搬入してまず取り組むことは、結線という作業です。音を大きくするアンプ、音の質を整えるイコライザー、マイクやBGMなど一つ一つの音を調節するミキサー、そして最後にマイクをつなぎます。覚えてしまえば簡単なことなのですが、一つでもミスをするとう音がなくなってしまう。次に結線チェック。すべてのスピーカーから音が出るか、すべてのマイクが音を拾うか、つないだものすべてをチェック



のです。ライブを例に挙げると、ミキサー（一つ一つの音を調整するところ）では、ボーカルに始まり、ドラムやギターも一つ一つ音量や音質を調節しています。リハーサルで音を決めていますが、そこは本番。カッコよく魅せるために音響も照明も全力で協力

します。ギターソロがあれば音量を上げ、スポットライトを当てています。舞台上では、転換をしたり、スモークをたいたいりしています。スモークは、照明

します。それで音が出たら、音量チェック。「ハー、ハッ、ハー。マイクチェック。ワンツー」などと舞台上で話しているのを聞いたことがありますか。音量がちょうどいいか確かめています。皆さんもカラオケに行ったときにマイクの音量や音楽の音量を決めますよね。それと同じことです。もし見かけたら温かい目で見守ってください。舞台上上がって何だあいつ、みたいな目で見られるのは結構恥ずかしいのです。音量が決まると、ハウリングチェックをします。マイクをスピーカーに向けると、キーンという音がしてしまいますよね。それを消す作業に入ります。イコライザーという機械を使って、少しずつ消していきます。これが厄介な作業です。五〇〇ヘルツとか四キロヘルツとか一つずつ周波を切っていくので、慣れるまではとても大変でした。ハウリングチェックが終わり、ここでやっとイベントの団体に会場を渡すことができます。

では本番中は暇なのではないか、と思われるかもしれませんが、しかし、本番中もやることはたくさんあります。綺麗に見せるための煙です。タイミングを見計らい、もくもくとたいています。転換は、マイクを出したり、しまったり、機材の位置を変えることです。これは以外にも難しく、コードを綺麗にさばきながら出し、ボーカルの方の口の高さにマイクを合わせて置く。これはお客様から見えるので、スマートにできなければなりません。また、ドラムのセッティングは毎回変わるの、ドラムのパーツごとにほぼ一本あり、全部で八本にもなるマイクのセッティングも毎回変えなければなりません。

本番が終わったらコードをすべて外し、倉庫に片付けます。片付けたら次のイベントに備えて、また機材のチェックをします。

私たちの活動の流れはこんな感じです。このようなことを入学式や卒業式、校内で行われるイベントや麗陵祭でやっています。普段意識されることの少ない委員会なので、少しでも「へえ、そうなんだ」と思っていたらそれだけでうれしいのです。さらに、会場で温かい目で見守っていただけたらもっと嬉しいで

す。

ここまで長々と活動内容について書かせていただきましたが、これらの活動一つ一つにたくさんの方の協力があります。決して一人では成し遂げることのできないことです。

私が委員長になり、目標としたのは「まじめに楽しく、大切にしたのは『感謝の心』です。私が委員長に成りたての頃は、初めからうまく行くはずもなく、よく失敗しましたし、よくくじけそうにもなりませんでした。もう委員長を辞めてしまおうか、なんて考えたこともありません。そんなとき思い浮かぶのは、委員たちであり、イベントを行った団体の方であり、お客様でもありました。委員たちが楽しそうに一生懸命仕事をしている姿や、私の失敗をきちんとフォローしてくれたことにいつも助けられました。イベントを行った団体のお手伝いはとても助かりましたし、感謝の言葉、笑顔には疲れを吹っ飛ばせるくらい大きな力を貰いました。お客様が喜んでるのを見て、私も同じだけうれしくなったように思えました。こんなに私の周り

にはいいことが溢れています。委員会に入ったからこそ見える景色であり、委員長になったから気づけたことだと思えます。

これらのことに気づいたのがいつだったかは正確には思い出せません。しかし、この人達のために頑張りたい、もっと成長したいといつの間にか思うようになっていました。感謝の気持ちに最大限の感謝と努力で応えよう、と。そのためには楽しいことだけではなく、面倒くさいことやなかなか達成できないイライラとも向き合わなければいけません。私は座学よりも自分が動いて習得することのほうが得意だったので、本を読んで学ぶ、インターネットなどで調べるのは苦手でした。それでも、説明書や本などを参考にし、少しずつではありますが知識を増やしていきました。また、ハウリングチェックの練習は部室でこっそり行っていました。なかなか思うように音が切れてくれなくてイライラしたことも多々あります。しかし、まじめに取り組むということが楽しみに繋がる、というように思い努力しました。

個人的な見解ですが、最近楽しみというものが笑顔

でいられることだけだと思っっているような人が多いように思われます。私はそう思いません。新しく難しいことに取り組むこと、式典などの失敗は許されない場のプレッシャーと戦うこと、自らの失敗と向き合って最善の解決策を見出すこと、仲間と半分はケンカのような話し合いをすること。これらのことだって、仲間がいてより良いものにしようにしなければ得られないものです。乗り越えることの楽しさ、乗り越えた後のやってやっただけといった達成感。すべてまじめに取り組んだからこそ得られる楽しさです。

私は不出来な委員長であったと思います。しかし、その私が今委員長として存在し、たくさんものものを得られたのは周りの人たちの支えあってのことです。お客様やイベント主催団体の方の笑顔には大きな原動力をいただきました。委員たちには記しきれないくらい助けてもらいました。学生課や施設課の方にはたくさんの方のフォローをしていただきましたし、広報室の方にはこのような素敵な場もいただきました。ここには書

ききれないくらいたくさん支えていただきました。

最後になってしまいました。ここまで支えていただいてありがとうございます。音響・照明委員会はこれからも委員一丸となって邁進していきますので、よろしく願います。

将来に繋げていきたいこと

学友会会長 西本 瑠依

(ドイツ語学科四年)



私はこの四年間、学友会活動に参加して様々な経験をしてきました。毎年違う喜びや問題が起き、その時の状況やメンバーの考えの方によって出る答えは毎年異なり、その度に自身の考えの甘さや周りの支えがどれだけ大切なものなのか実感してきました。特に平成二十二年度は学友会会長という役職に就き、様々な部活動やサークル、多くの人に関ってきました。その中で私が四年間学友会活動に参加してきたことを踏まえ、大切だと感じたことが三つあります。

まず一つ目は日々の感謝についてです。新しいサークルが増え、学友会会員が多種多様に活動していま

す。現在まである委員会・部活・サークルは、伝統を引き継ぎ、各々メンバー同士や様々な人に喜んでいただいたり、知識や技能の向上を掲げて活動しています。それに加え、平成二十二年度は自分たちで新たなものを考えたり、また、既存の団体と互いに向上していくために、敢えて競合する団体を立ち上げたりなど、多くの動きが見られました。その中で私が注目したのは、RetireeとTask forceという団体です。Retireeは私たちが通い、学んでいる場である光ヶ丘を活性化していくために活動しています。また、Task forceは学校の活性化を図っており、学内紙の発行の企画など

も考えています。このように、自分達が日ごろお世話になっている地域や人々のために何かしようと考えている人たちが集まり、自ら行動を起こしているという点について、私は改めて、感謝という言葉を忘れてはいけないと感じました。自分たちが麗澤大学に通い、学んでいること、教職員の方々や友達と繋がりが毎日過ごせること、今の自分が有意義な生活を送ることが出来ているということは当たり前のことではないのです。感謝のために何か特別な活動をしなければならぬというわけではないと思いますが、これからも、この当たり前に過ごしている日々に関わる人々、環境に感謝していきたいと思います。また、そのように誰かのために活動している人たちと話を交わし、何かしら力になれるところがあれば協力していきたいとも思いました。

二つ目は信頼していくことの大切さについてです。様々な団体と関わるという面で、私の所属する学友会本部では、自分たちのことも信頼してもらい、また、私たちも各団体の人たちのことも信頼していかなけれ

ば、互いにより良い方向に向かうことが出来ず、活動に支障をきたしてしまいます。私たち四年生が卒業しても自分たちのいた委員会・部活・サークルは存在し続けます。後輩のため、将来に向けて考えていくためには、互いに話し合っていくことが大切だと実感しました。平成二十二年年度、私は自団体でも、他団体でも、人との信頼関係という面でもとても悩んできました。それぞれの考え、想いがあり、各団体は活動しています。各々が思っている、言葉に出さなくては伝えたいものも伝えることが出来ません。委員会や部活、サークルに限らず、不安を抱えたり、悩んだり、主張したい時など、少しでも人に伝えるべきだと思った場合は言葉を交わし、互いに納得いくまで話し合い、将来へ繋げていくことが大事だと考えました。

三つ目は周りの人の支えの重要性についてです。一人では生きていけない。まさにその通りだと学友会活動を通して感じました。課外活動をし、個人ではなく団体で活動していく上で、メンバーと連携していかなければ、自分たちだけでなく、周りの人にも迷惑

をかけてしまいます。仕事面だけに限らず、困った場合や悩んだ時に支えてくれたメンバーや友達がいたからこそ、私は今まで前に進んでこられたのだと思います。課外活動に限らず、友達と仲良しでいられるのも、互いに相談し合ったり、支えあってきたからこそで、そのために友情が成り立っているのだと思います。周りに支えられてきた分、自分もそれに見合ったことを返すことで、周囲の人と共にこれからも成長していきたいと思っています。

私は大学を卒業し、社会への第一歩を踏み出します。学友会活動に携わってきたこの四年間を思い出し、感謝をすること、信頼し合っていくこと、周囲の支えがあることを忘れず、それらを心に留めておきながら過ごしていきたいと思います。当たり前のことを当たり前にこなすことは、実はとても難しいのではないかと思います。そのため、社会人になっても、この三つのことを当たり前だからと楽観視するのではなく、時々自分に問いかけ、振り返り、改善していくことで、将来に繋げていきたいと考えました。

麗澤大学に入学し、嬉しかったことも大変だったことも経験し、その度に話を聞いてくださった教職員の方々に、学友会活動を通して出会った人たちや友達、大勢の方々に感謝しています。これからも日々成長していくことを心がけながら、今度は卒業生として麗澤大学や後輩の皆に対し、何か少しでも支えになればと思っています。

【麗大生の今】⑥ 麗陵祭

麗陵祭を通して、伝えたいこと

学友会麗陵祭実行委員会委員長 椎谷 太一

(経済学科三年)



第四十七回麗陵祭は、大盛況のうちに幕を閉じました。「Colorful Makers」というテーマを掲げ、様々な人が持つ色とりどりの個性をご覧頂きたいという願いを込め、我々麗陵祭実行委員会は一年間準備を進めて参りました。一人人近くの方に麗陵祭にお越し頂き、麗澤大学の唯一無二の個性を体感して頂きました。

まず初めに、ご来場下さった皆様、毎年ご理解を頂いている地域の皆様、陰ながら支えて下さった教職員の皆様、麗陵祭を彩ってくださったイベント、展示、出店各団体の皆様、麗陵祭に関わる全ての皆様に感謝致します。

さて、私はこの一年間、麗陵祭実行委員会という、百六十人を抱える組織のリーダーを務めて参りました。その中で、リーダーに求められる心構え、リーダーとはどうあるべきかなど、大切なことをいくつも学びました。それは、活動を通じて理解したことであったり、先輩から教えて頂いたことであったり、こうするべきだったと反省という形で気付かされたことであったり、形は様々です。今回は、私がこの一年間を通して学んだことを、私の経験談を織り交ぜて皆様にお伝えしたいと考えています。

リーダーたるもの、というより、リーダーだからこ

そ、謙虚さが必要である、と私は考えています。麗陵祭実行委員会には、委員長がいなければなりませんし、そうでなければ、麗陵祭は成り立つものではないかもしれませんが、同じく実行委員がいなければ麗陵祭は成り立つものではありません。委員長も、実行委員一人一人も、皆等しく大切な役割を持っているのです。

前年度、私は麗陵祭実行委員会で、学生が行うイベントのサポートを担当していました。そこでの実績が評価されて、委員長に抜擢されたのですが、いわば私は、委員長になった時点ではイベント以外の、出店や展示に関することや、麗陵祭の広報に関することは、あまり把握できていないといってもいい状態でした。もちろんその後、関連する資料に目を通し、最低限知るべき情報は把握しましたが、現場の合言葉ともいえる、「現場に立つ者だからこそ分かる」ことも多分にあるものと考えられます。そういった点に関しては、それぞれ担当する者を信頼して、任せることになりました。そういった意味で、前にも記した通り、麗陵祭は委員長だけで出来るものではないということが言える

のではないのでしょうか。言われる身にとつては、心に穴を開けられたような気持でしょう。また、言う身の気持も、落ち着きがなくなるものです。「言い過ぎたんじゃないだろうか」「あんなこと言わなければよかった、我慢しておけばよかった」という苛みに苦しめられるのです。いずれの立場にしろ、このような経験は誰にでもあると思います。

だからこそ大事なのが、その後のフォローなのです。私は、「怒る時は怒る、それ以外はそれ以外」というメリハリの付け方で、余計な不安やメンタルへの負担をかけないように、心配りをしてきました。後からそのことを蒸し返したりするのは、単に言われる者のモチベーションを下げるだけだと考えます。言う時に全て吐き出し、後は自分の意に沿ってかれているか見守るのが、最善の形ではないでしょうか。

また、「仕事と遊び」に関して、メリハリが必要であると考えます。我々も麗陵祭実行委員会の外を出れば、普通の大学生でもあるので、大勢でどこかに遊びに行くこともあるし、お酒をたしなむこともありま

と思います。自分一人の力ではなく、麗陵祭実行委員の力を借り、支えてもらうことによって、麗陵祭が初めて形作られるのだと考えています。驕らず、謙虚に、自らを支えてくれる人に接することが大切です。

メリハリを付けることは、団体を運営する上で、徹底して行わなければいけません。仕事をするにあたって、厳しい目を持ち、善悪を捉えることはもちろん大事ですが、それと同じく、下の者をフォローし、時には優しい目を持つことも大事です。このどちらか一方が欠けてしまつては、リーダーの思惑通りに団体は機能しません。このバランスを取ることが、メリハリを付けるということだと、私は考えています。

麗陵祭実行委員会は、二年生から役職に就き、自分の主な担当と言える場に立つのですが、最初の頃は残念ながら、「自分が上に立つ」という自覚が足りない為か、予想し得ないミスや、無責任な言動も見られるものです。そういった者には、厳しい言葉を突き付けなければなりません。そういった鋭い言葉を聞くと、肩を落として一日中落胆してしまう、という人もいる

す。そういった場では、仕事の話は避け、まずその場を楽しむべきです。真面目な話は会議で、という気持で、一転して会議や大事の話し合いの時には、遊び抜き笑い抜きで、真剣に話し合い、仕事をこなします。私や他の局長のそういった姿を評して、後輩からこのような言葉をもらいました。「遊んでいる時はただのバカだけど仕事になると声も顔も違う」。後輩たちも、私たちのそういった「ただのバカ」の面と「仕事」の面の住み分けをしっかり理解してくれているようです。心強いことであるし、感慨深いことでもあります。

リーダーは、感謝することを忘れてはいけません。私は今も、大げさな話でなく、麗陵祭を通じて私に関わってくださった全ての人に感謝しています。まず、前にも触れましたが、麗陵祭は私一人で作れるものではありません。まず、様々な仕事の面で私を支えてくれた実行委員会の一人一人に感謝しなければなりません。私は、実行委員一人一人に支えられてこそ、委員長の職をやり遂げることが出来たのです。麗澤大学の学生の皆様にも、イベント、展示、出店等、様々な面

で麗陵祭を盛り上げて頂きました。また、教職員の皆様からも、時には人生の先輩として、時には麗澤大学の先輩として、様々なアドバイスを頂きました。麗陵祭に毎年ご理解を頂いている地域の皆様にも感謝しなければなりません。去年までは毎年厳しいお言葉を頂いたこともあったのですが、今年は特にそれもなかったため、地域の皆様とも円滑に、スムーズに麗陵祭を行うことが出来たのではと考えています。そして何よりも、ご来場下さった皆様です。今年初めて来られた方、毎年来て下さっている方、様々な方がいらっしゃるのではと思いますが、麗陵祭を楽しんで、思い出を作って頂いたことで、私は麗陵祭を開催する者として、我が身のこと以上に胸が高鳴りました。

と、挙げればきりがありません。私は感謝しなくてはならない人がいるのです。そして、その感謝の心は、絶対に忘れてはいけけないものだと考えています。麗陵祭についてもそうですし、今後の私の生涯の中で、関わっていく人はたくさんいると思いますが、そういった人にも、同様に感謝の心を示して、接してい

かなければなりません。これはリーダーには当然求められることですが、それ以外の人にも是非知ってもらいたいことです。今後社会の中の一人として生きていく以上、絶対に人と人との「つながり」が生まれま

す。つながる人、そしてその「つながり」に感謝することは、万人共通で、人間として、大事なことでしょう。長々と書き連ねてしまいましたが、私は以上のことを達成できているかについては、実感としてありません。ただ、「委員長が椎谷でよかった」という言葉を聞くときに、「委員長としてやることのできた」と感じ、また、「委員長が椎谷でよかった」と感じさせることが出来てよかった、と感じました。その時に初めて、私がリーダーでよかったと、私自身が感じる事が出来ました。ある先生のお言葉をお借りします。

「リーダーも、下の者と一緒に成長していく」。私も麗陵祭実行委員会の他の者と同様、就任当初は未熟であったと思いますが、私をリーダーとして認めてくれた者がいて、ついてきてくれたので、私は自分の委員長としての仕事に誇りを持つことが出来ました。

【麗大生の今】⑦

「日銀グランプリ」への挑戦を通じて得たもの

武内 瑛紀

(経済学科三年)



感激の受賞

二〇一〇年十二月四日、私たち三人（佐々木拓見、小糸恵里子、武内瑛紀）は日本銀行副総裁を前にして、「日銀グランプリ決勝」の審査結果の発表を待つていた。敢闘賞か、優秀賞か、それとも最優秀賞か……。

「やるからには日本一を目指す」。そう決めてから六カ月間必死にやってきた。様々な思いが巡る中、私たちは結果発表のときを待った。

西村副総裁は一度顔を上げ、再度原稿に目を落としながら、おもむろに口を開いた。「最優秀賞は、麗澤

大学チームです」。その言葉を聞いた瞬間、私の中で何か弾け、涙がこぼれ出た。「今までやってきたことは間違っていないかった。自分たちは日本一になったのだ」という喜びが一気に湧き上がってきた。そして、ここまでの努力を思い出すと、嬉しさとともに、熱いものが込み上げてきたのだ。

指導して頂いた中島真志先生を始め、ゼミの先輩や友人からたくさんのお言葉をもらい、それらひとつひとつが結晶となり、今回、最優秀賞を受賞することができた。以下に、日銀グランプリへの挑戦のスタートから、決勝に至るまでの道のりを振り返る。

きっかけ

今回の日銀グランプリへの挑戦は、ゼミナールで「日銀グランプリという学生向けのコンクールがあるので、参加してみないか」という、中島先生の声かけから始まった。三年次からのゼミで金融分野を本格的



前列左から、武内瑛紀さん、佐々木拓見さん、小糸恵里子さん

に勉強し始めてからまだ日は浅かったが、佐々木、小糸、武内の三人で、とにかく挑戦してみようということになった。

今回の日銀グランプリのテーマは「わが国の金融への提言」であり、切り口は、わが国の金融機能への提言と日本銀行に対する提言、の二つであった。私たちは、新しい切り口である「日本銀行への提言」に的を絞った。これが、後に特別賞の受賞へと繋がることになる。

アイデアに至るまで

私たちが注目したのは、進展を続けているインターネット技術である。この情報革新の動きを日本銀行の業務に応用すれば、何か新しいことができるのではないかと考えたのだ。インターネットを通じて、金融に関する情報やデータを効率的に集め、日本銀行の政策に活かすことができなにか、そんなところから考えはじめた。議論しているうちに、「電子掲示板『2ちゃんねる』と『日銀』を組み合わせれば、『日銀チャンネル』になる」という発想が出てきたところから、一気にアイデアが具体化していった。ネット上の電子掲示板を使って、参加者間で金融に関する質疑応答がで

きないか、また、金融政策について参加者間の議論も行えるのではないか、といった具合に話が進展し、辿り着いたアイデアが、今回の発表テーマである「金融特化型SNSサイト〜日銀チャンネルの構築に向けて〜」であった。つまり、日銀が「SNS」（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）サイトを構築し、それを利用して、双方向で金融に関する情報の受送信を行ってはどうかという提案であった。

応募論文を書く

アイデアが決まったところで、役割分担をして応募論文を書き始めた。論文を書くことなど不慣れであったため、苦勞してやっと初稿ができ上がったのは八月上旬になっていた。さっそく中島先生に見てもらったが、私たちの自信に反して、指摘された項目は、予想を遙かに超えて多岐にわたり、また厳しいものであった。私たちの甘さも思い知らされた。真っ赤になった原稿を前に、ひどく落胆したのを今でも覚えている。それでも気を取り直して、夏季休暇中も三人で集

まり、アイデアの練り直しと内容の修正を何十回となく行なった。誰もいないキャンパスの暑さが印象に残っている。

決勝に向けた準備

日本銀行から決勝進出の連絡があったのは、十一月二日、忘れもしない大学祭の前日である。決勝進出は、参加百四チームのうち、わずかに五チームのみ。その朗報を聞いた時には、本当に嬉しかった。しかし、喜んでばかりもいられない。プレゼン資料の締め切りは、三週間あまり先に迫っており、決勝に向けての準備が始まった。

決勝の課題は、制限時間内で論文の要点をまとめ、説得力を持ってプレゼンテーションを行うことにある。そのため、プレゼン資料は、文章での説明は最小限とし、可能な限りビジュアルなものとするよう心がけた。

決勝前の一週間は、本番を想定した実戦練習を毎日のように行なった。中島先生やゼミの先輩、学部の友人

の前で発表を行い、審査員役で質問をしてもらったり、改善すべきポイントを指摘してもらったりした。答えられなかった質問については回答を準備し、万全を期して決勝に臨んだ。

緊張の決勝当日

日銀の支店長会議を開くという巨大な会議室での、日銀の副総裁や審議委員らの錚々たる審査員たちを前にした張り詰めた雰囲気は、これまでに経験したことのないようなもので、思わず心臓がバクバクした。プレゼンは、一番くじを引いた東京大学から始まり、私たち麗澤大学チームは四番目であった。私は他大学のプレゼン内容を理解しようとしたが、言葉はすべて頭の中を素通りしていった。

私たちの順番が回ってくると、不思議と緊張がほぐれていった。トップバッターの佐々木は全く緊張の色をみせず、朗々とした説明で出だしは好調であった。それに続く小糸も、練習通り堂々としたプレゼンであり、ポイントでは審査員の笑いも誘う出来栄であった。

ヨンなど、具体的な提言が多く盛り込まれていたことや、学内でアンケート調査を行い、それに基づいて現状分析を行った点などが高く評価されたようだ。さらに、日本銀行に対する優れた提言を行ったということで、特別賞も受賞した。予想もしない「ダブル受賞」であった。

日銀グランプリの経験から得たもの

今回、日銀グランプリへの挑戦を通して学んだことは主に三つある。第一に、挑戦することの意義であり、第二に、プレゼンテーション能力の重要性であり、第三に、チームワークの大切さである。

一つ目の挑戦の意義については、挑戦とはいわば、自分の限界を超えて「できないこと」を「できるようにする」ことである。挑戦し続ける人は成長し続ける人であり、今回の挑戦を通じて、自分たちの成長を実感することができた。

第二のプレゼン能力については、日頃よりゼミで徹底的に鍛えられているのだが、こうした訓練をまった

た。これで一気に雰囲気や和み、私も自信をもって、日銀チャンネルの内容について説明を行うことができた。難関となる審査員との質疑も、落ち着いて自分たちの考えを述べることができた。なんとかすべての質問に答えることができ、何人かの審査員は頷きながら聞いてくれた。



結果は、敢闘賞が東京大学と東京経済大学の二チーム、優秀賞が明治大学と広島市立大学の二チームであり、最優秀賞に私たち、麗澤大学チームが選ばれた。電子掲示板機能、動画学習機能、体験型アプリケーション

く受けていないと思われるチームもあり、自分たちの教育環境の良さを感じた。また、物事を分かりやすく説明するプレゼン能力は、社会に出て役に立つ重要なスキルであることを、改めて痛感した。

最後にチームワークの大切さである。私たちは始めた当初から、「チームで勝つ」ということを念頭において行ってきた。人はそれぞれ、得意不得意があるため、互いに補完しあうことが大切である。私たちは、常に意思疎通を図りながら協力し合い、まさにチーム一丸となった勝利であった。

最後になるが、ご指導頂いた中島先生や、ご協力頂いた教職員の方々、ゼミの先輩や友人には心から感謝している。こうしたご指導・ご支援があつてこそ、今回、「日銀グランプリ」で最優秀賞・特別賞を受賞することができたものと思う。この場をお借りして、深く感謝したい。

この経験を大きな糧として、更なる向上を目指し、今後も、様々な挑戦をしていきたいと思っている。

世界一周の旅

大野拓哉

(英語学科四年)



決断編

世界一周を決断する以前に、僕の中に「世界一周」という夢が出来たきっかけは、高校生の時だ。『毎日冒険』というタイトルのその本が、僕の人生を変えた。高橋歩という人の自叙伝だ。彼は、大学生時代にバーテンダーになりたくて、大学を中退し、大学の仲間と一緒に店を持つ、その後、自分の自叙伝を出したくなり、出版会社を作り、自叙伝を出す、その後、奥さんと一緒に世界一周へと旅に出る。

この本を読んだのがきっかけで、自分も世界一周に出てみたいと考えるようになった。大学三年にな

り、就職活動を周りの友人たちが始めた時期、自分は何がしたいのだろうか、どんな人生を送りたいのだろうか、と考えることが多くなった。

世界一周に行きたいという想いは、いつも心の隅のほうにあった。ただ決断することが怖かった。人と違う道を歩むことになる恐怖、このまま皆と同じように歩んでいけば、人生大きく転ぶことはないだろう。だけど、本当にそういう人生を送りたいのだろうか、本当にやりたいことはなんなのだと真剣に考えた。

僕はその瞬間に決断した。友人と遊んだ帰り道、駅でのプラットフォームで友人が、「じゃあ、俺こっち

だから！」と言って、電車に乗り遅れまいと帰宅を急いでいる群衆の中に紛れ、消えていったあの瞬間に。

準備編

決断してからは、旅行資金集めに明け暮れた。パスタ屋でのアルバイトのシフトの日数を増やし、他に警備員の仕事、お惣菜のパッキング、パンの製造スタッフの仕事などもやった。ある時は、夜九時から朝の五時まで働き、電車で移動している間に仮眠をとり、朝の八時から夕方五時まで働き、その後パスタ屋で働く、睡眠時間三時間というハードな日々を過ごした。

その甲斐あって、決断した二〇〇八年十月から出発の二〇〇九年五月までの七ヶ月間で百万円貯めることが出来た。

祖父との約束で、「拓哉が百万円貯めたら、じいちゃんが五十万円出してやろう！」と言っていた約束も果たされ、百五十万円になった。他にも、親戚からの援助金、ありがたいことに僕のために開いてくれた飲み会では友人たちからのカンバもあった。

世界一周へ(出発と帰国)

こうして旅行資金をかき集め、二〇〇九年五月三日に出発した。帰国は二〇一〇年二月二十八日。十ヶ月間の旅だった。

アジア・中国(香港、マカオ、中国本土)、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、インド、ネパール、中東・イエメン、シリア、ヨルダン、イスラエル、ヨーロッパ・トルコ、ブルガリア、マケドニア、アルバニア、クロアチア、イタリア、スペイン、アフリカ・モロッコ、北米・アメリカ、中米・メキシコ、キューバ、南米・チリ、ボリビア、ペルー、計二十五ヶ国の国々を回った。

アジア

中国 旅の始まりである中国。香港、マカオまでは良かったが中国本土に入った途端、英語が全然通じない。バス、電車、買い物、身振り手振りのジェスチャーで自分の行きたいところ、食べたい物を伝える。中国も文字は漢字だ。字体が違うものもあるが、同じ意味を表すものもある。筆談で自分の言いたいことを伝

える。

ベトナム この国は個人的に僕が世界一周中に食した料理の中で、一番に好きだろうと思われるフォーという料理がある。うどんのようなもので、パクチーが入っている。世界一周中に何度となく、様々な国で騙されたが、ベトナムでは旅に出て一番初めに騙された苦い思い出がある。ベトナムとラオスの国境で出国税を払うのだけれども、十倍の値段をとられてしまった。他にも、親切で案内してくれていると思っていながら、後々、お金を要求されたこともあった。しかし、旅のスタートで騙されるという経験をしたことにより、用心深くなり、命にかかわるような大きなトラブルには巻き込まれずに済んだのかもしれない。

ラオス ラオスの移動はとてつもなく怖い。断崖絶壁の山道をおんぼろバスで駆け巡る。本当に死ぬかと思った。

カンボジア 道端で蛇の串焼きを売っていた。なんでも経験だと考える僕は、早速この蛇を食したが、とてつもなくまずく、呑み込めなかった。

れるのだから、問題はないと思っていた。しかし、彼女の話を聞き、考えさせられた。僕が患者だったら、僕みたいな「死」を理解したいと言って看病を手伝っているものに、自分の看病をしてほしくない。死を理解したいからと言って看病するのと、この人の苦しみが少しでも楽になれば良いと思つて看病するのは、傍から見たら、同じように看病しているように見えるかもしれないが、内面は大きく違っている。「君の考えは違うのではないか。」と言ってくれた知人の思いやりの心を持って、その後、看病にあたった。マザーテレサも説いていた、無償の愛というものだ。十日間の間、ブツタガヤ、ブツタ悟りの地で瞑想修行をした。この十日間の間は、食べ物も精進料理、人との会話を断ち切り、音楽、読書も禁止されている。朝早く、五時頃に鐘の音により、目を覚ます。そして朝一番の座禅。瞑想は基本的に一時間だ。この一時間、足が痺れて、とてつもなく辛い。自分との闘いである。そして休憩、座禅、食事の繰り返しで一日が終わる。夕時、静かな、静かな時が流れる。誰とも言葉を交わ

インド インドは濃い国だった。ガンジス川には人の死体が浮いていた。ガンジス川で日食を見た。ガンジスで沐浴後、体調を崩し三日間、入院。死を待つ人の家、マザーハウスで一週間のボランティア体験。ブツタが悟りを開いた聖地、ブツタガヤで十日間の瞑想修行。マザーハウスでボランティア体験をした。人が死にゆく姿を間近で見たい。自分にとって人の死とは一体何なのだろうか。死ぬということはどのようなことなのだろうか。僕は純粹に死とはどのようなものなのかを理解しなかった。この話を、知人にした。「僕は人が死ぬところを見たいのだ」と。すると、「君は患者さんの気持ちを考えてのか。君が死にゆくときに、そんな気持ちを持っている人に介護されたいかい。人間を人間としてしっかりと見て」と言われた。この話を聞かされる以前の僕の考え方は、自分は患者さんの介護を手伝って、患者さんは僕のボランティアによって助けられる、僕は患者さんの介護をすることにより、死にゆく人の観察ができ、死をより近い視点で理解できる、お互いにとって、良い結果がもたらさ

さずに終わる一日。自分の内面を見つめ、静かな時を過ごす。

中 東

イエメン 日本との生活の違いにびっくりした。男性は白い衣装に、腰には短剣、頭には布を巻きつけている。女性の顔は全然見ることが出来なかった。皆、真つ黒な衣装を全身にまとい、見えているのは眼だけだ。僕がイエメンに行った時期は、調度、断食の時期で、昼夜逆転の生活をした。日が昇っている間は、ご飯を食べることが出来ない。日が沈んでから、ご飯を食べることができ。僕はひとりこつそりご飯を食べ



ていたが。

イスラエル 聖地エルサレムは嚴重に警備されていた。ライフルを持った警備員がいたるところにいる。ユダヤ教の聖地である嘆きの壁、イスラム教の聖地である岩のドーム、キリスト教の聖地である聖墳墓教会。岩のドームには入ることが出来なかったが、嘆きの壁の前で、多くのユダヤ教である人々が祈りを捧げていた。日本人と宗教について考えさせられた。世界を見渡すと、人々の暮らしと宗教は密接に関わっている。日本人、自分にとって宗教とは何なのだろうかと考えさせられる機会だった。

ヨーロッパ

アルバニア 名前も知らなかった国アルバニア。東ヨーロッパは旅してきたアジアに比べると物価は高いが、日本に比べると物価は安い。一泊、千五百円程度で宿が見つかる。宿泊した宿で、心から仲良くなれた友人が出来た。お互い母国語でない英語を使つてのコミュニケーションだった。これと比べて深い会話をしたわけではないのだけれども、お互い、笑顔でいると



ない。暗闇を遮る明かりもない。空には満点の星が輝いている。一生忘れることが出来ない絶景だ。

北 米

アメリカ アメリカは一ヶ月かけてバスで東から西へと横断した。ニューヨークからロサ

いう状態、ワイーリングが合っていた。僕が宿を出発するとき、彼は「ベストフレンド!」と言ってくれた。特別に長い時間を共有したわけではないけれども、旅をしていると波長がとて会う人に時々出会う。出会いは、旅で最も面白いことの一つだ。スペイン スペインでは美術鑑賞。ガウディ建築や、ダリ美術館、ピカソのゲルニカを見た。スペインの大きな劇場で演劇を見た。役者の中の白人に交じって、東洋人が一人いた。舞台後、役者が各々、名前を呼ばれて登場するところで、彼女が日本人だとわかった。世界で活躍している日本人を見て、誇りに思った。

アフリカ

モロッコ 世界を回って、多くの世界遺産、絶景を見た。カンボジアのアンコールワット、香港の夜景、ガングス川での皆既日食、トルコの Cappadocia、アメリカのグランドキャニオン、イースター島の夕日、ボリビアのウユニ塩湖など。中でも一番はモロッコのサハラ砂漠で過ごした一夜。砂漠は静かだ。何の音もし

端に消えてしまったのかもしれない。日本という国は豊かな国だ。日本よりも発展していない国へ行くとき、意識していなくても、心のどこかで、自分の方が上だと思ってしまう。しかし、その優越感のよくなるものは、その国で旅していく自分を守るためのバリアーのようなものだったのかもしれない。そのバリアーがなくなると、自分自身に劣等感を感じてしまう。アメリカに対してコンプレックスを感じてしまう。国と国との関係、過去の歴史、人種の違い、コンプレックスにはいろいろな要因が混ざっている。色々な理由から孤独を感じたが、一番大切なことは、自身に自信を持つことだ。

中 米

ンゼルスへ。アメリカでは孤独をより一層強く感じていたように思う。物価が高いため、ご飯はジャンクフードばかりだったし、宿泊費を浮かせるため、夜行バスばかり乗った。二、三日風呂に入れないのも我慢。うまく英語を話せないため、馬鹿にされたこともあった。今まで旅をしてきて、自分の中にあつた先進国である優越感みたいなものが、アメリカに降り立った途

メキシコ メキシコでは人の親切によくあい、お世話になった。電車の乗り換えが分からなく、訪ねたら、親切にも、自分たちはそこに向かう予定でもないのに、わざわざ乗り換え、僕が行きたい駅まで連れて行ってくれた。十ヶ月間の旅では多くの人の親切により、旅が出来た。騙されることもあるが、やはり世の

中、善人の方が圧倒的に多いと思う。騙そうとしようとする人間も、生活の困窮から、育った環境から、訳あつてのことだと思う。僕は世界一周の旅が出来るという素晴らしい贈り物に感謝しなければならぬ。日本という先進国に生まれたこと、親に大学にも行かせてもらい、休学も許してくれたこと、自分が健康であり、世界を回れる体力があること、生きて帰ってこられたこと、今生きていること、感謝、感謝である。

南 米

ボリビア ボリビアではポトシという街で鉱山見学したことが印象に深い。ポトシでは実際に地元の人が鉱山で働いているところを見学した。ダイナマイトを実際に使っているところを見学したり、一日働いても三ドルにしかならないと聞かされた。十二歳や、十三歳の子供が働いているらしい。世界を見渡すと貧しく、苦しい生活をしている人々が多くいる。日本がどれだけ豊かな国か実感させられることが少なくなる。

帰国後の現在

僕の行動を外から見たならば、二十五ヶ国の国々を回り、インドでの入院があったり、アメリカのブロドウェイを見たり、モロッコで満天の星空を見上げたりにしていたということになるのだろう。しかし、重要なのは僕の内面の変化である。僕は生れて初めて、本当に一人きりの時間、孤独の時間を持ったように思う。大学にいた頃は、学校に行けば、友達がいた。家に帰れば、家族が待っていた。一人で過ごすという時間を知らなかった。しかし、旅に出ると当然ひとりきりだ。自分を知っている人間は周りには誰もいないのだ。旅の間に出会いもあったが、ほとんどの時間を一人で過ごしたことになる。朝起きてから、夜眠るまで。寂しくて、孤独で、泣きたい夜もあった。いや、実際に泣いた夜もあった。だけど、この経験が今、振り返ってみれば重要な出来事だったように思える。この孤独の時間が、自分の心の奥深くへ入っていく、思索することの大切さを教えてくれた。

知恵と工夫に心を添えて

常務理事・事務局長 長井孝介



私は昭和三十八年に麗澤高校に入学しました。中学三年生の時に、志望する高校を決めるにあたり、自分は将来どのような人間になりたいかを考えました。その時考えついたのは、社会に役立つ人間には「偉い人間」と「賢い人間」がある。「偉い人間」とは人の嫌がることでも進んでやる、人のために尽くせる人、「賢い人間」とは頭がよくて、なんでもてきぱき要領よくこなせる人だと思いました。私の結論は「偉い人間」になりたいでした。それには道徳教育を基盤とした寮生活が体験できる麗澤高校に行くしかないという自決め、両親にそのことを話したことを覚えています。

高校生活の三年間はあっという間でした。卒業を間近にしたある日、部屋つ子連れて学校内の写真を撮って回った時の一枚に、教室の黒板にチョークで『社会の為に』と大書きした写真（次頁）があります。これを見ると入学時の気持ちを卒業までなんとか持ち続けていたのかなと思います。

昭和四十六年、大学卒業と同時に文部科学省の関係団体である特殊法人日本私学振興財団（現、日本私立学校振興・共済事業団）に入職し、以来三十七年余り私学振興に関する業務に携わってきました。財団は国の政策を実行する機関という性格から、ともすれば合

規性・慣行性が重視されがちとなり、職員は業務を無難にこなすことを第一義に考えるのが一般的でした。職員が個人で独自の判断を下すというようなことは、まずもってできないことでした。



平成五年四月、私は融資部債権管理課の専門職（課長補佐）に配属となりました。主な仕事は、学校法人に貸し付けた債権で、返済が長期に滞っている債権の回収と担保の保全などでした。異動して間もない頃、ある課員から「長井さん、嵐の後の異動でよかったですね」と言われました。その嵐とは、北海道にある幼稚園法人のA法人（財団融資の滞納法人）とB法人とが長らく土地問題で争

っていて、私の異動前の三月に、そのB法人の理事長が、「この争いの原因は財団にある、責任を取れ」とすさまじい勢いで債権管理課に怒鳴りこんできたことでした。

この土地係争事件とは、滞納法人のA法人が、地元金融機関から担保物件の園舎・園地を競売にかけられた時、財団だけは園児が残っていることを理由に、その競売には同調しなかったため、B法人が競落したものの、園舎の敷地の一部（財団の担保部分）がA法人の所有のままになってしまったのです。B法人は、競落後自分の幼稚園として認可を受けるため道庁に届け出をしたところ、A法人の所有になったままの土地について長期借用契約を結ぶことを義務付けられました。A法人はこれを逆手にとって、相場をはるかに超える高額な賃貸料を要求し、B法人は認可の期限が迫っていたため、不承不承その条件を飲まざるを得ませんでした。最初のうちは契約通りの賃料を支払っていたのですが、そのうちB法人は我慢できなくなり、勝手に法務局に賃料の供託を始めたため訴訟事件へと発

展したのでした。数年間、裁判所による調停が続いているにもかかわらず、一向に埒が明かないこともあって、それがあの三月の嵐となったようでした。

私はその話を聞いた時、この案件だけでは係わりたくないと思っていました。そしてその記憶が薄らぎ始めた一年後の二月、ことが起こりました。B法人理事長名で内容証明付きの文書が届いたのです。内容は、A法人の悪辣さを書き連ね、最後に財団が滞納法人のA法人に対し担保物件の競売等、適切な措置を即座にとらなければ、関係議員に訴えて国会質問事項に取り上げてもらうというものでした。

私はとうとう来るべきものが来たと思えました。財団の関連することで二つの法人が争っている。しかも純真な幼児を教育する幼稚園の経営者が裁判沙汰の争いをしているのです。自分に何ができるだろうか、と考えるに考えました。逃げちゃいけない、これも社会の為だ。私はこの問題に真剣に取り組むことを決心しました。

私は競売ではない三方よしの姿を思い描き、対応手

順をまとめた基本方針を作成し、上司に提案しました。土地紛争の調停など財団がやることではないとの反対意見もありましたが、なんとか了承を得ることができました。これから先はしたたかな両法人が相手ですから、調整役とはいえ対応を誤ると今度は私（財団）に矛先が向かないとも限りません。これは大きなかけでした。しかもよく考えてみると、裁判官や弁護士という賢い先生方の知恵や工夫をもってしても、この問題は片付いていないのです。知恵と工夫に加えて必要なものは一体何だろうか。それは双方に安心してもらうこと、そして相手を思うこと、その気持ちだけは忘れないようにしようとする時思いました。

いよいよ三月から折衝が始まりました。両法人の交渉担当者にはまず電話で、私が窓口の任に当たることを告げました。その後何度かのやり取りを重ねていくうちに、双方から信用されるようになってきた感が出てきました。私は自分の立てた基本方針に沿って、適正な売買価格による任意売買で解決しようとする度にも働きかけました。競売に固執していたB法人が任意買収の

意思を示すまでに実に五カ月を費やしました。

それからは条件面の折衝に移りました。私は、お互いに吹っかけたり値切ったりせず、あくまでも市場価格を参考にしよう説得しました。双方から裁判所に提示した価格には予想通り大きな開きがありました。裁判所は具体的な調整は何もしませんでした。私は、弁護士に任せっきりにせず当事者同士で話し合いの場を持つよう何度も要請しました。ようやく当事者同士の話し合いの場を持つことが決まったのは、任意買収の合意からさらに五カ月が経っていました。

いよいよ条件交渉の日を迎えました。私は今すぐにもその場に飛んでいきたい気持ちでしたが、その協議が終わるまで財団で結果の知らせを待っているからと伝えました。吉報が届きますようにと祈るばかりでした。その日の夕刻、リリーン！机上の電話が鳴りました。待ってましたと取り上げた受話器の向こうから聞こえてきたのは、今日の協議に立ち会っていただいたA法人の税理士さんからの声、「長井さん、ダメです。交渉決裂です。」でした。条件面で多少の歩み寄

りはあったものの、どうしてもB法人が納得せず、交渉は暗礁に乗り上げたということでした。

私は双方の当事者にかわるがわる電話口に出てもらい話を聞きました。私の喉はもうカラカラでした。私は振り絞るように言いました。「今まで皆さんの積み上げてきた苦労と努力は本当に大きかったですね。せっかくここまでやって来たのに、また逆戻りで本当にいいんですか。私が前から考えていた案を話すので、それでもう一度話し合ってもらえませんか」。そう言って電話を切りました。それからものの五分も経たないうちに再度電話が鳴りました。先程の税理士さんからでした。「長井さん、二人に何を言ったんですか？長井さんとの電話が終わった後、再交渉が始まったんですが、それがすぐに決着したんですよ！」弾んだ声でした。決着額は私が提案した通りの額でした。私はヤッターと叫びたい衝動をぐっと抑えて、課員がガラスについてくれていたジュースを一気に飲み干しました。心にしみる味がしました。

コラム

麗陵祭実行委員会の活動

——引き継がれる伝統、そして絆

学務部副部長 田島 正幸



麗陵祭は、麗陵祭実行委員会メンバー百六十余名（学生組織としては最も多い人数）によって構成され、約半年以上をかけてこの祭典を作り上げる。実行委員会は、実行委員長のもとに本部、対外局、総務局、広報局、装飾局、企画局で構成（年度によっては組織が変更される）され、そこにサポート役の音響・照明委員会が加わる。業務を割り当てられた各局では、局長・副局長・会計を中心に実施のための準備が行われる。そして、局ごとに揃いの色のジャンパーを着る。この上着が、彼らのプライドでありステイタスとなる。

麗陵祭実行委員会の実行委員長を含め、局長などの役員（トップと呼ばれる）は、祭典の終わった翌月十日には、次年度の実行委員長、副委員長、本部会計の役員を決めて、引き継ぎを兼ねて大学関係者を交えたの反省会を開催する。そしてバトンタッチされたメンバーによる次年度の活動が始まる。翌年二月には谷川セミナーハウスで開催される「リーダーセミナー」に参加、リーダーとしての心構えを学び運営方針など決める。前後して、実行委員会はトップ合宿を開催し、特色をもたせたテーマを決め、組織作りを行う。その後四月に新入生が加わり、百六十名余りの実行委

員会となる。こうして、各局は、分担された祭典の仕事で、それぞれの局長は仕事内容によって班を編成し班長をとりまとめながら具体的な作業を指示し、他の局との調整を図っていくのである。

実際に活動を始める四月頃からは「前任の局長はよかつたのに、私には先輩のように出来ない」と悩むトップ学生や、「メンバーとの意思疎通がうまくいかない」「予定通り進まないどうしたらいいのだろう」などと不安を訴える班長などが、なかなか組織がまとまらないなど様々な悩みや不安を持って学生課の窓口を訪れる。そのような時、学生課のスタッフも忙しい手を止めて、親身になって彼らの悩みに耳を傾け、いつしか実行委員会のメンバーとの信頼関係が生まれていく。夏休み期間中、それぞれの局は親睦を図るため合宿を行ったりして絆を深めていくが、この頃になると、相談に訪れる学生は焦りを感じながらも、以前と比べれば自信を持ったような顔つきになっている。あのトップは、「私が喜んでやるのが、メンバーに安

このようにして、彼ら麗陵祭実行委員のメンバーは授業や課外活動の合間に、それぞれの仕事に精を出す。また夏休み期間中も、彼らの、このような涙ぐましい努力が続く。こうして、麗陵祭は開催されるのである。



また、開催期間中は、キャンパス内に泊まり込みで準備や来場者のお世話や各出店団体、展示団体などの調整を図るなど、まさしく休みなく動き回っている。おそらく、彼らのこのような献身的努力がなければ麗陵祭は開催されないだろうし、成功裏に終わることもできないのである。ある局長に、開催期間中は、大変だったのではと聞く

心や喜びを与えるのですね」と話してくれた。

対外局は、麗陵祭期間中に開催される展示やイベントに参加する学内のみならず外部団体を招致するための活動を始め、催し物をいろいろと考え準備する。総務局は、出店団体（屋台）の案内やお世話、また地域の方々と協力して実施するフリーマーケットの出店に向け日々苦勞を重ねる。また、出店団体の衛生管理や環境問題の意識向上のためにゴミの分別（十五分別）を実施することなどを検討する。そして再利用可能なトレーを利用するなど、エコ活動を推進するために幅広い仕事を手掛けている。装飾局は、装飾に関わる構造物などを計画し、その制作に取り掛かる。塗装を乾かすため、天気に一喜一憂する。企画局は、近年恒例となったお笑い芸人の選考、自ら企画・主催するイベントの出演者との交渉などに頭を悩ませている。広報局はパンフレットの製作、広報パンフレットに掲載する商店などの広告取りに東奔西走する。また、駅構内や車輛に掲載するためのポスターの作成、ホームページの作成と日々休む間もない。

と、「そんなことはなかったです。ほんとうに楽しかった」と話してくれた。「ただ、一、二年生の時は眠くて、睨きしたら朝になっていたくらいの感じでした」と話してくれた。これも成長なのだろうか。こうして、麗陵祭最後のイベントであるファイナレが終わると、多くの実行委員会のメンバーは無事に成し遂げた達成感という「喜び」を得る瞬間を迎えるのである。もう一つの麗陵祭

平成二十二（二〇一〇）年十一月七日（日）、三日間にわたり開催された第四十七回麗陵祭は、最後のプログラムであるファイナレが実行委員長の閉会挨拶と共に終わった。そして来場者が帰途につき、学生が解散した後、残っているのは実行委員会のメンバーと麗陵祭実行委員会を陰で支え続けた音響照明委員会のメンバーだけとなった。

会場周辺の明かりが消され、メインステージだけがライトアップされる。そこには、実行委員長を初め、各局の局長とトップメンバーが並ぶ。ステージの下には、局員が揃いのジャンパー毎に並んで座っている。

いよいよ、私が「もう一つの麗陵祭」と呼ぶ会が開催される。

名前を呼ばれた局長は、前に出るとスポットライトに映し出される。そして局長が一人一人自分の思いを話す。自分が多くの人たちに支えられて局長という仕事ができたと、いつも細かいこと言ってごめんなどいって謝り絆を感じましたと話す局長、そして班長一人ひとりに感謝を言う局長、涙で言葉が続かない局長、そして最後には多くの局長が「みんな好きです！」と叫ぶ。毎年、恒例のこの会を見られる私は、なんて幸せなんだろうと思う時でもある。

最後に実行委員長が挨拶をする。支えられて成功したことを感謝の言葉にしているのだが、もう何を言っているのか分からないほど感動している。感謝のスピーチの中で、前委員長に激励のメールをもらってうれしかったと話すと、集団の中で聞いていた前委員長は、「なんかうれしいですね」と言って照れていた。自分が通ってきた道だからこそ分かる思いやりのメールだったのであろう。

他に目を向けると、周りで様子を見ていたOBたちがビールかけの最中にも空き缶となったビール缶を拾い集めている。これも、毎年の恒例となっている。誰に指示された訳でもなく、黙々と空になったビールの缶を拾い集めている。胴上げの時には、すべて拾い集めているのだ。先輩がそうしてきたように、自分たちも同じようにしている。その光景を目の当たりにして、これも先輩とのよき絆なのだと思った。その後OBたちは後片付けを続けて三々五々引き上げていく。こうして、熱いが整然とした「もう一つの麗陵祭」が終るのである。

翌日、黙々と後片付けをする実行委員のメンバーは「無事に終わってよかった、多くの来場者に喜んでもらってよかった」と、それぞれの思いを語ってくれた。他人の喜びを自分の喜びとすることを学んだ学生たちが、そこにいた。先輩がそうであったように、彼らもまた、一回り大きくなったような感じがした。

ここに第四十七回の麗陵祭は、無事終了した。多くの学生が、この実行委員会に参加し、仲間を得て、相

今年入学した一年生の実行委員会のメンバーは感激して「私も壇上に立ちたいので、来年、再来年とがんばります」と答えてくれた。「先輩たちかつこいいで」と口を揃えて話す。百六十余名の学生が、大変だった仲間と共にやり遂げたという気持ちになった瞬間であった。

この光景を熱い眼差しで見守る集団がある。彼らは、この実行委員会の昨年のメンバーたちOBである。この中には、この日のために駆けつけてくれた卒業生の顔もある。彼らのお土産は、缶ビール。これも恒例となっている「ビールかけ」をするために、OBたちが買ってきて揃えたものであった。

いよいよ、一人ひとりのスピーチが終わると中央芝生に全員が移動する。置かれた缶ビールを中心に集まる。そして実行委員長の掛け声で一斉に「喜び」を表すためのビールかけが始まる。夜の八時、十一月の夜は寒いのだが、彼らは熱気で寒さを感じないのだろう。そして、どこからともなく胴上げが始まる。片方では、みんなで抱き合い涙している集団もある。

手を思いやることの大切さを学び、そして卒業していく。しかしながら、「もう一つの麗陵祭」で引き継がれた絆と「思い」は、変わらずにこれからも末長く引き継がれていくのだろう。多くの教職員に見守られて、来年もよりよい麗陵祭が開催されると確信している。

麗陵祭のあゆみ

麗澤大学の一大イベントである麗陵祭は、四年制大学となった後に始まっている。資料を見ると、一九五九（昭和三十四）年の開学当時は麗澤高校の文化祭と共同で実施されたようであったが、今でも恒例になっている英語劇、ドイツ語劇、中国語劇、日本語劇などは、これ以前からすでに行われていたように記されている。大学としては、一九六二（昭和三十七）年に記念すべき第一回の大学祭が始まったと記録されている。

今では、お馴染みになっている大学祭のテーマは一九六七（昭和四十二）年に開催された第五回からであり、それぞれのテーマは時代背景などから感じとった学生たちの思いが込められているようである。以下、麗陵祭の歴史を紹介する。

西暦	邦歴	回	テーマ	
1989	64/平成元年	26	僕たちに国境はない—We all are Friends—	
1990	平成2年	27	If We Can Run Freely —もし、僕らが自由に走れるなら—	
1991	3	28	世紀末大革命宣言 ～Nothing less than borderless and endless～	
1992	4	29	開花	
1993	5	30	出航	
1994	6	31	創造	
1995	7	32	挑戦	
1996	8	33	共鳴	
1997	9	34	Big Wave—Why don't you make it with us?—	
1998	10	35	Leap forward～一歩を踏み出せ！～	
1999	11	36	和～なごみ～ あなたにとっての「なごみの場所」へ	
2000	12	37	十人十色～みんなちがってみんないい～	
2001	13	38	向日葵～陽の射す方へ～	
2002	14	39	きらり☆～輝け！一番星～	
2003	15	40	一期一会～40回目の出会い～	
2004	16	41	Fun Fun ファンファーレ♪ ～第41章開幕！！～	
2005	17	42	美心伝心	
2006	18	43	"R"INK！～つながり～	
2007	19	44	愛' m h♡me (アイムホーム)	
2008	20	45	Road to …	
2009	21	46	BIG BANG	開学50周年記念、廣池学園創立75周年記念
2010	22	47	Colorful Makers	

西暦	邦歴	回	テーマ	
1959年	昭和34年		(文化祭、高校と共催)	麗澤大学開学
1960	35			
1961	36			
1962	37	1		第1回大学祭
1963	38	2		
1964	39	3		
1965	40	4		廣池学園創立30周年記念
1966	41			学祖生誕百年祭記念大学祭
1967	42	5	創造	
1968	43	6	孤立より脱却して歴史の一頁を我々の手で—主役は君だ—	
1969	44	7	現状に挑戦し、主体性を確立しよう	
1970	45	8	日常性への懐疑と思索から行動を	
1971	46	9	蜘蛛	
1972	47	10	動と静	
1973	48	11	われら麗大生	
1974	49	12	伝統と変革	
1975	50			モラロジー創建50周年記念大学祭、「麗澤大学15年の歩み」展
1976	51	13	原点に返り新たな前進を	
1977	52	14	結晶'77	
1978	53	15	青春建設	
1979	54	16	青麗—はばたけ20年—	
1980	55	17	維新'80	
1981	56	18	意識革命	
1982	57	19	原点からの出発	
1983	58	20	飛翔—はばたけ無限の可能性に向かって—	
1984	59	21	ああ言葉の新発見	
1985	60	22	What Can We Do? —心の飢えを感じて—	廣池学園創立50周年記念
1986	61	23	Campus Revolution	
1987	62	24	Our soul, Our Passion	
1988	63	25	The Times They Are A Changin'	開学30周年記念

千葉外事専門学校の発展的解消

麗澤大学名誉教授 池田 裕



「東亜専門学校」から「千葉外事専門学校」に至るまで、校名が目まぐるしく変わっていく経過を一覧してみよう。

『東亜専門学校』昭和十七年四月十五日開校。文部省の指示により昭和十九年一月三十一日『東亜外事専門学校』と改称。次いで、昭和二十二年一月十四日『千葉外事専門学校』と改称するに至る。

因みに、昭和二十二年の入学許可者は、二百四十六名(男子のみ)であったが、入学者は二百名に満たなかった。半年経った十月には百九十七名が在学していた。

翌昭和二十三年には、千葉外事専門学校は生徒募集を停止する。従ってこの千葉外事専門学校は昭和二十五年には廃校となり、その名誉ある校名を失ったのである。これがそのまま『道徳科学専攻塾高等部』(現在の『麗澤高等学校』)、麗澤短期大学英語科の発足となる。

さて、昭和二十年八月十五日、我が大日本帝国は、敗れた。「終戦」という名のもとに「敗戦」の憂き目を見た。この時点で、栄誉ある日本国は「占領下の日本」となる。因みに、昭和二十年八月十五日から同二十七年の間に発行された貨幣をよく見たら解る。即ち

それには、『日本政府』と刻印されている。現在ののは『日本国』になっている。敗戦国、日本であった証拠の一つである。

この未曾有の苦杯をなめた日本での、千葉外事専門学校は一体どうなったであろうか。勿論、戦争中、軍部に荷担したり、それほどでなくても、国粹主義的存在とみなされた学校は、廃校、あるいは校名変更によって難を逃れた。その一例、あの有名な拓殖大学は一時(占領が解除されるまで)紅陵大学と名を替えていた。官立学校で言うならば、神宮皇学館大学。これは廃校を命じられる。「国学院大学」も危なかったが、私立であったので難を逃れた、と聞いている。

そこでわが校は、大丈夫であったのか。心配なかった。あくまでも中正を歩むというのが、当時の校長廣池千英先生思想であり、実践方針でもあったからである。取れてもう一度述べるが、先生曰く「外では英語の授業をやめ、軍事訓練を盛んにしているが、わが校では、英語はやる、軍事教練は盛んにはしない」と、話しておられた。今にして思うと、よくもまあ、

あの悪名高い『特高』や『憲兵』につかまらなかったものだと思う。この件については後日談があるが、ここでは割愛する。

とにかく戦争には敗けたのである。近代に入って日本は何度か戦争をして来たが、敗けたことはなかった。従ってその「敗け方」を知らなかった。上手に敗けるハウ・ツーを知らなかった。そこへいくと「ドイツ」など同じ敗け戦であったにしても、「うまく敗け」たのではないかと察する。

わが千葉外事専門学校は、この「敗戦」の降り注ぐ火の粉をどうやって払いのけたのであろうか。まず敗戦前夜の先生や在校生は、どんな状態であったか。一部分ではあるが、左に紹介する。

頃は昭和二十年三月であった。九日の夜中から十日未明にかけて東京は大空襲で丸焼けになった。その頃のことである。大塚善治郎先生は、次のような文を綴っておられる。

ズシーン ズシーンと腹の底からえぐられるよう

な轟音と地響きが起こった。その時、私（大塚善治郎先生）は、学校の重要書類をリュックサック一つに詰めて、正門前の防空壕の入口に身を潜めた。ふと外を見ると、廣池千英先生が、いつもの和服姿で口にパイプをくゆらせながら、悠然として桜並木を歩いて行かれる。「危ない」と叫びざま、我を忘れて壕を飛び出し、先生のそばに走り寄った。その瞬間、先生の目の前の東屋トタン屋根に砲弾の破片とおぼしきものが、落下してきて、物凄い音を発した。血の気を失って立ちすくんでいると、千英先生は静かに後ろの私に振り向かれて、「大塚君、僕には弾は当たらぬことになっているんだ」と。

これは昭和二十年三月頃の話である。

それから「敗戦」をはさんだ前後の学校はどんな状態であったかを述べる。昭和二十年度（四月～八月）から始めてみよう。当時は「決戦教育非常措置」の閣議決定により、原則として「授業は停止」された。従って新一年生には四月に入学式が挙行されず、七月三

日になってやっと入学式が行われた。支那科、南洋科合わせて二百四十名の新入生を迎えた。

やがて、悪夢の如き敗戦（八月十五日）。八月三十一日（金）に次のような発表があった。

一、学校の今後の方針について

文部省の方針としては、GHQマッカーサーの指令を待たねばならない。九月中旬より、旧来に復して授業を再開することとなったが、それも自分の措置として、支那科、南洋科を解消し、新しい授業科目を仮定して進める。

一、英語百名、独逸語二十名、支那語六十名、マレ

ー語二十名、ロシヤ語二十名。

一、授業は午前中とし、午後は自由とする。

これは、計画はしてみたものの不具合が多発したので、結局、欧米科、大陸科とした。

明けて、昭和二十一年二月十二日（火）マッカーサー司令部の民間情報官ノルビル少佐とデレー教授は

宗教授（当時は伯爵閣下）の案内で視察のため来園する。

この年度の一学期は五月十日（金）に始まり六月十五日（土）に終業なっている。こんなに短い一学期は前代未聞のこと。一番大きな理由は、食糧不足であった。それでも全寮制を守っていた。（つづく）

編集後記

本誌は発刊当初より麗澤教育に携わる教職員さらに在学生や卒業生などの手記によって、さまざまな角度から本学の教育の特色を学内外に知らしめることをテーマとして出版されてきました。『麗澤教育』第十七号は自校教育と新校舎「あすなろ」の完成についての記事の特集となりました。巻頭に新校舎の完成に対する中山理学長の新生麗澤大学にかける抱負を特別寄稿として掲載しました。自校教育については担当者による教育内容の紹介と抱負を寄稿していただき、さらに新校舎の設計を担当された柳瀬寛夫氏（岡田新一設計事務所）には、新校舎建設の理念について寄稿していただきました。

また平成二十二年度より新任教員の研修を開催し、それに参加された教員の手記を収録することができました。さらに「卒業生の今」および「麗大生の今」のコーナーには多彩に活躍する卒業生・在校生の手記を収録しました。コラム欄に収録した記事は、ともに自校史を知る上で貴重な内容となっております。

これらは総じて麗澤大学の教育の特色とその成果を示すものであり、学内外の多くの方にお読みいただき、本学の教育の特色をご理解していただければ幸いです。なお、今後「自校教育」の授業を履修した学生の感想や学生の諸活動に表れた教育の成果などをテーマとした特集を企画したいと考えています。

ご多用にもかかわらず、快く執筆をいただいた諸氏に対して心より感謝申し上げます。

出版委員会委員長 井出 元

出版委員会委員長 井出 元
委員（外国語学部） 石村喬・金丸良子・町恵理子・森勇俊
委員（経済学部） 佐久間裕秋・竹内啓二・立木教夫・花枝美恵子
委員 前川能教（企画部長）
事務局 今井昇・鳥潟貞幸・斎藤亜希子

『麗澤教育』第十七号

二〇一一年四月一日

編集 出版委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 〇四―七二七三―三〇三〇

印刷所 ベクトル印刷(株)

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー

